

382.1
K86a

日本風俗志
(三)



大東出版社

350

3821
KA86
a



— 大東亞圖書公司 —

大東亞圖書公司





筆氏穂百福平

女 扇 大

はしがき

本巻には北陸並に近畿地方を収む。古來北陸地方は海運の都合や宗教上の關係にて近畿地方の影響を受くること比較的多く新潟（越後佐渡）より次第に西して富山（越中）石川（加賀、能登）福井（越前、若狭）と日本海々岸を西して次第に近畿に接するの順序を以て叙述し、近畿は普通關西地方又京阪地方といはるゝ京都、大阪二府並に奈良、兵庫、和歌山三縣を以てしたが、其の所轄は五畿内以外山陰（丹波、丹後、但馬）山陽（播磨）南海（紀伊、淡路）の三道に及び、裏日本と表日本とを合せさまざまの様相を呈するも、悉く京阪の文化圏に屬するものにして、遠く望めば一抹同様の關西側色彩あるを見るのである。近畿地方は久しく日本風俗の源泉を爲し、其の流風遺俗の所在に殘留するも

他面には近年に於て非常の發展を遂げ、特に都市に於て甚しく、其の人口に於ても本書所載の當時に比して今や大阪三百三十九萬、京都百十八萬、神房百萬、堺十八萬、尼崎十五萬、姫路十一萬、西ノ宮十萬に増加し來れる外、大阪に布施(十二萬)吹田(六萬五千)豊中(四萬六千)岸和田(四萬五千)池田(三萬六千)、京都に東舞鶴(四萬)福知山(三萬三千)舞鶴(二萬七千)、兵庫に明石(四萬五千)飾磨(三萬六千)洲本(三萬二千)の新市出で、和歌山には和歌市の二十萬の外に新宮(三萬四千)海南(三萬)の市制施行せられ、殆んど隔世の感を呈しつゝあることを記して、重刊の辭に代ふ。

昭和十六年初冬

著者識

日本風俗志(三) 目次

北陸地方

第一章 總説

表日本と表日本—日本海岸と太平洋岸—日本海岸の都會—自然と人生—樺の國—氣候の差—雪中の旅行具—降雪量—雪の市街—雪と出稼—雪と貯蓄心—北陸の宗教—未來教の盛行—本願寺の勢力—各宗の本山—基督教—神社教—一〇宮—國分寺—北陸と兵民族—遣戍人—蝦夷人—越の國—出雲族—韓民族—渤海族—南蕃船—史上の北陸—表日本—表日本の影響—上杉謙信—一向門徒—朝倉氏—前田氏—諸藩の配置—幕領—

第二章 越後、佐渡

越後及越後人—上越—中越—下越—越後人の氣質—越後人と信濃人—石油業—大地主—北越の三集—物質的方面—越後の宗旨—積立共済等の組合—越後織布—絹布業—御機屋—越後女と越後獅子—女の備—女機參詣—遊女—色〇港—新田名所—八百八福—角兵衛獅子—七不思議—火井と臭水—觀覽上人と不思議—御身佛と弘智法印—鐘懸—波〇題目—善忠—雪女郎と黒鳥兵衛—彌彦山と國上山

目次

伊夜比古神—彌三郎神—奉禮と山神—米山—奉禮と米山—米山甚句—海道と山間—鼠ヶ關—観不知—龜割敷—秋山郷—三田村—栗生島—祭祀奇習—花本神亭—比沙門の堂押—蔵王の堂押—彌彦舞—燈籠押—長者の傳説—藤千返—杖は白銀—傳説と縁起—海鏡淵—日裏上人—黒姫山—乙姫狐—青柳池—おまんこの井—馬の神—河童の囃ひ—お神が籠—人魚塚—岩の掛橋—夷と相川の小木—人情—黒木御所—佐渡と日裏上人—阿彌丸—土佐の三助—遺恨人限—安壽姫—佐渡の橋—彌三郎—八百比丘尼—大膳此—無名異—山の神—野呂麻人形—歳時其他の風俗—手懸け—延引—棒—虚座敷—鳥道橋—縁の祝—新潟の盆踊—長岡甚句—大助ぎ探り—佐渡の春駒—御所櫻—

第三章 加賀、能登、越中

三〇

百萬石の城下—尾山御坊—金沢の傳説—江戸と金澤—金澤の人氣—明倫堂—百葉社—地蔵殿—加賀人と越中人—加賀人—加賀人と前田利家—加賀アボ—越中人の長所短所—大聖寺の富山—萬代宮—寶壽行商の由來—本見の鏡研ぎ—九谷の陶器—高岡の綿物—白山と立山—奉禮の白山權現—白山と富山—千蛇ヶ池—雷鳥—立山地獄—立山傳説—白山との奇談—山間と海濱—五箇山のこきりこ踊—密陀僧の賣法—安島殿—安氣樓—御登半島—御登と伊豆—銀勇の傳説—石崎の風俗—穴水のツブレ—御登入—野呂渡—祭祀の奇習—七尾の山曳—舞臺、舞臺—御登比呼—生國王比古—能登角力—彌彦舞—白木御の神亭—佐助大明神—寺院縁起—那谷寺—日石寺—傳燈寺—總持寺—眼目山立川寺—立川山の靈堂—松ヶ嶽—白蛇と鯉—杜鵑の傳説—佛御前—門宮の婆—鶴とれず—子撫川—柳田明神—人柱、燒貨、比叡—神職—巻團子—煎團子—結婚と移儀—郵便取り—泣き男—サンサイ踊—

方言

第四章 若狭、越前

三二

教賀と氣比神宮—角鹿—日韓交通—氣比と佛教—金崎宮—松原神社—若狭の史蹟—福井並に越前人—男大孫王—福井藩—明道館—橋本左内—越前氣賀—羽二重—三國公—越前の三大河—白鬼女—九頭龍—九十九橋—三國女郎—越前と佛教—越の奉禮—牛頭天王—平泉寺—吉崎御坊—綠成谷—一向一揆—永平寺—證嚴明神並に若狭人—流雲の祭神—明神と佛法—若狭井—明神の影向—若狭の人氣—人魚の傳説—八百比丘尼—御淺明神—傳説と信仰—筑紫の玉孫—鏡寄—沖の石—東尋坊—辨ヶ嶽—曾根—大杉明神—雨乙の牛曳—牛神—若狭の網曳—丸岡の火祭—初穂—カンコ踊—盆唄—出産と結婚—成小娘—結婚と佛式—茶碗割—中若舞—

近畿地方

第一章 總説

三三

近畿の地と人—畿内と近畿—關東と關西との氣風—大和民族の發展—神武の東征—土蜘蛛—國史の中心—古代の遷都—奈良と平安—京都と近畿—公卿と武士—戰國時代—徳川時代—三ヶ津—禁裏領—幕領—藩領—社寺と宗教—官國幣社—各宗の本山—門跡寺院—基督敎—寺院數—一ノ宮と國分

第二章 山城

京都の今昔—山背—平安京—京の盛衰—京都市—京都人—名譽の中心—其氣風—公卿の位階れ—家
 の構へ—岩倉れ—江戸ッ子と京都人—京の四季—京の雨—馬琴の京都譚—山城人—東野に京女—京
 の名物—西陣織—友禪染—陶磁器—七寶—人形扇等—くさりの食物—花街遊藝—京の女—鳥原の
 由来—遊廊—都路—大夫の道中—藤原被敷—京の芝居—祇園會—牛頭天王—錦と山車—やすらひ祭
 と壬生狂言—今宮神社—やすらひ花—大念佛—阿彌堂—雲世圖—太秦の牛祭—廣隆寺—摩多羅神—
 祭文—要祭と時代行列—上下鴨神社—祭由來—加茂の體馬—平安神宮—時代祭—稻荷大明神—稻
 荷の名—稻荷と狐—正一位—初午—由緒ある神社—北野の平安祭—平野神社—松尾神社—梅の宮—
 石清水—武家と八幡—大原野と吉田—鞍馬と愛宕—魔王—寅の日—鞍馬の竹伐—火祭—芝罈樂—丑
 の時參り—太郎坊—土器投げ—清水と三十三間堂—田村窟—清水寺と僧信—天狗杉—大佛—三十三
 間堂の由来—大矢敷—諸宗の本山—本願寺史—仁和寺其他の門跡寺院—教王護國寺—供七日御修法
 —智積院—知恩院—屋敷裏の傘—百萬遍—西山派—京の五山—日蓮の代山—傳説と僧信—横笛—歌
 の中山—盛樂樓—日蓮風雲雨臺—蛇道心—雲滿寺—繪巻師—一條の辰橋—鬼頭天王—五道冥官—横
 瀬其他—大松明—大福寺の地蔵—終神社—鞍馬—新年と盆—桶の木の下—おけら詣—懸懸文夏—
 ちよるけん—左義長—六道の辻—大文字—よいきつき—年中行事—節分のお化け—柱松明—御影供
 —提燈—十夜—大原女其他—大原女と畑の姥—畑の姥の嫁入—小夜の語り

第三章 大和

大和及大和人—國の初—國名—文化の源—人國記—風俗の標準—奈良の都—奈良の名—南都の賦—
 春日神社と興福寺—祭神—田植祭—春日若宮の巫子—若宮祭—神鹿—角伐—興福寺と藤原氏—八重
 橋—大佛と二月堂—大佛の大き—今の大佛—大佛の保護—正倉院—其神祕—二月堂の大松明と本汲
 —三笠の山姥—南都の諸大寺—大和巡り—七大寺—雙心丹—文化史上の法隆寺—聖德太子の遺蹟—
 長谷の觀音—護法再神—光明皇太后—聖德皇太后—中野姫—神社雜記—三輪明神—大和神社—石上神社
 —廣瀬と龍田—丹生川上其他—天理教—三輪情話其他の傳説—宇玉巻—妹背山—藤原池—桑畑人—
 藤原三郎孫—雷兵—天の御供—鎌切石—修驗道と行者傳説—一言主神—藤原王權現—山伏道—山上參り
 —西の観き—宇原寺—汁掛祭—吉野郡地方—吉野史蹟—十津川郡土—國權—前鬼後鬼の子孫—手形
 渡通の始源

第四章 攝津、河内、和泉

攝津、河内、和泉の三國—南紀北紀—熊野の神—三國の人情—住吉大神—和歌の神—田植祭—住吉器—廣田神
 社—生國魂神社—大鳥神社—牧田神社の例占—堺の今昔—昔の堺—堺の文化—大阪及大阪人—古の
 文化—四天王寺—石山御堂—大阪城—徳川氏の大坂繁榮策—大阪の商業—倉屋敷—大阪商人の豪華
 —本相場—青物市と雜貨場—金の都—京都人と大阪人—趣味の大阪人—上方藝六—平民文學の發源
 地—國學發源—學問所の發着—大阪風俗—橋と船—大阪の芝居—淨瑠璃—能分のお化け—女お婆—
 大阪の遊廓—民遊船—高船妓—藝者と藝子—やとな—神事祭禮—寶惠院—今宮の夜—西宮の夜—西

宮の奇風—天孫登—だんじり—だんじり祭—四天王寺並に太子傳説—天王寺の舞臺—引馬石—鶴射寺—日經—守屋の裏—椋の嶺—上の太子—七不思議—人柱並に戀愛傳説—茨田堤—長柄の人柱—雄子驛—松王人柱—求女塚—高安の里—名月經—高瀬稻荷—枕寺—傾城塚—淺茅ヶ原—傳説と俗信—支猪野—血風神—大黒石—箕面ヶ原—美丈夫—毘沙門地蔵—桑原ヶ々—隈ヶ井—織通明神—織を飼はぬ—飯塚山の比古—有馬温泉—行基—片目の魚—有馬の湯女—湯の入初め—有馬の禁忌—有馬祭—神戸並に附近—灘の酒造—神戸の今昔—兵庫—神戸市の發達—遊園其他—生田の提灯祭—長田神社の御饗—歳時風俗—百舌鳥繪巻—駒林の左義長—關吏—河内香願—太鼓念佛

第五章 丹波、丹後、但馬

三丹地方—三國の名稱—國名傳説—丹波人—丹後人—但馬人—郡邑の地—山國の風俗—産靈—風鳴義塾—酒田童子と三莖太夫—大江山—千軒長寺—天女傳説と龍宮傳説—天酒大明神—浦島子—火の橋立—切戸の文珠—瀧津水—眞名井—成相山—敷のぞき—大雲—漢の磯—天日槍の事蹟—出石神社—赤き玉—祭祀奇習—豊の宮—神木—出初—小田井の御幸—火祭—傳説と俗信—續命の名號—建勝—國分寺の墓師—人喰地蔵—安國寺の標—白犬と人身御供—熊切祭—櫻石—雄大明神—翠鹿の若荷—篠田の筒—千石旗—三石—天狗—紡績歳時其他の風俗—櫻橋—市松人形—郷黨移濟—株名講—食馬

第六章 播磨、淡路

播磨及播磨人—國名傳説—播磨風俗—人國記評—赤穂義士—播磨めぐり—兼木—官社標—尾上高砂—松の精—曾根の松—石の宗歌—八十の岩橋—伊和神社—廣時—法道上人—聖德太子—香宮山—修羅園小島月祭—射額兵主神社の山車—室明神—軍の遊女—衣己織—玄猪祭—日岡の氏子—山祭、火祭、願持び—タイノトウ—狐狩—火柱—センゲンダキ—毘沙門堂—傳説と俗信—子刑部姫—お菊虫—須草屋—長者傳説—道辻の祠—埴子尾—埴子尾—石屋神社—野村船—石屋祭—男袂織—焚火—淡路の神社—伊弉諾神社—磯原成島—龍王祭—産宮—田被祭—縮さま—連理橋—玉鬘笠の火踊—音頭—歌—火柱—淡路の風俗—元服—道祖祭—繪巻—おれが先き—淡路の人情

第七章 紀伊

紀伊の國—木の國—木産國—捕鯨—紀州蜜柑—海外出稼人—流れ物—稻村亭—紀伊の人情—人國記—父母談—南無公—風俗政務—各地の人情—神社と傳説—花の宮—伊太郎曾—創業の哀史—肥前國—熊野神社—淡島明神—雄の起原—玉津島明神—高野山と丹生明神—高野明神—七聖結界—木食上人—女人禁制—三寶島—根來山大修法院—熊野不動—寺院傳説—粉河寺—熊守祭—遺成寺の鐘—雲雀山—紀三井寺—普化寺と興國寺—熊野權現—熊野三山—修驗道—熊野行幸—僧兵—關籠社—三山貸金—熊野の牛王—熊野の鳥—祭祀—神倉神社の火祭—那智の滝—熊野の王子—垂迹緣起—王子傳—奉の餘福—那智と補陀洛寺—禊祓上人—補陀洛渡海—熊野と鬼—鬼の國—鬼ヶ城—稻杖—傾鬼穴—一つ堂—傳説と俗信—片男波—岩代のかん松—小倉の鐘—住持池—河津瀧—藤根園—淡島の茶碗—夢社—虎石—藤八幡—祭祀奇習—笑祭—大飯神亭—常祭—奴路—立神—有田の雨乞—歳時結構其他の

報告—熊野の山中—しば草—草文—摺折—いはひそ—はらまつへ—毛打—釣板さし—獲り初め—
愚問—米占—暮儀—催蓮方言—和歌の名所—大地の捕鯨—方言

日本風俗志
(北陸並に近畿地方)

北陸地方

第一章 總

說

日本海
と太平洋

我日本を以て日本、東北より斜に西南に延長せる我が島帝國は東南は太平洋に面し西北は日本海を
抱き、一列の脊梁山脈は其の中央を縱走して日本海岸と太平洋海岸とを區劃し、太平洋岸は陸、常
に海を侵して半島あり、鯨角あり、總て進勢を呈せるに反し、日本海岸は海、常に陸を侵して僅
に能登半島を除きては著しき突出なく、前者の海岸の屈曲多きに反し、後者の海岸は屈曲少く、
前者の北端なる神樂の三厩より長門の赤間關に至る海岸線の千三百一里なるに對し、後者は僅
に其の二分の一たる六百五十一里を有するに過ぎず、従つて前者の良好なる港灣を有するに反し
て後者に良好なる港灣少く、前者はすべて發動的にして後者は多く受動的に、其の人口も亦前者

の一方里に二千七百人を有するに對し、後者は一千七百人内外を有し、其の都會も前者には東京大坂を初め、名古屋、横濱、神戸、廣島の如き大都市あり、之れに次で仙臺、水戸、静岡、豊橋、津、四日市、更に西して姫路、岡山、福山、尾ノ道、吳、馬關等あるに對し、後者即ち日本海岸には奥羽地方に於て秋田、北陸に入りて新潟（人口六萬七千）長岡（同四萬）高田（同三萬二千）富山（同六萬五千）高岡（同三萬八千）福井（同五萬六千）等あり、山陰には鳥取（同三萬七千）松江（同三萬八千）の二市あるのみにして、日本海岸中共の最も發展なりと云はるゝ加賀の金澤市も人口十三萬にして太平洋岸たる名古屋の三分の一に及ばざる状態である。されば古來史上の活劇も主として太平洋岸たる表日本に於て演ぜられて日本海岸は其の名の如く裏面的行動の外はなかつたので、南に海を控へ北に山を負ひ、日出づる方に面し陽氣なる南風を受けたる表日本は又實に人事活動の表面となり、南に山を負ひ、北に海を控へ、日没する方に面して陰濕なる北風を受くる裏日本は又人事活動の裏面を爲したのである。併しそは自然が人事を左右した時代のこととて、人力能く自然を征服し、鐵路山を穿ちて表裏日本の交通を便にし殊に一蒸帶水を隔てる亞細亞大陸には世界の幹線たる西比利亞鐵道の延びて對岸たる露領浦蘆斯德ウラウスタに來たれるあり、今や裏日本たる越前の敦賀港は其の交通の要路となつて益んに我れを送り、彼れを迎へて居るので裏

日本海岸の都會

自然と人生

日本活躍の時代は今後に來らんとして居るのである。こゝに總稱して裏日本といふは概説して奥羽地方と云はるゝ中に含まれたる羽前羽後を北とし脊梁山脈を隔てて中部地方に對せる北陸地方並に更に西南なる山陰道地方をも含むのであるが、兩羽は已に述べたれば本篇に於て語らんとするは此の裏日本の中堅ともいふべき北陸地方である。

雲の北國 表日本と裏日本とは其の氣候に於ても多くの差異を有し、一は晴、一は雨、脊梁山脈



氣候の差

は晴雨の分界となつて、表日本の氣候の太平洋的にして總て南來の感化を受くるに對し、裏日本は日本海的にして北來の感化を受け、前者の海洋的氣候にして黒潮暖流の上を吹き渡れる和蕪なる南風のため寒暑頗る平和なるに對し、後者は大陸的氣候にして亞細亞内地を吹掃せる強烈なる北風のため寒

雪中の旅
行具

著頗る懸隔し、前者は概して晴朝の日多く、後者は曇天多く（地理學小品）特に冬季は降水量夥しく凍つて雪となりて對岸の最も遠き北陸地方は日本海を渡り来る多濕風を正面に受くるを以て積雪殊に多く、海岸地に於ても三四尺、山間に入りては一丈餘に達し、前雪未だ消えずして後雪積り、太平洋岸にては見ることも少き雪履、かんじき、すがりたぞいへる歩行具を用ひ、雪履は普通道の雪路にも用ふれど、雪にて道の埋れてはかんじきを用ひて踏みならし、更に雪深き北方には圓の如くかんじきの大なるものに紐をつけたるすがりたるものを穿ちて、荷物並に旅客の運搬には極車として雪の上をにり行く舟の如きありて古くより

初深雪降りにつらしたあらず山

こしの旅人楢にのるらし（堀川百首）

とあり、近頃は、腕車の輪を除きたるやうなるものを用ひて、人を載せて雪路に便して居るが、多くは各自家にて圓の如き粗末なるものを造り、雪中に木を伐り出して之れを運ぶに用ひ、積雪賑ふべきが如きも、運搬の便は却て此期にあるので、若し之れなくんば、木を伐り出す等には非常な不便を感じるは都人士の想像の外である。

此地方の降雪に就て矢津氏の「地理學小品」は十二、一、二の三ヶ月に於ける降水量を積雪量に換算して

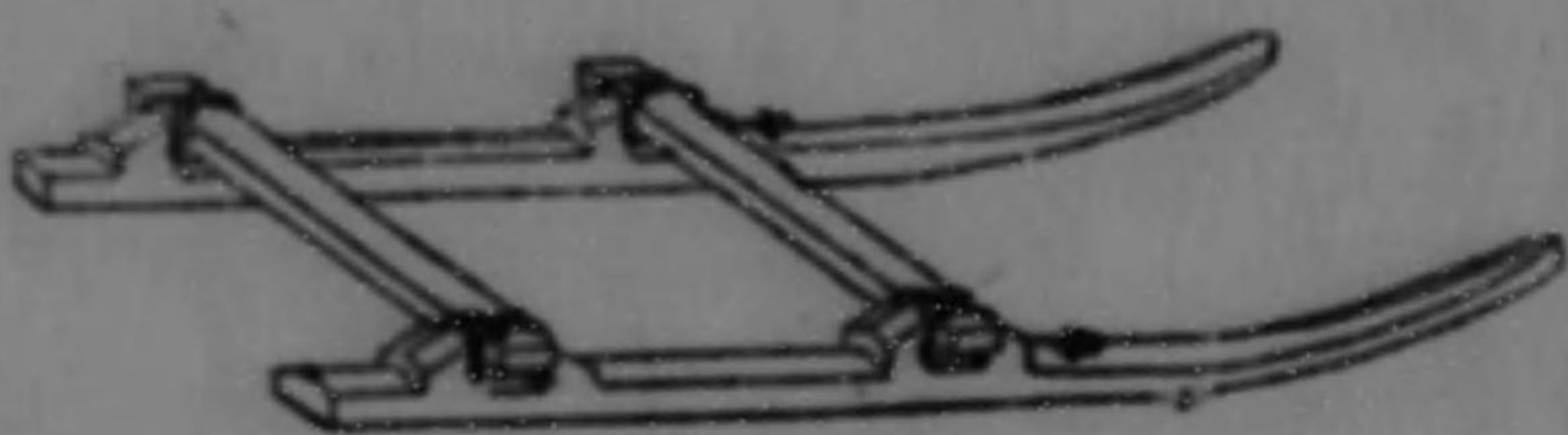
降雪量

加賀の金澤は二丈一尺八寸、美濃の福井は二丈一尺、越中の伏木は一丈九尺五寸、能登の輪島は一丈四尺六寸、越後の新潟は一丈四尺三寸といひ、奥羽方面たる羽後の秋田は一丈二寸、山陰方面たる伯耆の境は

一丈三尺八寸、石見の濱田は七尺五寸と計算せられて居る。勿論年によつて多少の差はあるが大體の降雪量は略ぼ同様である。而して尙ほ「同書」には加賀白山の高嶺と大日嶽との間なる手取川上流の瀧瀬海抜四百九十二メートルの地帯にある千首なる一村を以て全国第一の深雪地とし一丈以上の積雪は毎年の例にして二三丈にも及ぶことありといひ、此地方を中心として東北に信濃飯山に達する一線と西爾然前線の教賀に達するまで延ける一線の附近は本邦積雪の尤も深き地方であると示されてある。

雪の風俗人情に影響すること極めて多く、第一家屋の建築に就きても積雪に耐え得る堅牢なるを主とし、屋根の傾斜は甚しくして雪を落すに便し、且つ深雪に埋却せられざる用意を以て高く築かれたるもの多きも此地方の特色とすべく、「北越雪譜」に

宿場と唱る所は家の前に庇を長くのぼしてかくる、大小の人家すべて斯の如し、雪中は更らなり、平日も往來とす、これによりて雪中の街は用なきが如くなれば人家の雪をこゝに積み、次第に重りて兩側の家の間に雪の堤



圖の楢

雪の市街

を築たるが如し、こゝに於て所々に雪の洞をひらき、庇より庇に通ふこれを風管に胎内くゞりといふ。

雪と出稼

とある如く市街地は多く人家の軒下を往來し街上僅に車馬又は橋の通路を除きては積雪山を爲すの状況である。市街地既に斯の如くであるから山間深雪の地方に於ては降雪期間は作業を休止せざるを得ざれば、多くは他に出稼を爲し、彼の牛首の如きは此間細民四方に離散して業を求め、融雪の期を待ちて歸村するを常とするものがある如き(地理學小誌)状態である。此れは別とするも、北陸地方の人々の他地方に出稼するものゝ多きは此の雪の影響も亦與つて力あるを忘るゝことは出来ない。併し尙ほ此の外に著大なる因を爲せるものは此地方は眞宗の盛んなりしがため、古來他に於て見る如き墾田の風習なく、作業の少き割りに人多く勢ひ出で、業を他地方に求むるに至つたのである。其の又眞宗の此地方に盛んなるに至りしには亦積雪の關係少しと見るこゝが出来ない。余曾て雪の人生に及ぼす影響を論じて

雪と貯蓄

かゝる多量の降雪が人類に與ふる最大の教訓は貯蓄心の養成にあり、彼の降雪地に於ては嚴冬の餘は交通全く杜絶して、少くとも二ヶ月長くは六ヶ月に亘りて雪中に於居せざるを得ず、故に其の間の食料は之れを雪未だ降らざる時に準備せざるべからず、こゝに於て貯蓄の必要は自

ら感ぜられ、持久の精神、忍耐の氣象は自然に養成せられ、永遠の計圖を畫するに至る。これ未來教たる淨土門殊に眞宗の雪國に於て隆盛なる所以にあらざるや。(積雪「修養論」)
と、以下少しく宗教に就て觀察を試みねばならぬ。

未來教の盛行

北陸の宗教 北陸四縣たる新潟、富山、石川、福井の背面たる關東並に中部地方に於て現世教たる禪、眞言、天台、日蓮等の盛んなるに對し、此四縣は未來教たる眞宗實に大勢力を有し、寺院總數七千四百五十九の中、眞宗は實に其の過半數たる四千二百七十八を有し、之れに次ぐは殆んど其の四分の一に近き一千二百八十七を有せる曹洞宗と、其の半數より少しく多き七百九十を有せる眞言宗にして、之れに次ぎては日蓮宗の四百七十四、淨土宗の二百九十七、天台宗の百九十四、臨濟宗の百三十三、時宗の四十八、實業の五で、雪の最も多いと云はるゝ石川縣の如きは總數一千二百四十九の中、眞宗八百九十七、曹洞百二十一、他は皆な百に満たず、富山縣の如きは總數一千五百十八の中、眞宗一千百九十七、曹洞は百十七、これを眞宗旺盛の中心點として福井縣に於ては總數千六百八十三の中、其の半ばたる八百七十は眞宗にして曹洞(二百七十四)天台(百十)淨土(百〇七)之れに次ぎ、新潟縣に於ては總數三千十の中、眞宗一千三百十四、曹洞七百二十五、眞言五百七十九、日蓮百七十九、淨土百三三の状態である。眞宗の盛んなる地方は比

本願寺の勢力

較的其の信仰の徹底して禁厭祈禱等の迷信少きも本願寺法主を見ること活如來の如く其の行水の湯をだも飲むものあり、一たび勸財の使僧の此地に下らんか善男善女の之れに應ずるもの頗る多く甚しきは地方の經濟に影響するほどであるまで云はれて居る。斯く眞宗の此地方に勢力を得るに至りしは、宗祖親鸞上人が法然上人の事に生じて越後の國府に配流せられ此處にありて此の邊陲の地を教化せられ、徒弟眞佛上人の末流は多く教を北國に布き、本願寺にありても覺如、存覺等の二上人教を此地方に垂れ中興の祖と云はる、蓮如上人が越前吉崎にあつて其の附近を教化せられたる歴史や、親を北國に唱へたる豪族等と貴族を結び干戈を以て保護せられ、又迫害に抗して信徒の團結となり一向門徒は重きを此の地方に爲すに至りたる等の諸種の原因あるべきも北陸の天然が又能く此宗風に適合するものありたるを忘るゝことが出来ない。此地方の眞宗は大多數東西本願寺の門徒なれど、別に越前に四個の大本山あつて各々獨立の一派を爲す、其の出雲路派と稱せらるゝものは今立那味眞野の毫檜寺を本山とし、山元派の證誠寺は同新横江村に、誠照寺派の誠照寺は同新江町に、三門徒派の専照寺は福井市豊町にありて其の教義を宣傳して居る。併し北陸の本山はこれら眞宗の小本山のみではない。日本佛教界に雄視し奥羽、關東、中部にかけて多數の寺院を有し、此地方に於ても眞宗に次ぐの勢力を有せる曹洞宗の其二大本山たる越前

各宗の本山

の永平寺、龍登の總持寺（總持寺は近年武藏國橋本郡鶴見に移轉したりしも今尙は別院を此地に置く）を此地方に有して全國に號令して居るのである。其他獨立せる一派の本山としては今法華宗と稱する本成寺の越後南蒲原郡本城村にあるあり、近く獨立せる臨濟宗國泰寺の越中射水郡太田村にあるあつて、北陸の佛教は實に盛んなるものである。佛教の盛んなるに反して微弱なるは基督教で、總數僅に五十七、日本メソヂスト教會の十九、日本基督教會の十三を最多數とし、之れに次ぐを日本聖公會の九、組合教會の八、天主教の四とするのである。

神社數一の宮

此地方に於ける神社數は官幣大社一、同中社一、別格官幣社二、國幣中社四、同小社三、府縣社以下五千八百十五、境界無格社六千七百三十七、一の宮と云はるゝは若狹の遠敷神社（遠敷郡遠敷村）城前の氣比神社（敦賀郡敦賀町）加賀の白山神社（石川郡河内村）龍登の氣多神社（羽咋郡一宮村）城の中の同社（西福部郡）城後の兼濟神社（西福部郡兼濟村）佐渡の渡津神社（佐渡郡羽茂本郷村）

國分寺

國分寺の遺蹟とせらるゝは若狹は近新村國分、城前は南條郡武生町、加賀は能美郡古河府、龍登は鹿島郡徳田村國分、城中は射水郡伏木町國分、城後は中頸城郡國府村、佐渡は眞野町の國分寺と推定せられて居る。

北陸と奥羽 先住民族の遺跡を最も多く傳ふる奥羽の地より日本海に面して打ち續ける北陸の地には亦石器時代の遺跡と稱せらるゝもの多く最も北なる越後の如きは七十二ヶ所、佐渡の小を

遺蹟人

以てして十四ヶ所、中部に位せる加能越方面には五十五ヶ所、最も畿内に近き越前十四ヶ所（石
器時代遺物発見地名）と算せられて居る、此の地方に久しく蝦夷人の蟠居したりしは史の傳ふる
所にして、恐らくは蝦夷の先住民たりしもの、遺物と稱せらるゝ石器に就ては夙に肅慎人の遺せ
しものなりとの説あつて木内小繁の「石鑑考」には「本朝通記にいふ、肅慎國より日本を犯すこ
と三十六度、石の鏃に毒を塗りて發す、人に中る時は忽ち死す、日本勢これに恐ると、同書にい
ふ、齋明天皇二年阿部比羅夫肅慎國と戦ふ、後、肅慎降りて生部三、靺皮七十枚を貢すと、肅慎
國は今の蝦夷なり、疑ふらくば鐵石出づる所は上古の戰場なるか」とある。此地方に蝦夷人の蟠
居したるは史のしばしば記する所にして其の肅慎人の我が史上に見えたるは欽明天皇の五年に越
の國より奏聞して佐渡に來航したるを初めとすれど、其の頃にも、此地方には半ば王化に浴せざ
る越蝦夷なるものありて尙ほ跋扈したるなるべく、彼越の豪族阿部比羅夫の舟師を率ひて前田
淳代等出羽方面の蝦夷を降し、進んで今の北海道に渡り渡島蝦夷を略し、更に轉じて肅慎を伐つ
た頃より越の國と總稱せられし此地方も其の口たる越前方面より次第に内付して越中、越後に至
り終には全く綏撫せられたので、元正天皇の和銅年間には蝦夷警備の爲めに置かれし淳足、磐舟
等の櫓は廢せられ、爾來此地方に於ては蝦夷人の背叛を耳にせざるに至つたのである。

蝦夷人

此地方は一帶古く越の國と云はれ、高志、古志等の字をも用ひられて、もとは今の羽後方面をも含み陸奥
に接して居つたので、其の越の名に就てはいづれの地方より入るも山を越えざるを得ざるが故に越とい
ひ、又異國の人來りて調貢を請ひ越せしより斯くは名づくといひ、甚しきは日本全國を人身に喻ふれば此
地方は其の腰に當るから斯く名くといふ説さへある。初めは越前、越中、越後の三に分たれしを後に越前
の中より四郡を開きて能登を置き更に又二郡（後に四郡とす）を開きて加賀を置き、越後より出羽を開い
たのである。

越の國

出雲族

一方北方出羽と接して蝦夷民族との關係深かりしと共に我が北陸の地は他方山陰地方に接して
海を隔て、韓民族と關係厚かりし我が大和民族の別系たる出雲民族との交渉も淺からず、大己貴
命の嗣を美日本に唱へたまふや、出雲より漸次北して古志の沼河比賣と婚したまひし故事あり、
此の地方の命を祀るものに國幣中社たる能登羽咋郡の一の宮の氣多神社、越中西瀨波郡にも又氣
多神社あり、其他越前大野郡大野の葎座神社、同南條郡武生の總社神社、能登七尾の生國玉上古
神社等あるは決して偶然ではない。「出雲風土記」國引の一部には

越の都々の碑を、國の餘りありやと見れば、國のあまりありと詔り給ひて、童女の胸すきとら
して、大魚のきだつき別けて、旗すきほふり別けて、三つよりの綱うちかけて、霜つゝらく
るや／＼に、河船のもそろ／＼に、國來／＼と引き來渡へる國は三種の崎なり

韓民族

とありて、越の都々の岬をも引き給へるを載せたるなど出雲族との關係の淺からざりしを想像することの出来る史實や傳説は乏しくない。若し此の出雲族と關係深かりし韓民族に就ては崇神天皇の世、額に角ある人、一船に乗つて越の國筒飯の浦に泊す、故に其處を號して角鹿といふ、問うていふ、何國の人ぞ、對へて曰く、意富加羅國王の子、都怒我阿羅所、日本國、聖皇ありと傳へ聞き以て之れに歸化す(乘仁紀)とある如く韓民族の來るもの少からず「大日本地誌」の著者は、此地方の神社に比古、比賣の名を有するもの多きに就て「これ上古にありて新羅、辨韓等より渡來して、これらの地方に移住繁殖し、その子孫が祖先崇拝の風より祭祀するに至りしにはあらざるなきか」といふて居られる。尙ほこれらは其の國々の條下で説くことにするが、此地方に韓民族の渡來の少からざりしを推すことが出来る。こは之れ上古の事、奈良朝の末に至りては對岸たる亞細亞大陸に渤海國なるもの興りて南は韓半島の背後より北は黑龍江地方に及び東は日本海に面し、しばしば使節を遣して此地方に來り平安朝に入りては殊に客館を致賀附近に設けて彼れを迎接せしむると共に一面之れが警備を嚴にせられ、後、渤海國滅びて此事熄みたりしも、平安朝の末には宋商の此地方に來るものあり、幸に大陸よりの侵入は契丹も蒙古も之れを筑紫に試み此地方を領はさざりしが、室町時代に至りては「室町時代史」に「若狭國稅所今富名領主代々

渤海國

高麗船

次第に應永十五年六月廿二日に南蕃船着岸、帝王御名亞烈連聯、蕃使使臣(同丸)彼の帝より日本の國王への進物等生象一疋、山馬一疋、孔雀二對鸚鵡二對其外色々、彼の船同十一月十八日大風にて中津濱へ打上げられて破損云々とあり、其の王名及び進貢物につき考ふるも印度若くは馬來半島近傍の國ならん」とある等、海に面せる此地方は日本の裏面と稱せらるゝとも異民族に接觸することは少なかつたのである。これらの史實は直接間接に北陸人に對外的氣分を興へたことも亦算定の中に入れねばならぬ。

史上の北陸 さてと史上の北陸は常に表日本に征服せられて先住民の我が大和民族に追はれしは云ふまでもなく、同一血族たりし出雲族も亦早く表日本に降臨せる天孫族に其の國を讓られて人皇の世に入りては崇神天皇の時に大彥命景行天皇の時に吉備津彦等の北陸征定となり、仲哀天皇の角鹿行幸となり、下つて聖德天皇の未だ皇位に登りたまはざりし時代に越前に龍骨したまひし等を傳ふるの外、史上顯著のことなく、醍醐天皇の時、藤原利仁、鎮守府將軍となり此地方に下り子孫繁衍して越前に齋藤氏、加賀に富樫氏、越中に井上氏となり、越後には別に餘五將軍の稱ある平維茂より出でたる城氏あり、皆な地方の豪族となり、源平の時代に入りて海道源頼朝の平家遠討と呼應して起れる山道の源義仲の先づ兵を交へたるは此の城氏たる長茂にして、義仲

豪族

表日本の
影響

連戦連捷進むを追ひて越後に入り更に越中を略し、加賀を従へ、越前を服してしばし平軍と戦ひ其の間有名なる俱利伽羅峠の奇捷などあつて漸次威を東山北陸兩道に振ひて京師に入り終に平家を四海に追うたのであるが、裏日本を地盤としたる義仲は終に亡ぼされて世は頼朝の天下となり守護地頭は皆な之れによりて補任配置せられ、其後の歴史常に表日本の影響を受くるのみにして我より主動となつて表日本に出づるなく、殊に孤島たる佐渡の如きは表日本の活舞臺に失敗せるもの、配宣の地となる有様で、長くも萬葉の尊きを以てこゝに遷されたまひし古蹟をも傳へるのである。吉野朝時代には忠臣新田義貞越前に入りて足利の大軍と戦ひ、勤王のために盡くせしも時利あらず、終に此地に戦死し、足利氏の世となりて越後は東國管領の執事たる上杉憲顯の所領となり、憲顯之れを憲藤に與へて越後上杉氏起り、其の家老長尾氏漸次に勢力を扶殖し、爲景に至つて雄心あり兵を四方に出して終に陣歿し、其の四子輝虎出るに及びて北越の地悉く之れに歸し、越山併せ得て能登に進み、一方兵を信濃に出して武田信玄と争ふ、輝虎後、上杉氏を目し、變を制りて謙信と號す。北陸の歴史は此人あるによつて萬丈の氣を吐くことが出来るのである。此時に當りて加賀方面は初めは迫害に反抗して起れる一向一揆なる眞宗信徒の團結は偉大の勢力となり城郭の如き道場を小立野といへるに築き、これを加賀の御山と稱して其の根據地とし

一向門徒

上杉謙信

朝倉氏

て盛んに干戈を弄し、越前方面には世々斯波氏の目代たりし朝倉氏の終に主家を滅して一乗谷に城きて居るあり、織田信長の足利將軍義昭を奉じて入京するや、此越前の朝倉義景を招きしも来らざりしを奇貨とし、伐つて之れを亡ぼし、前田利家を此地に居らしめ、進んで上杉氏の兵と戦ひ、着々北陸を略して柴田勝家を越前、佐久間盛政を加賀、佐々成政を越中に封じ、前田利家を能登に移し、謙信の子景勝は越後を領し、北陸の都署略ぼ定り、織田氏亡びて豊臣秀吉の起るや北陸の諸將多く秀吉に快からず終に有名なる近江賤ヶ岳の戦争となり柴田勝家先づ兵を出し佐久間盛政、前田利家等之れに應じて秀吉と戦ひ敗れて北陸に退くや、秀吉、先づ前田氏と和し、柴田を亡ぼし佐久間を伐ち、前田氏に加賀を加封し、後、越中の佐々成政を肥後に移すや、其の地も亦前田氏の領となり、前田氏は曾て一向門徒の據り、後に佐久間氏の尾山と改めて之れに築きたる城壘を修して名を金澤と改め北陸に雄視するに至り、徳川氏の世となりても百萬石の大守として加能越の地を領し、(加賀金澤百二萬餘石、同大聖寺十萬石、越中富山十萬石皆な前田氏である)徳川氏は此外様の前田氏に對して家康の長子秀康を越前に封じて北陸と近畿との咽喉に於ける重鎮たらしめ、北の方越後の方面には第六子忠輝を高田に置きて之れを制せしめ、高田は後、幾多の變遷ありしも常に譜代を以て之れに居らしめた。試に幕末に於ける配置を見んか、最も嚴

前田氏

諸藩の配

内に近き若狭は譜代酒井氏の十萬三千餘石、越前福井親善松平氏は三十二萬石、前田氏を挟んで越後高田は譜代榊原氏十五萬石、其他越前には大野の土井氏（四萬石）敦賀の酒井氏（一萬石）勝山の小笠原氏（二萬二千餘石）皆な譜代にして外様は越後の門部氏（四萬石）丸岡の石馬氏（五萬石）あるのみであり、越後は小藩に分立せられ、新發田の溝口氏（十萬石）村松の堀氏（三萬石）榎谷の堀氏（一萬石）を外様とし、譜代には高田の外、長岡の牧野氏（七萬四千石）村上の内藤氏（五萬九千石）を筆頭に奥板の井伊氏（二萬石）三根山の牧野氏（一萬千石）黒川井に三日市の柳澤氏（各々一萬石）清崎の松平氏（一萬石）と配せられ、幕府領は役所を水原（支配陸奥の一部を合せて十萬六千餘石）川浦（信濃の一部を合せて五萬四千石）出雲崎（七萬千餘石）に置きて之れを支配し、佐渡は全然幕府の直轄として越前に及んだので、今や若狭、越前は福井縣、加賀、能登は石川縣、越中は富山縣、越後佐渡は新潟縣を置いて管轄せられて居る。

幕領

第二章 越後、佐渡

越後及越後人 越後は北陸道の北端に位し、本道中の最大國にして西は越中に境し、西南は信濃に接し、東南は上野並に岩代に界し、東北は越前に隣り、西北一帯日本海に瀕し、東西八十里南北二十七里面積凡そ一千百五十二方里を有し、中に信濃より來る信濃川、岩代より來る阿賀川の流れて海に注ぐありて、其の流域は灌溉頗る便にして作付反別十六萬七千町歩、米産一年二百七八十萬石に達するも、國內亦山岳の起伏するもの少からずして、風土人情を區別し、殊に一國を中斷せる米山のあるあつて米南米北の稱あり、南を上越とし、北を下越とし、若くは其の下越の申を更に二分して長岡を中心とせる地方を中越とし、新潟を中心とせる地方を下越と稱し三個の中心三個の風俗、思想、好尚各其の趣く所を異にし、「手近い例を引くも上の者は口が速者で算當に暗いが、下の者は口こそ利けぬ、算盤には明るい、大橋佐平、大倉喜八郎、日比谷平左衛門益田孝などが皆下から出たのを見ても知るべきなり」（越後記）とあるが、これを概評すれば越後人は勝氣なる北人氣質を帯びて、「人國記」の

上越、中越、下越、

越後人の
氣質

當國の風俗は勝つことを好む氣象多し、かりそめにも勇を勵み、痛きといふことを痒きといふ若し腫き倒れ痛みを得ても唯だ心得た、がきめなどといとけなき者の育てにも、かくあらゝかに強味を敷る風なり、越する氣は少けれども、さしかゝりの強きほどは後度のしまりを考へざるなり。主従互に頼もしけれども、道理を辨ふること稀れなり、それ故何事にも強て勝たんとして理非の分別なき國なりとぞ

とあるは一面の觀察なれど、越後人は唯だ勝つことを好む狹隘なる氣質のみにあらず、寧ろ能く他を包容する寛量を持つて居るので、角田清々歌客の「漫遊人國記」には之れを信濃人と比較して、

越後人と
信濃人と

越後人が北人氣質なるも尙ほ偏に山岳的狹隘自我にあらずして、大に海瀾の氣象と平原的同化を有するに對し、信濃人は全く山岳的にして、自我心に富み、狹隘にして同化力に乏し、越後の氣質が寛容なる處あるに對し、信濃の風氣は自主獨立の或は頑固に凝ぐるものなりと。杉村楚人冠の「越後記」にいふ、

斯いふ土地に限つて排外思想に富んだものだが越後はさうでない。長岡でも、新津でも、石油事業の勃興から盛んに國外の人を容れて土着の人とちやんと融和してゐる。僕も随分諸方を旅

して歩いたが、未だ曾て越後ほど快く迎へて呉れた所もなく、越後ほど旅の身ながら心をきなく暮らし得た所はない。

石油業

と、古來越後は天險によりて他を防ぎ國富みて他と交らずとも自給の出来る國なりしを以て徳川氏も之れを一領主の下に置くのを憚つたほどの富國である上に、近年石油業の發達は益々此國を富ますと共に他國人の多く入り込みて其の富源を開發し、其中心たる長岡市の如きは維新の當時官軍に抗せしを以て連境に陥り、市況頗る振はざるものありしに石油業の勃興につれて漸次隆盛を來し、今や中越の覇權を握るの一大都市となり、之れを起點として信濃川の東方に東山油田、川の西に西山油田、東山の北に蒲原油田、西山の北に尼瀨油田、西山の南に頸城油田、東西兩山の東南に魚沼油田あつて鑿井用の槽は天を摩して林立し、汲油の原動機を動かす汽鑪の烟は濛々として立ち罩めて産油の年額七百萬圓之れに投ぜられた資本は約五千萬圓と稱せられ、寶田、日本石油の二大会社の外に十五六の会社と五十に近き組合があつて、斯業に於ては確かに日本一を誇稱するに足る。越後の富は之れのみにあらず、新潟を中心とせる信濃川阿賀野川の流域は先にも挙げたる如く本邦屈指の米産地にして古來大地主に乏しからず。「越後の發展は大地主の活動に待つもの實に多しとすべし、越後の國大地主の多數なること殆んど他に匹儔なし、地價四十八

大地主

萬圓を有するものを第一とし、地價一萬圓以上を有するもの四百五十八人、地價一萬圓未満五千圓以上を有するもの六百八十八人あり、又以て、越後の大を誇るに足る」(書齋と新人物)と加ふるに中央の富豪たる三菱が蒲原地方に約一千町歩の土地を有し七十餘名の差配人と數千名の小作人とを獎勵して農事の改良に盡せるありて各地主と小作人との間に一道の温情相通せるも亦以て此の國の誇りとするに足る。こゝにも越後人の氣風存すると見え「越後風土考」には、「當國の人民は氣質強勇にして信義を守り、敢て佞諛の卑心あらずと雖も、貴賤長幼の序を犯せしことなきは他國に誇る所なりと先人も賞揚せり、これ上杉家領國中の調諭宜しかりし遺風なるべし」と。上杉氏は越後人の久しく感化に浴せし所にして特に任侠なる謙信の氣風は越後人が崇仰の中心となり、北越維新史の花と謳はるゝ長岡の奇傑河井繼之助はいふ「我が北越の三傑とすべきは上杉謙信、酒顔童子、良寛上人なり」と、前原一誠の舉に與みして罪を獲たる越後の志士大橋一藏はいふ、「余の心服せるは謙信、繼之助、良寛の三人なり」と謙信は天下の英雄良寛は粗説の禪僧、其の向ふ所異りと雖も、共に經世の偉人たり、特に其の良寛が國上山五合庵にあつて兒童と嬉遊し日本の寒山と稱せられたる説俗の生涯は天下の珍、物質的なる越後も此人あつて別に一種の風格あるを述べしむ。

北越の三傑

物質的方面

越後の物質的方面として古來名を成せるものは主として山間の地方に於て産出せらるゝ農産物で、昔は家内工業として發達し來つたのであるが、今は機械工業に惹んで其の特色は初々減せられたやうであるが、産出は次第に増加し、中蒲原郡五泉町の神地たる五泉平、吉志郡橋尾町の橋尾田原、中魚沼郡十日町附近の透鼓田、并に南北魚沼郡に渡りて降り出さる越後上布は獨る所に好評を博し、産額のそれよりも多きは吉志、蒲原各地で産出せらる羽二重で、外に舟前郡地方で、産出せらるゝ洋紙長地等がある、蘆葺の葉も亦風に関け製糸も本年額三百二十萬圓を算せらるゝに至つて居る。更に西北一帯海岸を有し別に佐渡の島を有せる此地方には寒暖の二階派の地りて、漁獲物も多種異様にして、其の産額も少からず、殊に近年は新潟市を中心として沼津海湖に向ふ遠洋漁業も著しく發達して此國の富を計つて居る。

越後の宗教

精神的方面に於て此國の宗旨のことも一言せざるを得ない。此國昔は眞言宗尤も多く天台宗之れに次ぎ、鎌倉時代に入りて禪宗次第に増し、上杉氏領國以來尤も盛んとなり、眞宗は宗祖親鸞上人當國配流の中、化導せられしより之れに歸するもの多かりしも寺院少かりしが、上杉氏會津に幕府せらるゝに際し、主將の新領所又善後所たりし天台眞言の互利は形ばかりの寺跡を止め、又は一山擧つて遷徙し、其の處に隣りて切支丹の跋扈し來りしかば、支配職たりし喇家を初め村上溝口等の諸家も將軍の命を受けて信濃、越中加賀の方面より説教に巧みなる眞宗の僧侶并に道心者を招きて布教せしめしを以て魚沼を初め山間或は一郡地方を除くの外里方は眞宗の増加するに至つたのである。(越後風土考)前章に説く如く今は眞宗は勢力を得、人は説教法談を喜ぶの風がある。

富める越後は又宗教の盛なる地方で、此精神物質の兩面即ち經濟と道徳との二方に互れる積善組合なるものは本部を新潟市に置き、勤勞貯蓄を獎勵し災害を共濟すると共に一般慈善救済教化等に從事し、其外にも事務所を長岡市に置き、民風の作興と教化の徹底とを目的とし、貯蓄を獎勵し、救済を行ひ、且つ臨時

積善組合等の組合

に講話等を聞いて居るものがある。

越後縮布 今でこそ他の物産に屈倒せられて越後の名を輝すに足らぬやうであるが、昔く世に知られたる越後縮は山間たる魚沼の特産で、「北越雪譜」には「縮となふるは近來の事にて昔は此國にても布とのみいへり、布は紵にて織るものの總名なればなるべし、今も我があたりにて老女なぞ今日は布を市に持て行けなどやうにいひて古言も残り、東鑑を案するに建久三壬子の年輪使歸洛の時、鎌倉殿より畿別のこといへる條に越布千反とあり、猶ほ古きものにも見ゆべけれどさのみは索めず、後のものには室町殿の營中の事どもを記録せられたる伊勢家の書には越後布といふことあまた見えたり、されば昔より縮は此國の名産たりしこと明けし、愚案するに昔は越後布は布の上品なるものなりしを後々次第に工を添へて糸によりをつよくかけて汗を漬ぐ爲めにしませ織たるならん」とあり、「新撰名勝地誌」は會津新風土記並に産事業蹟を引きて、其の由來を明し、

其の初めは寛文の頃、播州明石の人、渡浪して此の地に來る、名を佐藤次郎といひ、妻をお高といひ、二人の女兒あり、浪人なれば辛くも手馴れし縮布を織らしめ、これを生活の一助となせり、然るに近邑の婦女就て之れを習得し、漸次に廣まりて國産となる。古き流行歌に

高い山から谷底見ればお高かあいや布さらす

お千代くくと持なかつしやれど、お千代ばかりが女ぢやか

といふも持な此母子を味せるなり

御機屋

とあり。後、町に小祠を建て、縮布堂又明石堂と名けて其の祖たる明石次郎を祀り、毎年四月上旬縮布市の初めに祭典を執行すると云ふ。「北越雪譜」には其の機織を神聖にすることを示して

御機屋

「住居の内にて成るたけ烟の入れぬ、明りもよき一間をよくく清め、新らしき筵を敷きならべ四方に注連をひきわたし、其の中央に機を建る、これを御掛屋と唱へて神のいますすが如く畏れ敬ひ、織人の外、他人を入れず織人は別火を食し、御機にかゝる時は衣服をあらため、塵垢離を取り手洗ひ口そぎ、ことくく身を清む日毎に此の如し、月経を忌むことは勿論なり、他の娘等など今日は誰殿の御機屋を拜みまゐるなどやうにいふなり、至極上手の女にあらざれば此機屋を建ることなければ他の婦女これを羨む云々」とあり、今は此神聖も減じたれど、かくてこそ最上の品も織り出されたれと思はれるのである。

越後女と越後獅子 越後女は二種の觀察を以て有名である、それは能く働らくといふ點に於て確に他國に優れて居るので此國に入る者は、特に織に將た而に女の働けるを見ること少なくない、特

女の勤

に先きにもいふ如く染織が、此地方の一特産で、それには女の手を要すること多く、越後女は能く此の需要に應じて骨身を惜まず働くのみならず、農に於ても、商に於ても女は男優りに働き、女の土方、女の棒手振の多きは他邦人の目につくので、これには數の上からいふても當縣下には常に男より女が多いといふ現象をも見逃すことが出来ない。大正二年末の調査によれば縣下人口百八十七萬七千六百人中、男九十二萬五千三百、女九十五萬一千三百（前年は男九十一萬九千九百、女九十四萬九千七百）といふ數字である。これら生存の必要もあつて、女は能く働き、近く石油等を以て異常の發達を遂げたる長岡市の如き

女株券師

越後は女の能く働く處といふが、中にも長岡市に於ける女株券師は、婦人活動の最も著しいもので、他に類例のない、或る意味に於て名物である。彼等は別に身元保證金を納めず、株式直取引の仲買を業とするものである。随つて彼等の間には不文の制裁あり信用を重んずること局外者の想像以上である（中略）嚴格の風教上から云ふたら弊害も極めて多からうが、或る意味から長岡になくはならぬ一種の經濟機關である。（ながまか）

と云へる如きものがあるほどで、従つて女子教育は比較的に進んでゐる。寧ろこは越後女の光明面であるが、他の一面は美人の多いといふことで、これも誇るべきことであらうが、其の裏面に

遊女

淫靡の風存して、遊女賣婦の早く他國人の眼に映じたのであるといふことを忘るゝことは出来ない。「越後風土考」にいふ「當國にて遊女のいと古く在りし地は三島郡寺泊の港にて建久年中鎌倉殿の時代、先蹤を以て遊女四十九人と定め、住居を許し置かれしといふ。降つて永仁六年二月、冷泉前大納言爲兼、佐渡國へ配流の時、此港にて順風を待つ日、初君（三島）といへる遊女の給仕に侍りしこと世の知る所たり、次ぎに同郡尼瀨、出雲崎、岩船郡瀬波、頸城郡直江津、蒲原郡新潟之れに次ぐ」とあり、「越後風俗志」の編者は此新潟に就て「寛永承應の間、港開設以來、古町、神明町に多くの遊女ありしも、公所のみに免許あらざりしを以て船に因み、菰かぶり杯の名稱も付せられしかど、國中第一の全盛を極め、天保十四年より更に公所の沙汰あり」といひ、坪谷氏の「山水行脚」には「古來北陸第一の市場、奥羽及び越後の産米を兩國に運送するには必らず船を信濃河口に繋ぎ、風潮に日和積くを見認めざる間は皆な流連して動かす、また地方の豪農も、米を此地に賣ぎ、腰に高貫錢を纏ふて豪遊を試みたる所、故に市街は遊廓を中心として立ち、加ふるに土地に美人多く、雪齋雲鬢、柳腰花顏、能く東西の遊客を誘致して歸るを忘れしむ、されば新潟の繁昌は港の爲めにあらずして美人の爲めといふも誣いす、宜なり、市の中央の最要部なる古町通り二三の町、五六ノ町等は古來娯樂技藝を以て占めたるや、新潟名所の唄に曰く、

色の差

新潟名所

新潟名所はさまざまござる。四方に見渡す日和山、沖の湖崎に出船入船、下町女郎兼に島女郎兼二三小童氣で、五六金盛、（註）内小路の賑やかさ、寺町通れば、コレモシばかりし、あんにやそんな、寄りなれやア

と、二三五六は古町通り、舊町名。坂内小路寺町皆な娼樓のありし所、下町女郎島女郎と共に新潟の名所は概ね遊廓のみ、新潟を指して色の港といふもの其の當を得たり」と、且つ新潟港に注ぐ信濃川の源を信濃の山中に發して以來、此地に入るまで無數の大小流を合するを誇張して八千八水と稱するをいひ「尙ほ古來新潟市中に特有の娼と名くる密賣淫婦の多きを形容して八百八編と稱したるの類なり」といふ。紅葉山人の「娼妓叢書」には「新潟の八百八後家といへば、人も知つた名稱で、今は全く跡を絶つたのであるが、以前は後家と稱へて眉を落した一種の娼妓があつた趣で、其名の由来は、事の始が夫に別れて便ない身の情を賣つた故であるといふ」とある新潟の此の狀況が偶々以て越後女の名を喧傳せしめた一面ではなからうか。

越後女と共に人口に膾炙するは越後獅子俗に角兵衛獅子と云はるゝものである。これに就て「越後記」は阿部文吉氏の談として「獅子の源流は印度の昆伽羅菩薩とかゞ牝獅子牡獅子の戯るゝを見て思ひ付いたので、之れが支那に傳はつてゐたのを、支那留學中の吉備大臣が、日本に傳へ、

角兵衛獅子

夫から下つて國分獨一なる者、之を演じて上方で流行らせてゐたのを、越後の國西蒲原郡月洞村の住人角兵衛、上方へ行つた次子に習ひ覚えて越後に傳へた。昔は農間に百姓共が之れを行ひ、連者の者へは上杉家から御褒美を下された云々」とあり、昔は關所に手形を要せず踊風俗のまゝ通らしめたといふことで慶應時代には三十餘の親方が月洞にあつて各々七八人宛の獅子を養ひ、年中該郷に出て居ても毎年六月二十四五兩日の村の地蔵祭りには必ず歸る習慣であつたが、今は次第に衰へた（全書）といふことである。

此月洞は年々水害多く生計の途を立て難き所なりしを應永年中角兵衛なるもの之れを憂へ、子供に獅子舞を教へて諸方に勧進せしめたのに初るとも傳へられて居る。

七不思議 越後を語りて逸すべからざるは七不思議である。長赤水の「探北越七奇記」にいふ、一は臭水、岩船郡黒川村又蒲原郡柄目木村にあり、二は大井、これも亦柄目木にあり、三は八房の梅、同郡小島村にあり、四に三度栗、同郡安田にあり、五に逆竹、同郡島屋野村にあり。六に御身佛、三島郡野積村最上寺にあり、七に燃ゆる土、同郡柿崎村にありと。臭水、火井は今の越後の富源たる石油にして、史には早く天智天皇の時、越の國より燃ゆる土と燃ゆる水とを獻するの記事あり、南畝の「東遊記」には「三條の南、一里如法寺村に自然と地中より火燃え出る家二軒あり、

火井と臭水

觀覺上人
と不思議

三尺四方程の圓爐裏の西の角に古き鏡臼を割え、其の穴に等柄の竹を一尺餘に切りてさし込み、其の竹の口に火をともし」といひ、此村より十里あまり東北の柄目木村にも之あるをいひ、奥水の油に就て「黒川の東南五六丁ばかりに藪村といふあり、其の所に鯛名川といふ小川あり、其の川端に少しの岡ありて杉林あり、其の所に小池ありて油湧く」をいふ逆さ竹は、昔觀覺上人此國へ配流の時、携へ給ひし杖を逆さに地に挿し、我が説く所の法、世に弘らば此の杖の竹、復び榮ゆべしといひ置きたまひしに、其の杖さかさまながらに枝葉茂り、其後、其の根に生ずる所の竹皆な逆さまなりとて、今、古跡を鳥屋野に遺し、其の竹の枯れたるが新潟の淨光寺に藏されて居る。八つ房の梅も亦觀覺上人が梅十を植えて此法弘らば此梅花を着くべしと誓はせられしと傳へ、一つの菊きくに八つの花開き、八つの實つくともてはやされ、三度栗は之れ亦觀覺上人の植ゆる所と傳へ、一年に三度實るを以て奇とせらる。津川玉泉寺の即身佛に就て、「探北越七奇記」には「余前きに弘智を見ず恨と爲す、幸に寺に入つて之れを拜せんと誘ふ、僧出でて籠を聞く、乃ち淳海上人、寛水中入定屢なり百餘年を経るといへども鬚鬣散せず、これ其行の力に因ると雖も、蓋し陰寮の地然らしむるか」とあり。されど吾輩に越後七不思議の中に加へらるゝは此の即身佛にあらずして弘智法印の乾軀にして大説三千歳が「行脚文集」には「六根定に入り、

即身佛と
弘智法印

體

それなる道邊の石壇に安坐して定心無動禪身ながく靜かにして雨露にうたれ、四百年以前までは印結堂々として坐せしを、野狐疑心の漢、槍にて右の脇腹をつきしより其の跡痕にて侍りし、こなたの古塚は其の絶天洞死の墓にこそあれ」とあり西諸原野積の西生寺に藏するものである。これらの外、兩筋の「東遊記」には「又繫ぎ標とて觀覺上人、糸につなげて持ちたまひし標の實を植えられしに、今に至り其の標に糸の透りたる穴ありといふ、又七ツ坊主八ツ瀧とて、八ツ時分に見れば、瀧の如く、七ツ時分には坊主の形に見ゆる山ありなどいふ、其の山を問へばさだかに知れず」とあり、別に鎌鏡といふものありとて、

これは越後の國中いづれの所にも、折斷あることあり、老少男女の差別なく、面部又手足などを太刀にて切りたる如く、おのれと切るゝことなり、疵の大小定らず、或は堅或は横にて見事にきらるゝたり、されど骨の斬ることなし、又格別血の出るといふにあらず、只寒熱強く發し時疫傷寒の如し、其時其地の傳來にて古き所を黒燒にし白湯にて用るに數日の間に平癒し、疵の跡も見えず、なほるといふ、此鎌鏡に出合ふこと或は何方の堤又はかしこの辻など大抵は定りてあり、然れども何のわざといふことも知れず、此事越後に限らず、奥州、出羽、佐渡などにもありといへば此地陰寮の瘴毒、人にあたるにや

波の題目

とあり、外に波の題目といふことありとて、

波の題目といふは寺泊りの海中にあり、昔、日蓮上人佐渡へ配流の時、海上に書きたまひし妙法蓮華經の文字、今に残りて、法華信心の人船に乗りて其の所に至れば、波の上に題目あらはるゝとなり

とある。七不思議の數へやうも人によつてさまざまに多くは不思議ならぬ不思議、科學の知識の進みては大抵解釋の加へらるゝものであるが、目下尙ほ研究中に屬し、生命に關する不思議ともいふべきは信濃川沿岸古志郡黒條村と下川西村との間の島、阿賀野川沿岸並に北浦原郡安田村と中浦原郡須本村との間の島に居るといはるゝ恙虫で、此虫に螫さるゝ時は一週間か十日目に頭痛惡寒を生じて次第に熱を加へ、瘧口が赤く腫れて二三週間に死ぬとか助かるとか定るといひ、甚しきは其の爲めに一家死に絶えたものさへあるほどで其の虫は一に鳥虫といはれ、其の形が恙といふ字に似て居るので、野鼠に寄生して居るといふことである、年々其の害に罹るものは二百内外で、中五六十名は死ぬといふ恐ろしい地方病で、これも亦七不思議の一に算定せらるゝこともある。

此外にも尚ほ七不思議の中に算定せらるゝものに雪女郎とて雪の中に旋風が起つて飄忽のやうに竊に上る

恙虫

雪女郎と
黒鳥兵衛

狀が女が裳を引いて立ち上つたやうであるというて、これも七不思議の一つとし、又西浦原に昔、安倍貞任の頃、黒鳥兵衛といふ悪人が虐殺せられて首と胴とを別々の處に擲つたから首に還ひたいとて胴が鳴るやうな聲が聞えることがあり、それがあれば天気が變るといはれ、其他、山田の姥首、米山の龍燈等諸種の不思議が數へ立てられてなかく七つどころではない。

彌彦山と彌上山 越後平野の四方なる海岸に隆起して、耕耘を要視する如きを彌彦山といひ、標高二千八十二尺、良寛をして、

百傳ふ、伊也日子山をいや登り、登りて見れば、高根には、八雲たなびき、麓には、木立神さび、落漣の、水音さやけし、越路には山はあれども、越路には水はあれども、これをしも、うべし官居と、定めけらしも、

伊夜比古
神

と誤はしめ、頂上は伊夜比古神の奥の院とし、山麓彌彦村に國幣中社伊夜比古神社あり、祭神は天ノ香語命にして俗に伊夜比古といふは、この命實は天孫の支孫たるに由る(神祕志)社傳によれば神武天皇の四年、越の國を天ノ香語命に賜うて越の國は汝の子孫遠く長く治めよと詔らせたまひしかば命、海路を航して米水の浦に着きたまひ、眞霧深朝倉氣の國とのたまひ、茲に官居して順はぬ者を討ち平げ、國民に耕種樹漁製鹽の業を教へたまひしといひ、林道春の「伊夜比古神廣記」には「元明天皇、和銅二年、秋八月、此國米水の浦に光あり、七日七夜にして止まず、海人

之れを怪む、時に堀上河内の遠祖なるもの舟を繋うて往き之れを見るに神船の海に浮ぶが如し、其の光輝んで太子浦に到る、乃ち祠を立て、之れを祭る、後夢に人に託して櫻井の里に移らんと欲すと事、以圖し、謂して使を遣して之れを檢し、元正天皇の養老三年、神宮を修營し三十三年毎に之れを改作するを例とし、其の材木を佐渡の國に取る。米水の浦初め逸濱と名く、神の來り現するに及び、白髮白水これより流れ出づ故に今の名に改む、其の神、携へ來る所の寶物皆な化して石となる、其の形悉く其の器の如し今に到つて存す」といひ、且「神杖樵木を以て之れを爲し殿前にあり、若し國家事あれば其杖具を示す、祈請すれば賊に向つて敵し其の杖葉を以て神劍とし、其の指す所悉に伏せざるなし、之れに加ふるに水旱必ず祭り、風雨必ず祭り、穢瘴必ず祭る云々」とある。其崇敬の狀も推察することが出来る。神佛混淆の時代には社内に神宮寺あり、之れにも一種の傳説を有し、昔、浦原郡中島村に漁夫彌三郎なるものあつて矢郷川にて夜漁せしに忽ち暴風雨に遭ひ、中に物あり來り襲ふが如し、乃ち鎌を振つて之れを斬りしに鬼の首たりければ家に還りて之れを老母に見せしに、老母は忽ち鬼形を現じて飛行し去り、其の間中には枯骨を山の如くに積みありければ彌三郎大に悉みて此の神宮寺に入りて僧となり鬼女を妙多羅天といひ、法を修して之れを鎮めしが土俗は雨雪風雷の烈しき時を妙多羅天の薙れといひ（北越

彌三郎妻

（傳説）又子供を囓すにも彌三郎妻が來るといふ。

此彌三郎妻の傳説には異説があつて彌三郎を柏崎八石山下美根村の住とし、鬼は八石山に逃げ、對面内に住むで幸い日傘と赤の衣を見ると、さても難言い奉式かなと糧を掻き渡つて屍體を食ふといはれ、同村淨觀寺の住職が昔の日傘に背の衣に改めてから糧は取られなくなり、彼も彌三郎の方へ飛んで行つたと云はれて居る（日本傳説集）

此の彌三郎の山脈に國上山があり、こゝに眞言の瓦剎國上寺ありて、昔は彌三郎の本社堂と稱されたので、古くは聖德太子此山に上りたまひしと傳へ、寺傳には和銅年中、伊夜比古神の託宣によりて草創すと云はれ、當國國護佛法最初の靈場と云はれ、「元亨釋書」には北陸山嶽教の祖と云はる、越の奉澄が造塔の事を載す。文に、

神宮と山

國上山寺、一檀信、塔婆を造る、落成の日雷電擊破す、檀信改め造る、雷又之れを撃つ、凡そ三たび造つて三たび壞る、澄、之れを聞き、往て檀信に語り、速に寶塔を造らしむ。既にして塔成る、澄、傍に坐し法華を誦す、俄に雲雨雷電し、忽ち一童男雲中より落ち、五處の縛を被り涙を流して教を乞うて曰く、此山の地神我と盟ひ厚く、此地塔を立つ、地神住む所なし、故を以て我輩々之れを撃つ、今妙法力によりて地主移り去る、今は只だ法師の慈教を仰ぐのみと、

澄曰く、此寺水なし、遠く澗谷を勞す、若し甘泉を出して佛僧に供せば、我、汝の縛を解かん、又雷は此地の妖、方四十里、聲を作すべからずと、童曰く、水を出す甚だ易し、四方四十里、吾亦來らず、言ひ已れば縛を解く時に岩穴中清泉進出し、二事今に替らずと、山中、泰澄懸掛の松、雷井、井に蒲原郡砂子塚に生れたりと云はる、酒類童子の住みしと傳へらる、岩窟がある。童子の事は丹波の條で説く。

柴山 南野の「東遊記」に「米山といふは登り下りにて三里の山にて、此あたり第一の高山なりまことに越後を二つにわけたる山なり、此山高しといへども奇妙の山にて山上七八分までも山中に田作して水がよりよしとなり、故に米山と名づくるといふ」といへる米山は標高三千二百八十八尺、山頂に藥師堂ありて、こゝにも泰澄の傳説は加へられて昔、元明天皇和銅五年、泰澄の此山に登りて藥師堂を安置せし時、出羽の國の住人神部清定といへるもの上米を積んで北海を渡りしを見て、泰澄の弟子鉢を飛して供米を乞ひしに、こは數の定りあれば供養し難しといひければ弟子は空しく山に歸りしに、不思議や、船中の米櫃の飛ぶ如くに相違つて山に飛び來りしを以て山を米山と號し、清定は上米を納めて後泰澄に謁し落髮して淨定行者といふと傳ふ。但語あり、米山甚旬といひ、人口に膾炙して居る。

米山甚旬

米山甚旬

いこか參らんせうか、米山の藥師、一つは身のためサ、ぬしのため。

主のためなら米山さまへ、はだし參りもつらくない。

海道と山間 越後の國は中に大平野を抱くと雖も、山嶽は三面を圍み、背後より此國に入らんとするには、何れも山又山の峻路を踏破せざるを得ず、一路細く海に沿うて相通せる縦貫線も、其の羽前方面よりするものは山海相迫る、鼠が關あり、峻坂と峻路とを以て知られたる蒲荷山あり

鼠ヶ關

「諸國里人談」は鼠ヶ關に就て、「越後出羽の界に根矢の浦（今巖屋に作る越後岩船郡に屬す）といふ所海中に圓き高き大石あり、徑百間餘これを根矢の針立といひ、此の石に寄生蟲這ひ上り、石の頂に至れば天上すといひつたへたり。皆半途より落るとなり。裾に寄生蟲の空貝、眞砂の如くもあり。又根矢の浦より、三里、出羽のかたに鼠關といふ濱あり、此所の石すべて鼠の喰ひたる跡の如くにして穴あり。」といひ「晴風土記」は蒲荷山に就て「名高き巖所にて雪中には全く通ぜず、半ば過ぎ行きて谷あり、其の邊數丈の岩石の上に矢向神社の社あり、云々」といひ、其の越中方面よりするものには有名なる親不知の嶮あり。「東遊記」には、

親不知

越中越後の堺に親不知子不知といふ所あり、北陸道第一の懸所として、あまねく人の知る所なり。越中立山の堺、北海へ張出したる所にて、市振といふ驛より巖といふ所までを、山の下と

龜割坂

稱して二里半あり。立山懸なる故に、斷崖絶壁にて踏程も付がたき故に、波打際を旅人通行する道幅七八間或は十間許あり、又所によりて半丁一丁もある所あり、然るに風起り波打き時は、直に彼の絶壁の所へ波打かけて通路なし。右二里半のうちに一ヶ所、長さ五六丁の間、割して道幅狭き所あるを、世に觀不知子不知といふ。甚だ難所にして、觀も子を思ふにいとまなしといふ心より、土俗稱し來りたるなり。其間絶壁の根に岩穴ありて、十間程づ、置いて其穴幾つもあり。波の打よする時は、通行の人此穴へ走り入つて波の引く時を見合せて走り過ぎ、又波來れば次に入つて是れを避く、もし北風強き時は、數日を歴るといへども通行ならずとなり。とあり。若し其れ上越下越を境せる米山の山中には天文十六年、府内勢が上杉景虎の爲めに敗れて此所に追ひつめられ、幾千丈しれぬ磯より人馬は海中になだれ落ちて悲慘なる溺死を遂げたりと稱せらる、北國屈指の難所龜割坂がある。海邊已に此の如し。山又山の山間に入りては長く他と交通せざる部落ありて、高場、高倉の諸山に圍まれ、信、上、越三州の管間に介在する秋山郷の如きは風俗言語、太古の民、其儘にして男は狹袴（はちまき）といふを穿ちて山刀を横へ、中には髪を結び、鐵盤（てつばん）を含むものありて、昔、平織盛が越野より逃れて其の臣藤秀と共に隠れ入りて一村を爲せりと傳へられ、明治八年に至りて初めて米を作り、之れを粟や粉の實に混じて又神粉、獸肉を常食

秋山郷

三面村



花水泉

とし、冬は山谷に佇して櫛を斃し、穢を追ひ、家は杭を建てて上端を結び、それに茅を葺ひて造り、富人にあらざれば床を設けず、(新撰名勝地誌)と岩代、羽前に接せる山間三面川の隘谷たる三面村に就て「新撰名勝地誌」は「証實新聞」の記事を引用して「三面村は戸數二十八、人口百二十六、村上町(岩船郡)より九里の山間にして、途中、岩崩村と稱する癩病村をば過ぎて四里十七丁の間は臺灣蕃地以上の險阻にして蝮、墨蛇、山蛇等の米蟹類りなり、村は墨瀨の山腹に位し、猪保、三面等の諸水に包まる、地高凡そ數千尺なり、極めて不潔なる村落にして、

粟を常食とし民法制定以前は血族結婚を行ひ、他部落との婚姻を避けたり、(中略)村の由来は七百年前平氏の一族、大池大炊之助なるもの伊藤、高橋の二家臣と共に黒淵山の強賊木野藤右衛門を倒して居を構へしに始まり、爾來今日に至るまで血族結婚を爲し來れるものなり」といふ。山中の風俗更に探るべきものが多いであらう。岩代に近き東蒲原郡三川村の薬師堂は永延元年平維茂の建立にかゝると傳へられ、寺に平維茂の碑がある。越後の山間由来平氏に縁多しといふべきである。

粟生島

既に山間の風俗を見たり、越後には岩船郡福波の海と七里館の所に粟生島がある。周廻四里餘、人口約六百、牛馬を放蕩して耕種の期に至れば捕へ來つて使用に供す、島民敬神崇佛の念深く、人情頗る質朴にして、死者ある時は島人旗らず築まり、諷式に會す、これ従前島内に限り結婚せしが故に、血族を推す時は全島みな親類の關係あるが故なりといふ。(越後風俗志)

花水神事

北越の祭祀に奇習多きも、中に就て尤も著名なるものは花水祝と堂押である。「北越雪譜」は魚沼郡宇賀地の郷、堀の内に正月十三日に行はるゝ花水の神事に就て「前年に新婚ありつる家毎に神使を遣し新婚の婿に水をそゞぐにて神使たるべきは氏子の中の舊家にて、立派なる行列にて其家に至り、其家の親子は麻上下にて地上に出で迎ふ、神使の神履取、大聲に正一位三社の官使者と大呼す、亭主地に平伏し、これを座敷に引き祝儀あり、これは花水をたまふことを

告知するにて氏子の中數十軒の新婚あれば此の如くして數十軒めぐり、神使歸れば、踊り行列繰り出し傘、矛に水引をかけ次に假面にて天鏡女に出立たるもの一人帯の先きに紙に を描きたるをつけてかたぐ、次にこれも假面にて鹽田彦命に出立たるもの一人、麻にてつくりたる繩帽やうのものを被り、手杵のさきを赤くなして に表示したるをかたぐ、それより法服いかめしき山伏それより踊りもの大勢、群り行くこれをこうりんしやうといふ、降臨象の意にて天孫の降臨を象れるなるべし、さて婿の方にては簾を布き、それに新らしき手桶に水を入れ松葉と昆布とを水引にてむすびつけ、簾の上にく踊り手かたの如く簾のめぐりにむらがりてさんやめでたい、花水さんや、せなにあびせん、わかせなにとて婿に水をあびせるなり」と、此風は廢れたるべきも、今も残れるは昆沙堂の堂押である。南魚沼郡浦佐の普光寺昆沙門堂の本尊は椿を以て刻みしを以て此地椿忌むこと甚しく、椿を斬とすれば必らず祟ありといひ、又椿を植えず、本尊、鳥をとることを忌みたまふとて諸島中に群を爲すも捕ふるものなしと、此門堂に正月三日(今は三月三日)の夜堂押といふことありて遠近の男女來るもの多し。「北越雪譜」は其實験を記して、

昆沙門堂の堂押

さて神に來りし男女先づ普光寺に入りて衣服を脱ぎ棄て身に持たるものも袂に置き棄て、婦人は浴衣に細帯まれば裸體もあり、男は皆な裸なり、燈火を點するころ、かの七間四面の堂に浴衣裸體の男女押入り

て誰も立つるの地なし、余も若かりしころ一度此堂裡にあひしが、上へあげたる手を下へさぐることもならざるほどに迫りたり、神といふは誰ともなくサンコウノと大音に呼ばる、際の下に堂内に充滿たる老若男女ヲ、サイコウサイと呼はりて北より南へころノと神し又よぼはりて西より東へ神し此一神にて男女ともに元結おのづからきれて髪を亂すこと甚だ奇なり、(中略) 祝んや此堂裡にいさゝかも怪我を受けたるもの音より一人もなし婦人の中には湯具ばかりなるもあれど蘭風におやくやして人もみだりがましき事せず、これおのノ、昆沙門天の神罰をおそる、故なり、標なる所以は人氣にて堂内の熱すること熱ゆるが如くなる故なり、願望によりては一里二里の所より正月三日の雪中寒氣肌を射るが如きをも厭はず、柱の如き木柱を裸身に背負て堂裡に来るもあり、二々神三神に至れば如何なる人も熱きこと暑中の如き故、堂のほとりに大なる石の手洗水櫃に入りて水を浴び、又神して入るもあり一神しおしては息をやすむ七神、七神にて止むを定めとす、神といふも桶の中に手洗ふが如し、故に人皆な満身に汗を流す第七神りめにいたりて普光寺の山男(寺男のこと)手にさゝらを持ちて人の手籠に乗りて出来り人の中へ神し入り大音にて「昆沙門さまの御前に黒雲が降たモウ衆人」なんだとさがつたモウ山男未がふるとさがつたモウと、神をする。

皇王の堂

と、此堂押しは、此處のみにあらず、長岡市藏王安善寺の昆沙門にも此事あつて、頃は北國の空は雪僅ひにて、時に寒風吹き荒む三月の三日數百の信徒は禪一つの眞標で垢離を取つて堂内でサンコウノの掛聲いさましく、押合ひを爲し、神前の供物を撤くのを争ふて奪ひ合ふ様、一種凄絶の氣が漲るのである、供物を拾つた者は其の年福徳が恵まる、といふ云ひならはしである。(ながを

彌彦舞

燈籠押

燈籠押

漆千盃

か) 其他伊夜比古神社は由緒ある大社なるを以て古式を存すること多く本社特有の彌彦舞は仁明天皇の御宇、尾張連演儀を清涼殿に召し和風長壽樂を舞はしめ賞歌して御衣一裝を賜へることあり、勅して舞樂を移さしめ、毎年三月十八日神前に於て之れを奏することとなりしと傳へ、又大祭の日には木と紙とで造つた大きな燈籠を數百本にて互に押し合ふ燈籠押といふ風俗がある。長者傳説 大地主の多き越後の平原には長者傳説も從つて多く、「北越奇談」にいふ「漆千盃、朱千盃黄金千兩朝日映、夕日有三梨樹下」此の如きの古碑、他邦は知らず、余が國已に三ヶ所あり、其の一長岡の東山下釜ヶ島村、觀音は其の二は新發田より南牧山藥師、其の三村上關谷桂村なり。其の里俗頗りに此の古碑を墓ひて、昔、長者、其の黄金を土中に埋め此碑を立つも今其所在を失ふて尋ね求むるに由なしといへり」とあり。此傳説は東京其他に於てもしばしばあるが如く、長者が黄金を埋めたる所とせらるゝもので、別に鳩羽郡鯉波といふ所に玉屋徳兵衛といふ長者があつて、鯉波の患を除かん爲に其の金を梅の樹の下に埋め、自分は或る山中の温泉に赴いて居ると、其の湯壺の中で

越後鯉波玉屋の梅

枝は白銀葉は黄金

枝は白銀と誤ふたものがあるに驚きて、家に歸つて見ると金銀の精は棒に吸ひ取られて枝は白銀葉は黄金になつて居つたといふ傳説もある。

傳説と縁起 不思議に富む越後の國には遠州に飛行して神威を示せる三尺坊も此の國に生れ、丹波に入つて怪異を逞ふせし酒誦童子も此國に生れたと傳へられ、其の史蹟に關聯するものには此の國を過ぎて奥羽に入りしと傳へらるゝ源義經に就て、新潟市の蒲原神社には畠山重忠の一族秩父六郎重宗夫妻が義經を尋ねて此國に來り、終に相違はざりしが故に僧となつて其の居宅に一字を建立したといふ傳説を有し、三島郡寺泊町には義經の主従僅に十一人羽黒道者に扮して宿りしといふ古蹟あり、騨四三十町の所には、其の臣たりし佐藤綱信、忠信追福の碑あり、二人の母此の地に來りて其の死を聞き

はらからの行方はるかに尋ねこし

かひもなごさの泡と消えしか

と吟みて尼となりて冥福を嘗みしと云はれ、米山なる龜割坂の附近には義經の妻京の君出産に用ひしといはるゝ産の水と名くる井あり、其他源家に關するものには岩船郡鹽野村港山神社は源義家が旗旗の際箭を以て社殿を葺きしとして矢葺明神と云はれ、田端を放生するを以て名高き菅谷不

日蓮上人

動は頼朝俗縁の叔父護念上人の開基と云はるゝ等の縁起を有して居る。七不思議の中には親鸞上人に關するもの多く、其の他にも中頸城なる關川には上人が大蛇を退けられし袈裟掛の松などあり此國より佐渡に流されし日蓮上人に關しては配流の時、寺泊在なる石川吉廣が新に井を穿ちて親の水に具へたといふ親の井は赦免の際に三十番神を勧請せられた刈羽郡の番神ヶ鼻と共に其の名を著はせるの類少からず。更に二三の傳説を拾はんか。

黒坂山

黒坂山傳説 西頸城郡青柳村の南に當つて天窓に聳つ黒坂山の山中に巖窟と稱して高さ八里板四間の大鐘乳洞ありて太古奴奈阿比賣命、此處に住みたまひしを大己貴命、出雲より來りて祀としまひしと傳へ、山上の岩窟の内神の機を織らるゝ管が時々聞えりと傳へられてゐる。

乙姫

乙姫傳説 刈羽郡北條村に乙姫といふものがあつて事は見えぬが村人の爲めに種々のことを顯示して大に利便を興へて萬人などある時は問ふに任せて答へ、大に村人に愛敬せられて居つたが、成る時風の油揚を餌として田畑を荒す狸や兎を捕らうとして係纏をかけて置いたのに掛つて助けてくれ、乙姫だいや」と叫びながら息が絶えたのを見れば大きな白狐であつたので洞を建て、之れを祀つた。(縁味の傳説)

青柳池

青柳池 中頸城郡青柳村の青柳の池といふのがあり、池の主は龍にて其の棲家には二つの窓がある。一は高田市の善徳寺の井戸、一つは南方村の四光寺の井戸で池主の龍は時々女の姿になつて此兩寺に詣づるがそれは住職の眼にしか見えぬと傳せられて居る。

おまん井

おまん井 刈羽郡の會地峠にあり、其傍に立つておまん井と叫べば屹度水面に小波が起る、昔、成る武士が妻に溺れて本妻のおまんを致して此井に投じたのだと云はれて居る。(日本傳説集)

馬の神

馬の神、北魚沼郡須原村の大倉慶吉は馬の神と崇められ、大倉祭りと呼ばれ、馬に盛装をさせて曳き行く風あり、日頃馬に勞役をさせる時にも「大倉祭りをさせるぞ」と馬方若衆に囁し立てるを常とすといふ。河童の遊び、當國の渡場にては決して夕顔と胡蝶とを作らぬ、これは河童が嫌ひだから之れを作ると渡船に害ありといふ。(越後風俗史)

著し其れ

来いとゆたとて行かりよか佐渡へ

佐渡は四十五里波の上

お辨が渡

といへる越佐兩國の海上を懸ひ故に通うたといふ傳説は、佐渡のお辨といふ女が柏崎の男と契り、毎夜／＼大なる雲に乗つて海上を番神の常夜燈を目當てに通ひ來りしを男の氣味悪く思ひて燈明を吹き消せしより女は方向に迷ひ、終に死屍となつて青海川の絶壁より落る所へ漂着したから其處をお辨が渡といふ(日本傳説集)と傳へ、又湯町の磯明神の常夜燈を目當として通うたといふて同じ傳説があつて其の女の死體の腹部は人魚のやうに細い赤と銀とを交ぜた鱗が生えて居つたから人魚塚として明神の傍に葬つたとも云はれて居る(越後の傳説)戀にはあらぬ神話としては、昔、羅石明神が兩國の間に橋を架せんとして多くの舟船を使つて石を運ばせ夜の明くるまでに仕

人魚塚

岩の掛橋

懸げんとせられたのを、舟船の中のアマンジヤクといふ竹け者が夜半過ぎにもならないのに鵜の啼く眞似をしたが爲めに明神は其の仕事を中止せられた、今柏崎東北六里ばかりの石地町の海岸に巖石が五六町も出て居るのは其の名残りで之れを岩の掛橋といふ(郷土研究一ノ一)のもある。佐渡の風俗と史蹟傳説 佐渡は越後の西北に當る日本海中にある一孤島にして東四十二里、南北十八里古來一國と稱せられしが、今は新潟縣に屬して國名を其儘に郡名とせられて居る。山深からずと雖も峻しく、川瀆からずと雖も清らかに國の周りにある村里多くは山に背きて海に向ひ、新潟を距る海路三十二里の所に夷港あり、兩津町と呼び港に近く加茂湖あり、周圍四里二十三町人情淳樸なれど稍淫靡の風ありと見えて、田山花袋氏は「漁夫または遊離船客滞在する土地の習ひとして風俗は概して淫奔に男女の野合盛んに行はれ下婢を雇ふにも午後十時以後外出を禁ずる時は給金を多くするも應ずるものなしといふにても、其他を推知すべし」(新潟名勝地誌)といふ。今はいかゝることもあらざるべけれど、色の港と云はるゝ新潟と相對し、諸事其の感化を受け、郡

夷と相川
と小木

の首邑たる相川町は名高き金礦に近く、古來幕府の直轄として佐渡奉行を置きしを以て東部の風化を受くること多く、四南端にして、越後の柏崎へ十八海里出雲崎との間に汽船の往復ある小木町は上方との交通に利便なりしが故か、其の感化を蒙ること少からざれど概して質朴にして、幸

人情

田氏が「人の活氣の乏しき代り狡黠のもの殆んどなく、性質鈍なる我等にはいと好ましくおもはれて、我れ若しいよ／＼世を厭はゞ木曾路の中か、此島の中かに潜み遁れむと知れぬ未來を温るほどなり、されど十年二十年過ぎ、諸國のものます／＼入らば如何に變化をなすやらむ、今は里程を尋ねても五十丁一里で答ふるまでに古風を失はず、言語も「らりるれる」に異しき訛ある外には厭はしき調子なし」(真心後記)といひ、又「往時は草割といへる小刀もて故き衣を割きて緯とし、麻やらしたの緯やらを經とし織れる割織を着して」(同書)といはれしほどであつた。島は古風の殘留場なる上に此國は古來遠流の地として著名の人士の來り止るもの少からず、平安朝の昔に於て三國真人廣見、伴宿彌清經、僧蓮茂、藤原致忠、橘俊孝、清原守武、中臣輔弘、源義綱等ありて、文化を輸入したるあれど、此國人に印象深きはいふまでもなく、承久の亂に此國に遷されたまひし顯徳上皇にして

黒木御所

なけば聞く、開けば都の戀しきに

此里すきよ山ほとゝぎす

との御製ありしと傳へらるゝ黒木御所の遺蹟は行旅の客をして轉た暗涙をしのばしめ、其山陵は眞野宮として崇められ、上皇此國に遷らせたまひし後二人の皇女、一人の皇子降誕あり、之れを

眞野宮と日
蓮上人

一の宮二の宮三の宮として祀る、上皇に次で國人が其の遺蹟を誇るは日蓮上人である。上人初め大野に來りて、小庵を結び給ひし時、遠藤爲盛夫妻の深く其徳を慕ひて食を送りし遺蹟は今根本寺となり、爲盛は後に阿佛坊と稱し、其の子盛綱は豊後坊日滿と稱し家を捨て、寺とし、後これを眞野寺に移して寺を妙宣寺といひ、松崎の本行寺は上人此地に上陸したまひし時、此所の明神、童子の形を現じて上人を木の中に誘ひし靈蹟なりといひ、小木町の西なる安養寺は上人の弟子日朗が敎免の敎書を書して着船せし所なりといひ、島内各所に上人の歴史を語り、信徒の靈蹟を拜するもの少からず。其他吉野朝の忠臣にして此國に流され本間三郎の爲めに斬られし日野資朝の墓は妙宣寺の内にあり。はる／＼此國に來りて父の仇を報ぜし資朝の一子阿新丸の潜みしといふ阿新丸等は今も遺りて國小なれども史蹟殊に多きと共に勳皇の思想は此の國人に豊かなるを覺ゆる。下つて傳説を検せんか此國人の始めに就ては「天智天皇の時、土佐國山方といふ所の木樂又兵衛といふ農人、本妻を離別して後妻を娶りしが、本妻の三助といふもの繼母の讒にて此國に流されんとするを實母の悲しみて三升に飲饌などを添て贈りしを携へ富國松ヶ崎へ着し、偶ま能登の國より流れ來りし女子の棟崎といへる所にありしとめぐり合ひて夫婦となり、共に農業を営みしに初る(佐渡風土記)といひ、又「佐渡史林」載する所の「家風異書」には、奥州土佐浦の

土佐の三
助

阿新丸

幽憤人

三助といへるもの元明天皇の御宇續父の惡計にて、此國に漂着して途方に暮れ死を決せしに實母の情にて次の小艇の中に隠ひ込みありし報を得て積えつけしに初るともいふ童話的傳説があり。對外關係に就ては欽明天皇の御宇幽憤人の來紀あり、「佐渡志」には「幽憤人等、瀬川浦に移るに彼の浦の神靈に人を忌みたりしかば敢て近付けず、渴して其の水を飲み死するもの半ばに及び骨、巖岬に積みたれば俗呼んで幽憤の隈といひけるとぞ」とあり、且つ瀬川浦ならんかといひ、さて

按ずるに今も此あたりに蝦夷塚といふものありと近世まで人の骸骨を掘り出せしことありといへり、所謂幽憤塚にやあらむ、又此邊りの古き童話にも

片部、鹿の浦、中の水をのむた

毒が流るゝ日に三度

とうたひぬ。されば夷人の飲みし水も此流れにて古へ此水に瘴氣の氣ありて飲むもの其毒にあたりしを年経て後も其の事をうたひけるにや。

と考證したるは能海の孤島に相應しき傳説ではないか。毒が流れるといふには尙ほ一つの傳説がある。

安壽屋

それは既に陸奥の丹後入道傳説で見た安壽屋が三莊太夫の爲めに此國に誘拐せられて盲目となり非常に苦められたが、弟の土王丸とめぐりあひ片邊の里の中の水で目を洗つて快癒したから其水を飲むと傳だとして、此の「片邊里浦の中の水飲むと目が流る日に三度」といふ童話をも生じたのであるといふ。

佐渡の霧 元來佐渡には狐狸は一切跡を絶つて怪異を爲すものは悉く絶て、人を魅かすも人に悪くも皆な絶とせられて居る。此國に霧の多いのは其金山には吹竈の用があるので其の風穴の皮は霧に阻る所から之れを山に放ちて野飼にして繁殖せしめたに初ると傳へられ、これらの霧の首領を團三郎といひ、相川の町に近き二つ岩といふ山中の洞窟に棲み、諸種の怪異を爲したと傳へられ、馬琴の「燕石雜志」にも

團三郎

佐渡二つ岩といふ山中に年來久しく棲む團三郎といふ狸は頗る靈ありといふ。此老狸、昔は人に金を貸しけり、彼れに借らんと思ふ者は金の員數と返済の日限を書きつけ、之れに名印を押して、穴のほとりに差置き、あけの朝又行て見るに貸さんと思へば其金穴の口にあり、後には金を借るもの數多あるまゝに返さざる者も亦夥しくありしかは遂に貸さずなりしとぞ。との穢貨傳説と趣きを同うするものを舉げ、更に、

醫師伯仙は佐渡の人なり、三世方伎によし、其父嘗て佐渡にありし時一夕隣里なる某甲急病あ

りとして鶴子を置らし町噂に遊へらる、知る人にあらぬど辭するに由なくて、其家に赴き湯藥、膏藥を與へ亦遊られて歸りつ、かくて四五日を経て、患人おこたり果てたりとて自ら來りて喜びを述べ謝物として方金數百兩を盆に盛りて差し出しにければ醫師大に怪みて之れを受けず、僅に四五兩の藥劑をまゐらしたるに、かゝる謝を受くべきことかは、吾年來こゝに住めば豪家は其名を知らざるものなし。抑も足下は何人ぞやと問へば、件の男打ちほ、笑みて、疑はるゝも理なり、我れは人間にあらず、二ツ岩の團三郎なり、まけて此の金を納めたまへといふに、醫師頭を打ち振りて團三郎ならばいよ／＼受け難し、錢は人間日用の寶にして禽獸のために益なし、然るに汝甚だ富みたり、必らず不良の財なるべしといへば團三郎又いへらく、己が金は不正の者にあらず、或は兵火にかゝり、或は洪水によつて溝窟に埋れるものを拾ひ集めて貧しき人を濟ふのみ、疑はずして受けたまへと請ひ進むれども、醫師固辭して受けざりければ其日は空しく立ち歸り、次の日に短刀一口を以て來て、これを醫師に贈りていへらく、此刀は貞宗が打たるものなれば己れ年來秘藏せり、國手の藝を蒙りて疾病忽ちに怠りぬるに物受けたまはぬ心苦しくこそ候へ、これをば受け納めて我が志を果させたまへかしといひつゝ、刀を主人の前に置き、形は消えてたかりけり、されば彼の短刀を伯仙は傳へて家寶とせりと云ひ傳へたりとな

ん。

といひ、更に「越後名寄」を引きて、

寺泊、出雲崎の海邊にて春夏秋冬の間天晴れたる夕海上遙に佐渡を眺むれば二ツ山の方に當りて雲にもあらず、霞にもあらず、青きに黒色を帯びたる氣の立ちて、或は樓閣或は城郭、渡殿、廊下、石垣に至るまで全備して見ゆ海市蜃氣樓にはあらで、これは佐渡なる二ツ山に團三郎といふ鬼ありて、これが所爲なりとぞ、時々これありといへり。

といひ、「佐渡には狐なく、狸と貉とありて改革の用をなせり、亦これ造化不測の功なり」といふ。團三郎の談は「怪談藻彙草」にも出で、古老も語り傳へて佐渡の傳説の趣味ある一節となつて居る。「佐渡志」には「狸は方言ジフモンジ種なり、貉は方言ムジナ、甚だ多し、一種小ムジナあり方言トンケボウ外海部村々に多し」とある。當國羽茂村字大石は若狭の傳説として、著名なる八百比丘尼誕生之地とし、「佐渡山水」には「昔、此里に一女子あり、父が異人の變態を受けて持ち歸りたる人魚の肉を食ひ、百歳、二百歳經るも容貌衰へず、後、若狭國に移り住み、久しく経て歸りし時、里人に遺恨限の所在を教へしことあり、(今も此里にある大石は其限より出たるにて村名も之れより出づ)再び若狭に往きしが、後二百歳をば國司に譲るとて八百歳にて

八百比丘尼

大膳社

設したりしに、神に祭られ、八百懸明神といふと傳へたり」とある、これも亦怪異談の一に加ふべきか。竹田村なる大膳社に就ては彼の日野阿新丸を助けたる山伏、其名を大膳坊といへるが、其後此國へ渡りし時、本間山城守、生捕りて梟首したるに、其靈死れて怪を爲し里民を苦めければ終に一社を造營して大明神と崇めしより其の怪異の顯りし所なりといひ、野浦村には大膳屋敷といふありて種々の怪談を傳ふ。(世説文林)

無名異

「山鳥民謡集」には此國の名産と云はれたる無名異地に就て「佐渡の島には無名異といふ一種の靈物を出す、今日は茶碗や盃を焼く原料なれども本来は血止めの特効なり、始めて其效能を知りたるは、或る時朝の爲めに足を割じたる一羽の雉の小石を以て傷所を磨擦し、程なく飛び去るを見て、其石の外科の治療に用立つことを知り得たるなりといふ」と。

佐渡の金山 「金があるとして高慢ぶるな佐渡ぢや蛭蛸が愛にひる」と誇稱せられ黄金を呼んで佐渡の土とするほどで、此國は金産を以て其の名天下に響いて居るのである。昔、能登の國司此國へ人を遣して砂金を採りしなぞいふことは書にも出で、上杉謙信も亦此國の金を採つて軍國の用に辨せしと傳ふるも、多くは砂金にて、今所謂佐渡の金山は相川町の東北、北澤川の谷間にありて、慶長六年より掘り出し徳川幕府は之れを大寶庫として佐渡奉行を置き、重罪囚を送りて坑夫として採掘に従事せしめしにて、「佐渡日記」には「金銀湧出の山を遠く見るに、山は蜂の空巢

山の神

の如く限りなく、穿ち通し、其中冥々として水と土の氣の烟に混じ、臭きこと得も云はれず」とあり、維新後、帝室の有に歸してより泰西の法を用ひて採掘並に製煉に改良を施し、近年之れを三菱會社に拂ひ下げ、其の採掘面積百八十三萬六千坪にして三千の工夫之れに従事して年々の産額、金七十萬圓、銀二十萬圓に達するといふ。此金山の神を祀れる無社大山祇神社は相川町にありて俗に山の神といひ、慶長十年、大久保石見守長安此社を建て、石見より安岡長門といへるものを移らしめて祭祀を司らしめ、同十二年には更に幕府に請ふて京師吉田家の卜部兼治を此國に渡海せしめ、大山祇命を勧請して永く金銀山の鎮守と定め、社領五十石を附し、且つ社料御祈禱料の外に運役といふものを初めて相川の市中より銀一貫目を貢せしめて社人に賜り、後此事は止みしも幕府の保護至つて厚く、維新後も此の礦山を唯一の財源とする人々崇敬の中心となり、其の祭禮を礦山祭と稱し、従業員は今日を晴れと着飾りて當社に詣で頗る賑賑を極むといふ。

野呂麻人

「富國の神事類に就て(佐渡史社) (明治三十年發行) には「古代より行はれしと思はるゝは、野相獲駒、野相獲馬、神使、白耳、直太、田樂、獅子舞等なるべし、此中今も續續しつゝあるものは野相獲のみにして其他は本社にのみ遺りて小村の小宮には行はれぬ姿となれりといひ、且つ「野呂麻人形は近古以来非常に勢力を得て山間海邊の小村落は十の八九は之れを行ふこととなれり、此形は何の時代なるか詳かならざれども、説教淨瑠璃の起源より考ふるに天和元祿の頃に傳傳せしかと思はるゝ、兎に角此形は極尙麗

便にして老若男女の勳勞無異にもなり、平島に歴史の一端を解得せしめ義勇軍公の活氣を醸成するの手段としては大に利益ありし云々とあれば、近くまで祭事に野呂間人形の躍りしものと見ゆ。

手懸け

歳時其他の風俗 一月の梅り物に門松注連縄等は何處も同じことなれど、越後新潟市附近にては

延引棒

手懸けと稱し三寶の上に米を盛り、其上に豆の實勝葉、銀杏などを並べ、中央に墨を水引に束ね、若松を樹て長炭斗を載せたるものを置き、年始の暮に敲かしむる風があり(風俗叢書六三)家に不幸等ありて年賀の贈を斷るに魚沼頸城郡邊にては門口に三尺許の棒を立て置き、之れを延引

廣原繩

棒と名け古志、三島、刈刺、蒲原邊にて門口に廣繩を張り之れを遠慮繩といふ(越後風俗志)。正月十五日は何れの國も奇習に言むが、南魚沼郡地方にては鳥追棒とて去年より取除き置ける雪を

鳥追棒

一丈近くも山の如くに積み、棒を突き立て、これに登るべき階段をも雪にて作り、頂上を平担にして注連縄を張り、其の上に藁を敷き又は積み上げし雪の中に藁を布き、鍋蓋などを携へて鳥

追棒を通ひつゝ遊び戯る。其の唄
あの鳥や、何處から追つて来た、信濃の國から追つて来た、何を持って追つて来た、芝の鳥も
河邊の鳥も立ちやがれホイ〜

線のは

の如きは一例である。新郎に對する花水祝のことは已に述べたが、岩船郡村上町にては六七歳よ

新潟の風



鳥 追 棒

り十三四歳までの子供數十人隊を組み、十五日の未明に前年の年に婿納せし家の門口に至りて嫁の祝ひと一齊に連呼し、其の家にては繪本などを祝ひとして興へる風があり、蒲原なる五泉町附近では門松注連縄などを集めたる上に御幣を立て其の御幣の焼け落ちたる方角に其年嫁米と占ひ刈刺郡柏崎地方にては餅分の豆撒の後十二粒を拾ひて爐の一隅に並べ、これを十二ヶ月に亘して火に炙り其の焦げ方によりて一年の吉凶を卜する俗があると聞く。盆踊りは各地とも盛んにして、新潟の花柳界に行はるゝ状況に就ては、紅葉山人の「烟霞療養」に、

尤も喜ぶべきは盆踊大山酒の梅川と塔記の路ある三ッ割の樽の鏡と詞とを槌形の兩邊で、絃に

合せてカンカラコンコロと囃すのを音頭取りに揃んで、唱ひつ踊りつ、花の姿が輪を成して廻るのであるが、唱歌も異つてゐれば踊の手も異つてゐる、樽の音や拍子の異つてゐるに至つては無類の飛切で、手振と拍子とは筆紙の寫し得らるゝのでないから此に其の唱歌の一二を擧ぐれば、

染んで来た梅よ、干に紫蘇の葉、中の柄まで眞赤でてツカで染んで来た。盆だてガンに茄子の皮の蘇炊だ、餘り盛りつけられて鼻のてツから焼いたとき

と記し其の樽囃しを樽囃（たまりま）と名けて「新潟や愁を知らぬ樽囃」との句が付けてある。長岡市には其の踊なるものがあつて、太鼓、笛、三味線などで囃して圓陣を爲して踊ること他の地方と略ぼ同じであるが、其の調子は稍々緩い方で、

お山の千本櫻、花は千咲く、たる實は一つ。

お前だが、左近の土手で背中ポンコにして豆の草取りやる。

などと詠ふ大宴會などになると、終る頃には此其の踊りが出るのが殆んど例である（ながをか）。村落に行はるゝ盆踊りも大槓右の如くであるが、中蒲原郡五泉地方には圓形をなさずして長く列をつくつて踊る風があるといふ。

大崎
町

婚姻風俗に就ては殊更に珍らしきことを耳にせざれど、岩船郡村上地方にては花嫁の婿の家に至り其の門を入らんとする時に、火を跨ぐの風今尚ほ存し、西蒲原郡三條町附近にては婚姻の當夜、親戚知人打揃うて新夫婦の背中を打ち叩き、夜深更に近邊の若者共打揃ひて婿家の戸を叩くの俗あり、「日本結婚式」には越後地方の婚姻として花嫁の門に入る時、家内にて餅を搗きこれに和して高砂やの謡曲を謡ひ、其の座に若くや前の餅に黄粉を掛けて之れを饗し、さて其の後に三々九度の盃に移るの習慣ありといふ。

佐渡の婚姻の奇習ともいふべきは、花嫁と共に荷物を送らずして、荷物は立派に買家の一室に飾り、日出度出産してから後に之れを送るので、子の出来るまでは二年でも三年でも之れを止め置く、かくて子は出来荷物も送られた後に杓子を渡すとて主婦の権利を譲られるので、それまでは食客同様に取扱はるゝとのことである。（風俗叢書四四三）

佐渡の
風俗

裡謡歌舞に就ては前に擧げたものゝ外、佐渡には同地獨特の春駒舞といふものがある。これは同地金山の今透なりし元和の頃、時の彌山監督たりし味方但馬、常に馬上にて就業者を指揮し、其の施設宜しきを得たるを追慕して起つたので、

昔、但馬さんは千貫目も賣つた

今の金兒は家を賣る

當時十日目に千貫目の金銀を採取し、幕府の財政爲めに豊かなりしを記念するので、(東馬塚道氏
談) 此外

目出たや／＼、春の初めの春駒なんぞや、夢に見てさへよいとや申す、藤代、荒川、佐倉に野
牧、駒は運錢茶毛に、栗毛に月毛、諸國の名馬を引つれ舞ければ蹄の音が、とんからりん／＼

チートヤ、チトー、トーカー／＼、打てや太鼓の拍子とり／＼、扇車の品よくまはれ、君が代
は萬歳。

御所標

等がある(御所標拾遺)。尚ほ佐渡の誇りとする順徳天皇の御遺愛と稱せらる、御所標に就ては

小木の碑の四所五所標

花は越後へ實は佐渡へ

といふ有名な俚語がある。越後に於ては東北地方に於て耳にしたる大葉子節の如きものを東北に
近き北湖原地方に於て聞くことが出来る。「俚語集」に

をばこなせかこーね、風こでも、ふいだがやと案じられる、かぜもふかねども、よぎしろ(雪

汁)の水がで、渡り止つた。

が擧げてある。尚ほ俚語集拾遺には新潟市方言の歌として

おごよそや(鶯)や、初音ふん出せ、聞くがんだ、啼かんと、そんな、捻ぢ殺すぞ。
を擧げて居る。

第三章 加賀、能登、越中

百萬石の城下 北陸の重鎮として加能越三州に雄飛したる前田氏、百萬石の城下は今、加能二國を管治せる石川縣廳の所在地たる加賀の金澤市である。此地はもと鎮守府將軍藤原利仁の裔たる富樫氏の所領なりしが、中世眞宗の勃興して親鸞上人三世の孫覺如上人の巡錫に際して諸民其の宗に歸依して一字を建て、後八世蓮如上人更に巨剎を創立して眞宗弘通の道場とし、本源寺と號し、又金澤の御堂と稱し尾山の御坊といひ、宗徒は尊んで之れを御山といひ、一向一揆の中心となつて居つたが、天正八年佐久間盛政此國を領し、本源寺を毀ちて城を築きて尾山城と稱し、天正十一年、前田利家の入國と共に尾張、越前等より來り聚るもの多く、町は次第に擴張して終に百萬石の城下と誇稱する北陸隨一の大都市となつたので、其の呼んで金澤といふには古い傳説がある。養老年間の事とかや、天兒屋根命の苗裔たる一人の處士、名を藤五郎といふもの此國に來りて芋を掘りて諸民に與へ、其の剩れるを食ひて飯を凌ぎ居たりしが、其頃大和國初瀬の里に活玉の長者とていと富める人、いと美しき和五と呼ぶ娘を持ち、配はすべき夫を求めしが、一夜觀

金澤傳の傳説

尾山御坊

昔の靈告によりて此藤五郎こそ宿世の縁淺からじと知りて遙々此國に伴ひて其の妻とし、且つ多くの財を貯りしに、藤五は之れを悉く里人に分ち與へ、自らは常の如く芋を掘りて生を營み、常に和歌を吟みて心を娛ましめしが、或る時、活玉の長者より砂金一包を贈り來りしを、藤五、持ち出で、田に下り居る隙に投げ打ちて歸りしに、妻は怪みて、かく多くの寶を打ち棄つるは如何にやと云へば、藤五は、笑みて、惜むに及ぶべき、平生芋を掘る傍の澤皆た寶ならぬはなしとて夫婦打ちつれ見るに其土は皆な砂金なり、其の砂金を洗ひし所を金洗澤といひ、後に略して金澤といふと百萬石の城下に相應しき傳説にあらずや。

「金澤市史」に載る説には此の藤五郎を富樫次郎忠頼の加賀介に任ぜられて來りて國務を執り、民其の醇政澤飲の化に觀し、責任を請うて許さるゝこと再度歸に動して永任を許され、其の恩澤下民に及べること時は金澤を掘り歸ふが如くなりて芋掘りと稱せしなりといふとあり。

先きに一向門徒の中心地となつて居つたとはいへ、前田氏入國以前には草莽々たる原野の間に僅に七八の家村の點綴せられて居つたのに過ぎなかつたが、前田氏の入國と共に次第に版圖を極めたのは大小の恙こそあれ、武藏野の一角たりし江戸が徳川氏の入國と共に盛大に盛きしと其の揆を同うし、其の城地を圍繞して漸次に市街を擴大したる點に於ても亦頗る相類したれば、古來

江戸と金澤

市街の歌謡階だ江戸に似たりといはれたので「金澤市史」引く所の加賀の兵學者有澤武貞の言にも、其の相似たるをいひ、曾萬里が、江戸城の基をなせる太田道灌の爲めに「窓含西嶺千秋雪、門鑿東吳萬里船」といへる古句を引て後榮の瑞相ありと見たて、又上杉謙信の加賀に出陣したる時、同じく萬里和尙は「臣守四方金澤城、君祈萬歲白山社」との對句を作られたりと傳ふと云ひ「城を中にして八方へ町割をなす者、東都の外には金府ばかりなり」といふ。街割相似たりといへども金澤人の風俗は江戸と同じからず、加賀人の氣質は關東人と同一ではない。加賀は關東よりも關西の風化を受くること多く、金澤人は活馬の目を抜く江戸ッ子の如く殺風景ではない。幸田露伴氏は「易心後語」に「金澤は人氣寛濶にして風流なる所と人の嗜するに違はず、越中邊とは大きに異りて、男女の言語もいよ／＼京に近く、風俗も上び、人多くは濃雅にして狡辯博學らしきは少く(中略)遊びのものにも心置かせぬ土地なり。さる代りには市中活氣乏しく戸數も減り行く様子なりとか。普通の見より論じなば何とかせねばならざる場所と少しは批を入れるべきか知らねど、詩的に評せば好ましくもまた好まじき所といふべし」といひ。角田浩々歌客は「樹木に覆られたる金澤市は、先づその住民が天然に愛育せられあるを證し、隨つてその住民の概して趣味に富めることを證し、住民の餘裕が閑雅悠容の人を作ることを證す」(漫遊人國記)といふ。共

金澤の人

に悠揚たる百萬石の城下を見たる旅客の感想であるが「金澤の現勢」の著者は「他地方人が今の金澤を尙ほ且つ百萬石の城下といふのは、封建的社會組織に適合せる市民の性情を因襲して居る金澤市民の國運の發展世界的となつた大正の御代に於て繁劇な生存競争場裡に適せない、急がず騒がぬお目出度市民であるといふことを暗示した體裁のよい皮肉であらう。其の體裁のよい皮肉を眞に受けて傳らさうにして居る市民はまことにお目出度く出来上つて居ると謂はれても仕様が「あるまい」と激動して居る。蓋し金澤の長所は閑雅悠容にあると共に活氣に乏しく消極的に陥り易きは其の短所であらう。併し文教に於ける金澤は決して他の背後に落ちるものではない。由來前田氏は我國文教の泰斗と仰がる、菅原道實の後裔にして藩學明倫堂は寛政四年、藩主前田重政の父祖の遺志を繼ぎて創設せられたるものにして鴻儒新井白蟻實に最初の學頭なりしといふ。爾來津田鳳麟、大島清太等相次ぎて出で文を以て北陸に鳴りしと雖も、其の振興は寧ろ維新の後にありて其の加能越三州の後進子弟を誘掖するを目的とし藩藩主保護の下に設けられたる育英社の如きは實に明治十一年の創立にして新人物のそれによりて養成せらるゝもの少からず、従つて藩藩主との情誼實に美しきものあり「舊藩と新人物」の著者はいふ「維新の金澤は人後に落ちたりと雖も、其後、拮据經營して數多の新人物を輩出せしめ、一時教育の振興藩長を凌駕するを得たる

明倫堂

育英社

はまた流石に百萬石と云はざるを得ず、若し今日迄の勢を以て續々、新人物を輩出せしめば、他日、或は薩長に對して百萬石國を造り出すの機あるべし、此進運を保持せんことは金澤人の抱負ならずんばあらざるべし」と。

地風説

百萬石の地には百萬石の氣風の通り渡る萬葉歌がある。加能無三國の太守たる前田侯の江戸下向をことごとく、下り道中の舞臺は能く其趣を覺悟せしめて居る。

惣若に駒まんざいとや、ありがたかりける君が世に君が心は色をます、その色をます花のころ、北陸道の繁昌や、六十三次宿々の、その宿々の萬葉の、ことばに改ひたてまつる、先づ一番のおん泊り、たつて振り出す御城下の、ヤレお通りやさきのけと、三本道具の敷々は、つきせぬみよの御家中に、君が心は浅野川、すこしなくれば春日町わねは大橋と思へども、義理と情は柳橋、今町大田二日市、右の田端の八幡宮、拜して通る津橋宿、五穀成就、萬民の共におひるは藍はしき、しばしねざさや竹の橋、前橋越えて伊勢御座の、番に大小不動あり、三里の峠打越えて、はにふ八幡伏し拜み、今石動や、をやべい、四里八町の途すがら、遙かに見ゆる高岡の、御本陣に寄き給ふ、二番の御泊り小杉、下村、打越えて、音に聞ゆる草島の、渡しを越えて、よろこんで、はるか對照の飛だんご、心に懸るが娘茶屋、我も人もと入り給ふ、くちとひげとはなめり川、早附川を打越えて、魚津の町に御本陣、三番の御泊り、四十八福の川越えて、日敷をつもる三日市、浦山宿と思へども、一夜は二世の相本の、渡を渡りて子寶の、泊りの宿に御本陣四番御泊り、國の勢も今日限り、南無り宿を打越えて、歌でなびかす駒がへり、我さきに行く、たつ波の、ひくまも待たず親不知、日本に名高き坂川の、どうぞ近江と思へども、とかく浮世

は魚川、五番の御泊り、能生樓田を伏し拜み、涼しく見ゆる名立山、青木峠に腰をかけ、四海の波も治まりて、のぼり下りは有馬川、あまり砂地は長濱の、やつこ六尺よろ／＼と、五智の茶屋へと腰を掛け、各休むは中屋敷、野々で渡るいづみ橋、高岡の宿に御本陣、六番の御泊り、新井の宿を打越えて、たんとお客を松崎の、其國元の奥方の、氣は關山や二侯の、しぶれるやうに思へども、大たんざりや小たんざり、こゝろ關川御關所の、能取越えて野尻をや、まつても行けや柏原、古間ふるまで通る小玉阪、あら町の宿に御本陣、七番の御泊り、拜して通る新光寺、川中島の合戦に、そのかみ越後の謙信は、頼も脱がすにかち渡る、丹波島とは是とかや、心深見の筑摩川、屋代の宿はこれとかや、姥山を右に見て、げんこ徳草の品々に、思にさせるや旅の宿、坂本の宿に御本陣、八番の御泊り、町端れの茶屋に腰をかけ、たんと飲込む白濁や、上田の宿はこれとかや、左に見ゆるは浅間山、峰の煙の絶間なく、浪分の宿に御本陣、九番御泊り、駒も勇みし香掛の、えぼし見ゆるは輕井澤、龍水峠打越えて、坂本の宿に入り給ふ、右に見ゆるは妙義山、夜に日にかはる風巻を、百合若様が射止めたる、早や／＼御宿を松井田の安中宿に御本陣、十番の御泊り、名も高崎の清浄寺、水の落合新町の、本庄かけて敦盛の、熊谷の宿に御本陣、十一番の御泊り、吹上げて行く羽の里の、新川越えて大宮の、諸願成就浦和宿、藤の宿に御本陣、十二番の御泊り、今日は御江戸へつきづきの、並木の松を打過ぎて、戸田の渡しも悪なく、ヤレ越しやと板橋の、伊勢屋／＼の待ち給ふ、是ぞ大君の下屋敷、見るに思ひをます鶴、白山かけて道分の、御門開くは一ヶ國、鶴の羽をのす萬歳と改ひ數へて御泊む。

加賀人

加賀人と越中人 更に廣く加賀人を見んか、例の「人國記」はいふ「當國の風俗は上下共に爪を隠して身を密に持つ風なり、中にも江沼、能美別して此の如し、石川河北二郡は少し氣のびやか

なり、武士の風はおとなしやかにて尖^となる所なく、武勇の功に秀ることを好まず、塵の上の調儀を以て身を立んと思ふ、譬へば他國に合戦ありて之れより助勢すべきことありても自國を余うし、出ることを好まず況して我が持の外を望みて切取などすることは盜賊なりとて嫌へり、皆な人此覺悟にて賢人の風なり、されど物ごと懈怠がちなる風にて我國一分にてしまふ氣ありとぞ」といふ「漫遊人國記」の著者は「想ふに特に前田利家の性格を示したるものに似たり」といひ、更に利家を評して此賢人の風ありとし、「自己を持して他を犯さず、理を枉ぐることをせず、徳川氏の世に處しても、時勢の理、自家の分限を嚴守してこれに従ふの家風を涵養したればこそ百萬石領を終始究うしたるなれ、されば被れば此の理を主とするが故に、未だ曾て理の件はざる何人にも黨同せず、自己の立場にありて理のある處に興みせり、被れば實に織田氏に興みせず、豊臣氏に興みせず、はた徳川氏にも興みせず、但だ自己是なりとする理に興みしたるなり、利家の此の氣風は加賀の北國的沈鬱性の地理と相待つて歴史的に其人士の上に消極的個人的の氣風を養成せるなり、消極的個人的、此の理を主とする風は予が所謂潔癖なり、所謂加賀ッポ一の稱を得たる所以なり、換言すれば、加賀の士風は理に同じて人に黨せざるを美とす、故に其の短は社會的集團の力少きにあり」といひ「金澤人の悠容閑雅の短が、所謂懈怠^{かたじけなく}がちに陥らんとするを救ふも

加賀人と
前田利家加賀ッポ
一越中人の
長所短所

のは、蓋しこの氣概ある加賀ッポ一なるべし」と。越中人には此の潔癖なきと共に加賀人の如く消極的に陥るの弊少し。例の「人國記」の「陰氣の中に智あり勇あり、倭なる氣多し、親子の間にも一言にことば賢を取り、巧みに倭をなすなり、人の交も底意は倭にして只卒忽の交りのやうにする意地なり、しかれども事に臨みて死を厭はざる風もありとぞ」といへるは褒貶相半ばして要領を得難けれど、幸田氏が「日本諸國に渡海を業とするもの雲霞の如くあれど越中船の奴等のやうに卑劣根性持つたもの他になしと罵るものなきにあらねど、そは一方の酷評なるべし、されど此の國情持多くて、何れも商業に習く、才鋭く、隨分四方に横行して他國の者に後れを取らじと忍び難きことをも忍びて爲ること一般の氣象といひても然るべく、これにて徳義の制裁さへ力弱からずば愛すべきところと褒めてこそ至當なるべけれ、海邊ならざるも富山高岡などの人の進取に富める活達の氣象は加賀の金澤などに比して、詩人的愛情なき普通の眼より觀ば畢竟讚辭を附らざるを得ず」（島心樓記）とを併せ考ふれば此國人の氣風を想像することが出来るであらう。

反魂丹と丸呑鱈 百萬石の前田氏は金澤を中心として加賀の大聖寺越中の富山とに一門の大名を有し、各十萬石を領して其の双翼とする。大聖寺は、もと白山五坊の一にして門徒の根柢とせし所（三州志）にして最も越前に近く、富山はもと、普泉寺と呼び後富山寺と改めし眞言宗の寺院あ

大聖寺の
富山

萬代常閉

りし所とも傳へ(富山市史)天文年間越中の土豪水越勝重の築きし後、神保氏三世之れに居り、天正七年佐々成政、越中の守護職となつて武蔵國境を歴して士民四集しこゝに富山市の基礎を立て尋で前田氏此城に入り、寛永十六年前田利次此地に分封せられて維新に及び、北陸の小江戸と稱せらる、屈指の都會となり、現に富山縣廳の所在地となつて居るが、其の富山の名を四方に走せたのは賣藥の行商を多く此地方より出したことである。これには由来のあることで、利次の子正甫分封二代の主一日、腹痛に罹り、侍醫、藥を進むれども功なく、大に苦むの時、近侍日比野小兵衛懐に藏せし反魂丹を呈せしに忽ちにして癒えければ、正甫其の奇功に感じて出處を質しければ、小兵衛は備前の醫師萬代常閉より傳授する所といふ、萬代常閉は其の祖掃部助なるもの泉州堺に於て異國人より傳授せる所にして之れを唐人一子相傳の妙藥延壽反魂丹といふ。正甫、奇藥人の病を救ふ何ぞ秘密にすべけんやとて小兵衛に命じて調劑せしめ、常閉も亦此國に來りて之れを獻じ、かくて其の藥法は傳はりしが、偶々正甫、江戸に出で、柳營にあるの時、某國主急病を發して死に瀕し滿座頗る狼狽するに遇ひ、携ふる所の印籠中より反魂丹を出して服用せしめしに立どころに平癒したれば、列座の諸侯其の奇効に驚き、此の藥を諸國に販賣せしめんことを請ふて已まず、正甫これを諾し、歸國の後、藥商松井屋源右衛門に其の調劑法を傳へ、八重崎屋源六をし

賣藥行商
の由來

て諸國に行商せしめ、慈善的に其の普及を計り、保護獎勵至らざるなかりしを以て需要年を逐ふて進み、行商人の數も漸次に増加し來りしかば、終に大國二人小國一人の割にて行商人を出すこととなり、富山の藥商等は備前に歸りて病殺せし萬代常閉の分骨を妙國寺に汲め且つ木像を安置して之れを記念することとなり(富山市史)、行商の祖たる八重崎屋源六の墓も同寺にありて毎年五月五日盛なる法會を行ふといふ(富山案内)。明治に入りて主なる賣藥業者首唱して購買堂なる一大會社を設立して調劑に幾多の改良を加へ更に私立藥學校(後に縣立藥學專門學校)を設け、海外にまで發展を企て今や販物産の主要なるものとなつて居る。

城中より出す行商は賣藥のみではない。水見郷水見町から昔は諸國へ販賣に出たもので、それは一には加賀の藩主の特許を得て日本全國の藥を研ぐといふこと、一には又伊勢の神農を彼等の手で研ぐといふことが誇りで、其の盛時には三千人近くの人々が諸國を廻つて居つたらしい。今は玻璃製の瓶が専ら行はれて研ぐ必要もなくなつたので専ら此地方から小間物の行商に出る。(郷土研究三ノ一一)

大聖寺藩の方にも亦地方物産に關する歴史がある。慶安年中、藩主利治、領内大日山の麓九谷と稱する所に良陶土あるを開き、藩士後藤才次郎、田村權左衛門の二人に命じて陶窯を築かしめしが、製品未だ精良なるに至らざりしかば、才次郎は君命を奉じて當時製陶の業尤も進歩したる

水見の
製

九谷の陶

肥前の唐津に赴き、其の秘法を學ばんとせしも、術を惜みて傳へざりしを以て自から陶家の奴となり、勞苦すること三年、終に其の主の謀約によりて心ならずも妻を娶り、一生を此地に過すべし狀を示して漸く陶業に従事することを得、研鑽史に四年にして悉く製陶の秘傳を得、逃れ歸りて之れを復命し（文明の庫）、九谷坂の路傍に陶土を發見し、初めて良好の製品を出す、後人これを古九谷として追慕す、此際、才次郎の死後中絶せしが、文化の初年に至りて吉田屋八右衛門なるもの之れを中興し、専ら支那交趾風の陶器を出し、更に窯を山代村に移して九谷の土を採りて盛んに其の業を営み、次で宮本屋起り、畫工飯田屋八郎右衛門九谷固有の赤色により工夫を加へ、これに金彩を施し、教賀氣比神宮寶藏の「方氏墨譜」を模倣し畫風を一變して今の所謂九谷焼を出すに至り（産業手続）、慶應年中、一時之れを落葉としたりしが、後、民業に復し明治に入りては新業益々發達し、海外輸出品としても其名噴々たるに至つたので、反魂丹と九谷焼とも亦越中と加賀とを代表する好個の象徴ではあるまいか。

高岡の物産

元和中に廢城となつて、其の中に國幣中社射水神社を移祀してある高岡市にも亦産主と關聯したる物産がある。慶長年中前田利長が家を嫡子に譲つて此に城を築いて居つた時、武器職工數十名之れに従ひ、後藤某、安川某なぞいへる名工、専ら刀劍の美具に要する彫鏤を事とし子孫相傳ぎ、安永年間安川某新に工夫

を出して高岡ぞうがんの名著はれたので「日本工業史」には慶長年間高岡城下に金屋町を設かれ、般若燭四郎村の御物御金産強左衛門等七名をして勝職をなさしむ、これ高岡御物の源流なりと云ふ。

白山と立山 加賀の白山は古く越の白嶺と稱せられて北陸の重嶺、海面を抜くこと八千七百尺、越前、飛騨の二國に跨り、餘脈は延いて美濃、越中に及び、頂上は五峰に別れ、北の三峰を大御前、大汝、劍ヶ峰といひ、南の二峰を別山、三の峰といひ、泰澄の開きし所といふ、其の縁起を尋ねれば、昔、泰澄、越前の越智山に棲みて常に此の白山を望み、彼の山必らず靈神あらん、我れ嘗て登て願應を請はんとて靈應二年、夢に天女の紫雲の中より現れて靈感時至れりと、養老元年四月、澄、白山の麓に至りて心を専らにして持誦せしに、先きに夢みる所の天女現れて、今、號して妙理大菩薩といふ。此神岳白嶺は我が國を主る所の郡城なり。と、言ひ已て隱る。泰澄乃ち白山の絶頂に登り縁磐池の側に在て持誦す。忽ち九頭の龍、池面に出づ。澄曰く、これ方便の現體、本地の眞身にあらずと、持念いよく禱し、頃刻にして十一面觀世音、妙相端嚴にして光彩赫煥たりと。澄、更に左の嶺上の孤峰に上り、一の偉丈夫の手に金箭を握り、肩に銀弓を横へて含笑するに値ふ、曰く我れはこれ妙理大菩薩の輔なり、名けて小白山の太行事といふ。澄、又右峰に上る。一奇眼の老翁の神宇閑雅なるを見る。語て曰く、我れはこれ妙理大菩薩の甥なり、

泰澄と白山
山嶺現

と言いつて又隠る、これより靈驗益々顯著なり、奉浸嘗て人に語て、曰く妙理菩薩の仰せには我が山中の一草一木も我が管轄の居る所にあらざるはなし」(元亨釋書)と此山の神聖視せられたるを想像することが出来る。

白山と宮

此山古來より日本の産粟と呼ばれ、遂に太平洋岸なる駿河の富士に對して富士の雪は消ゆることあるも、此の山の雪は消ゆることなしといひ、又富士といづれが高きを比べんとて昔、此の國の人と駿河の國の人と相争ふて、終に長い橋を作つて兩山の頂に横へ、それに水を注いだ所が、水は次第に白山の方へ流れて来るから此國の人は早速の氣轉にて草鞋を脱いで橋の下へ入れた所が、これで水はどちらにも流れなかつたといふ(趣味の傳説)例の背説べ傳説もあり、又胎内費りとして長さ三丁ばかり、中の廣さは身を入るゝばかりの岩窟あり、白山禪定とて夏日は參拜者多く、山中に空堂なるものありて休憩に充つと、頂上に近く又千蛇の池といふがあつて昔無數の大蛇が棲んで加越兩國の民を殘ひしを白山權現の之れを呼び集めて此の種子の芽を出すまで此池の中に待てと仰せられて悉く此の中に入らしめ、さて其の種子を棄てられたから芽の出る時はなく、蛇どもは今も此中に待つて居るといふ(同書)傳説もある。

千蛇ヶ池

山麓石川郡河内村に白山比咩神社あり、伊弉諾尊並に、菊理姫神を祀り國幣中社に列して居る。

雷鳥

古來此山に雷鳥棲めりと傳へて、後鳥羽院の御製に

しら山の松の木蔭にかくろふて

やすらにすめるらいの鳥かな

とあり、「古今治平考」に「此鳥古より加賀國白山の絶頂に生ずる鳥にて、形、鷄に似て雄は全身黒く、腹白く小き紅冠あり、雌はかしはの雌鳥の如し、此鳥雷を驚るの體あり、世傳置いて家内に掛く、一とせ後水尾法皇の自ら捕きたまひし古歌を添へ、親王方へ遺されけるを今世うつし弘む云々」とある。

立山地獄

加賀の白山の女神らしきに對し、越中の立山は男神、しかも乎力雄尊と伊弉諾尊とを祀る。雄山神社あり、七十二峰削るが如くに屹立して北陸に雄視して居る。白山にも地獄と名けられ、賽の河原など呼ばるゝ所あれど、此の山中には彼烟沸騰する所ありて、殆んど佛典に示す所の地獄を目に見るが如く、山に入るの初め三途川あり、死出の山あり、山中には八大地獄あり、百三十六地獄あり、血の池あり、水色赤く、銅の山あり、岩石時ち、死して地獄に至るものは皆な此所に来ると信ぜられ、昔行脚の僧、此山に禪定せしに奥州外ヶ濱の鐵師の靈、顯れて故郷の妻子に言傳せんとて袖をちぎりて渡したる故事ありといひ(越中長考記)「顯國雜記」にはかくて立山に禪定し侍りけるに、先づ三途川に到りて思ひつゞける、

この身にて渡るもうれしみつせ川

さりとも後の世にはしづまじ

翌日下山の序にもろ／＼の地獄を廻りければ、熱湯の桶、火炎など取々に淺ましくして、しでの山そのしな／＼や湯きかへる

湯だまに罪のかずを見すらむ

禪定はる／＼とげて下向し侍る道にて、

都をばとほりこしちにかへる山

ありとなくさむたびのそらかな

立山傳説

とあり。「諸國里人談」には、此嶽は佛尊の貌に似たり。膝を一の越とし、腰腹を二の越、肩を三の越、頭を四の越、頂上佛面を五の越とす。市の各へ行く道に小籠大籠とて籠にすがりて登る所あり、此籠は三條小籠治が作る所なり。地獄道に地藏堂あり、毎年七月十五日の夜、胡蝶あまた此の原に出て舞ひ遊ぶ、これを精靈市といふなり。一の越より五の越まで各々堂あり、一字一所づゝに暖なる地なり、これを九品といふなり。行人、杖草鞋を置きて本社へ參るなり。」とありて諸嶽の口碑を傳へ、山中には若狭小濱の老尼の女人結界の中に推參せしに其の伴ひし妓女の

白山との
奇蹟

杉となりし美女杉、童女の恐れて進まさりしを戻して罵りし叱尿、其の老尼の額に角を生じて化して石となりし姥石、奥州板敷坂の藤義承なるもの登山して既りて畜生となれる畜生原、智明坊なる僧、性情慢にして俄かに牛の吼ゆるが如き聲となりて天狗に變じ、光藏坊と稱せしを立山權現の道ひ出したまへる時一爪を遺せしなど(越中書事記)いふ怪異談が頗る多い。富山の開基に就ては、昔、文武天皇の大寶元年、夢に阿彌陀如來の今より佐伯有若を越の國に遣はさば國家安泰なるべしとの靈告ありしにより、直に有若を越中の國司となしたといふ。其の有若の子有頼或る日立山に獵せしに一頭の熊ありければ射て之れを走らせ、遁ぐるを追うて山深くわけ入り一の岩窟に至りしに、熊はあらずして三尊の彌陀の胸に矢を負ふて立たせたまふありしに、恐懼湯仰して僧となりて此杖を削すといふ。此山と白山との間にも奇蹟傳説ありて、立山の方草鞋一足低しとして立山の登山者は報賽に草鞋を上げる、又立山へ石を一つ上げる風もある。

山間と海濱 此地方背後に日本アルプスの諸山を負ひて本洲の高山國たる飛騨に近接せるを以て山間には人跡未到の地、少からず、例の平氏の落武者の隠れ家と稱せらるゝ五箇山は今越中蘆波郡に屬し上平、利賀の三村に分たれて中部篇第七章に述べし飛騨の白川村に續き、其の風俗も亦之れと相似て「三州志」には「村民の祖先は平家の落人として風俗、他の郡村に異り、こゝに神樂

踊こきりこ踊とはやすものあり、女は常に白絹のかつらひもを頭にかけ後へ結び、白絹の石の帯をかけて人に見するなり。踊る時も同じ姿とす。毎年中秋のこきりこ踊は笛、太鼓、鉦會にてこれを囃し、筑子竹の打ち機、七五三、五五三なり、女竹の長さ五寸五分なるをこきりこの二つ竹と呼ぶ、其の歌は

おもひをさし船に乗せれば

おもひは沈む戀は浮く

又

波の八鳥を連れ来て

併こゝるてふ深山邊

鳥帽子狩衣ぬぎすてい

今は越路のそまやかた

などとある。今は其の風も變りたるべけれど、古風は尙ほ此の中に存して居るのである。此の村境より越路を越え險坂を攀ちて出れば中越鐵道の終端たる城端町あり、こゝに善徳寺僧に城端碑坊と稱する眞宗の巨刹あり、文明四年源如上人これを加賀、砂子坂に創建せられ、後轉じて此地



養鳥賦の圖

に移り、門徒一萬、地方信仰の中心となつて居る、のがあり、此町には城端澤畫なるものあり、遠く奈良朝の昔に行はれし密陀僧畫法の久しく中絶せしを寛永の頃畑次五右衛門好水なるもの其の法を長崎の支那人に學び、此地に歸りて之れを其の子宣安に傳へ、宣安は醫を業としければ之れを塾師佐々木徳左衛門信好に授け、貞享元祿の頃、白澤塾の稱を以て之れを世に弘めて之れを小原某に授け爾後一家の世業として今に至るものがあるといふ。海濱に於て越中の名物をいへば、第一に指を中新川郡滑川郡附近に於て漁獲せらるゝ養鳥賦に屈せざるを得ない。四五六月の交を漁期とし網を手繰れば水面に養火の如きもの點々として浮び、其の光甚だ強く、天下一品と稱して居つたのであ

雲氣樓

るが、石川博士の説ではマダガスカル海峡にも、地中海の何處とかにも在るさうだが、唯此の滑川ほど陸に近く、滑川ほど澤山に群生してゐる所は全く無類であるといふことになつてゐる。(ひとみの旅) 今一つ同地方人の日本一として誇るものは下新川郡魚津附近で見らるゝ雲氣樓である。南嶺の「東遊記」には親しく見たる人の言なりとて「毎年三月の末より四月の間に天氣殊にのどかにして風おさまり海上霞わたりて一面の鏡の打曇れるが如き日に此雲氣樓をむすぶ、毎年一兩度或は多き年は三四度も結ぶ事あり、誠に唐土の人のいへる如く、海上に煙の如く次第にむすび来りて遂には樓臺の如く或は城廓の如く人馬往来せる如きも歴々然として見ゆ、此地に我親しく交りし宮崎式部大夫といふ社人は折よく魚津にてこれを見たり、初めは暮をひけるが如くなりしが、暫く見る間に城廓の如く矢倉高櫓やうのものも見え、矢間などの如きものも見えしが、又暫くする中に松原の如く楯にかけたる天橋立などのやうに見えし、夕暮に及び風少し出ければ漸く消え失せて跡かたもなくなりしなり」とあり、今も觀光の客を引いて居る。既に越中の海濱を語つたから更に進んで半島國たる能登に向ふこととする。

能登半島 能登は日本海岸の伊豆である。伊豆の太平洋に斗出するが如く、能登は日本海に斗出して居る。彼れに熱海伊豆等の温泉噴出するが如く、此れには和倉の温泉あり、彼れが古く造船

能登と伊豆

の術に長じたるが如く、此れも昔、能登島の伊夜比賣が初めて船材を教へたる以来、福浦は渤海人來航の時、歸船は必らず此處に寄りたれば朝廷より渤海船修造の所と定められ、彼れの近く下田より外國の文化を受けたる如く、此れには文久元年、加賀藩が英國より汽船發機丸李百里丸駒龍丸の三隻を購ひ送つて日本海に日本人が汽船を泛べたる濠洲を爲して新文明の曙光を受けたる如き(續世界山水圖説) 相關する少からざる上に伊豆の國名のアイヌ語に出たる如く、能登の名もアイヌ語のノトロ部ち海角の義より出たのであるといふ説もあつて、縣社羽咋神社(羽咋郡羽咋町にあり)は垂仁天皇の朝、古志の蝦夷反したる時、特に鎮撫使として下したまひし皇子石川別命を祀り、七尾海灣の中心たる能登島には横穴數多あり、向田村にあるものは蝦夷の岩屋とて昔時蝦夷の大男住みし洞といひ、須曾村の衣川に能多く住みけるを大男之れを食し、或る時、行者の之れを乞ひしに與へざりければ其の行者

きのふきつけふもきて見る衣川

すそほころひてさけもあがらず

といひければ、其後能登がらす、大男も食物に窮し蝦夷が島へ行きし(能登名跡志)といふ傳説も遺り、石器、土器の發掘せらるゝもの多く、蝦夷人の蟠居したりし跡を想像するこ

石崎の風俗

とが出来るが、更に面白きは志賀氏が「讀世界山水圖説」に於て能登島に平氏の落人の子孫ありとて東岸日出ヶ島の左川附近は其の一と挙げられたことである。更に牛島に歸りて能登島の對岸にして七尾港の左翼をなせる石崎(鹿島郡)の風俗を見んか、全村の戸數三百八十餘戸、人口四千五百六十餘、一戸平均十二人の多きに達す、全國に類少き割合なり、耕地は極めて少く、大概魚を以て野菜米麥に基へ、他村より父母亡くなりて頼るべき方もなき孤兒また私生兒の公に養ひがたきものなどを多く受け入れて魚釣の餌を捕へしめ、かくて次第に漁業を覚えしむるなれば兒童の數最も多く、他村民とは縁組せず、古來血族結婚のみ行はれたるなれど、幸に此の他村より孤兒、私生兒の收容せらるゝが爲めに自づと近親結婚の弊を救ふ異風の俗あり(鹿島人國記)。七尾島の北にある風至郡穴水村の大部分を占むる細島には其の特作に出るに、藤の皮を灰汁にて煮て數十日水中に晒して上皮を去り、繊維を細く裂きたるものを練とし、古着の片々を細く切りたるものを經として製したるツマレと稱する衣を着するもの(鹿島實報一三八)ありといふ如き山間の風俗と相似たるものあるを聞くが、其の都會たる輪島町(風至郡)は人口一萬餘餘の漆器を以て七尾町(鹿島郡)も亦人口一萬を越え交通の要路に當り其の性質は勤勉力行にして比較的富めるもの多く且つ海洋的氣分に富み、山間の如く保守的ならずして進んで他に出稼ぐ風があつて、

穴水のツマレ

能登人

彼の「人國記」に當國の風俗、人の心割して狭くして譬へば他國へ一足踏み出せば溺命に及ぶべしと思へり、これによりて主人よりつれなく使ふといへども外に行くことを得ずして是非なく勤むるなり」といへるは全然觀察を違つたので、其の是非なく勤むる如きは寧ろ辛抱強い結果と見るべきではなからうか。

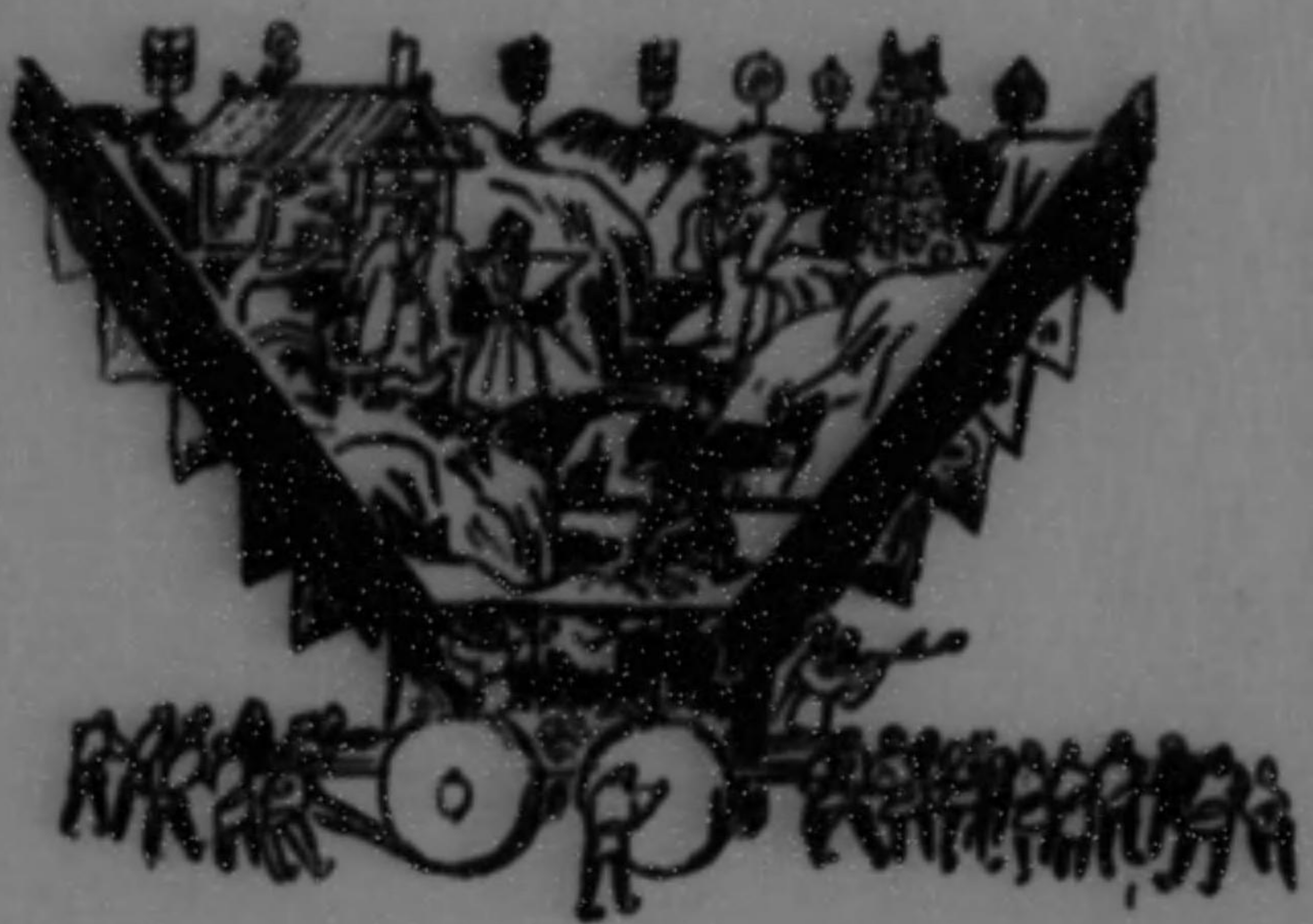
能登風

先きに舉げし秋田兩國の間にある五箇山中には能登のありしことは「二十四孝聖典會」等にも出て居るし今も國書を以て人を誣ぶの實しありといふことであるが、能登には別に能登風なるものがある。「日本國書」にいふ「一日海濱にありて海路より隣村に歸らんとする時に、突天雷くが如きも、舟に日光を障ふる道具がない船頭船も驚駭を絶え来りて、之を舟に乗せ、其の中に坐せしめしに日光頭上を照さずして海風左右より入り来り、爽快極りない、其の時に能登の海上にて突天又は雨天の節に客を渡すには必ず舟中に能登を用ふといふを聞きて始めて能登の能登風の虚言ならざるを知つた」と、又奇風俗の中に算すべきである。

七尾の山

能登の祭祀として最も華麗なるものは七尾町の山曳である。五月十四、十五兩日の山王祭には長さ七八間もある材木を家の如きもの、上に双角の如くに挿し出し、其の間に板にて三段位に舞臺を造り、それに芝居の書割を寫して神樂矢口の渡しとか舞臺上使とかいふ芝居の人

能登比咩



七 尾 の 山 奥

形を飾りつけ、頂上には多くの旗幟物を立て、
 首頭につれて曳き出すにて他に多く見ざる壯觀
 あり、若し其れ奇習の伴ふものとしては羽咋郡
 一宮村にある國幣中社は裏日本に雄視したりし
 大國主命を祀り、昔は斧祭、鴨祭などありしと
 見え、「能登志」に記す所によれば斧祭は例年
 三月四日鹿島郡不動山の僧、三人、笈負一人、
 斧持兒二人、此社に詣で中門殿にて斧の舞曲を
 なし、護摩を焚く。

これは昔、泰澄大師、川越の堂にこもりて正
 眞の天照大神を拜み奉らんことを誓はれしに、
 滿夜の夢想の詠歌に「戀しくば尋ねても見よ能
 登の國一の宮の奥の社に」とありければ、大師
 乃ち此社に詣でしに基く云云とあれど、こは神

佛混淆の付會説より出し祭禮なれば今は廢せられしなるべし、又「同書」に鴨祭は毎年十一月鹿
 島郡鴨の浦より鴨を捕へて捧げ午の日、所々の本宮に於て新納の祭を爲し同郡良川の能登比咩神
 社に一宿して一宮に到り午の日清めの夜あり、同夜丑の刻、鴨を神前に放てば鴨は自ら本殿の階
 を上り御帳の前にて羽たゝきして蹲ればこれを捕へて海中に放つ鴨は魚を得て歸るにて、元來此
 祭は當社の神體大己貴命、其御子に攝八玉神あり、鴨と現れたまひ海底に入て父の神に供へたま
 ひしより初るとあり。「能登名跡志」には「此の鴨必らず越後の能生權現の磯による、其の時能
 生權現の祭りありといふ。」(能生權現は大國主命の契りたまひし沼河比賣とも、申せばかゝる祭
 祀を行はるゝに至りしならんか) 今は三月十三日平國祭として此の神、本街道より西街道にお
 廻りになる祭があり、此時鹿島郡能登部の能登比咩神社へ立寄られこゝにて濁醒と神粥と供する
 式がある、これは昔、此神が此國を征定に御出でになつて飢寒を感ぜられた時、偶々機を織られ
 つゝあつた能登比咩の神が濁醒と神粥とを織せられた故事に基くと云はれ、此の能登比咩神社に
 は外に此の郷に駐まりて乙女に機織る術を教へられた崇神天皇の皇女淳名城入姫命をも祀り、こ
 れを能登縮の始めとし毎年八月十九日に祭典が行はれるといふ。(郷土光學社)

此國の神社には大國主命に因縁するものが多く鹿島郡矢田郷村の生國主比古神社は此命の出雲の國より因

能登比古

能登比古は、能登と能登に乘りて此地に渡らせたまひしといふ、かく出雲族と關
係ありと共に能登比古の關係もありしと見え、「續世界山水圖説」にいふ如く美濃比古、美濃比古（以
上、能登比古）能登比古など任那系統の神はがある。

能登角力

更に能登人の體格と關係ありと思はるゝは先きにも擧げた利作神社の角力の行事にて野見宿禰
と當麻理連とをして力を角べさせられし垂仁天皇の皇子石門別命を祀り、此命もまた角力を好ま
せられて能登一國の力者を集めて力を競はしめたまひしと傳へ、毎年八月二十五日、唐櫃山なる
皇子神陵の土を境内に運び、角力を催し、最も多く勝つたものに神社より大關の名譽を表彰する
を例とす。（能登人傳記）

彌彦

加賀金澤市の祭祀に就て奇習とすべきは同市石浦神社の祭禮に山伏姿にて五色の袴を掛け、弓
矢太刀鍬等を持ちたるもの法蓮太鼓の囃方等と共に一組五六人練り行進、先づ祈りを上げて其の
儀ふべき順序を定め、これによつて弓なれば東西南北並に上下に向つて矢を放つの狀を爲し、太
刀又は鍬なれば同じく六方を切り下げる狀を爲し行くにて、もと彌彦山の山伏の來りしものと見
え之れを彌彦委といふ、其他天神祭等には町々に木製の獅子の頭があつて、これに獅子の皮にま
ねた長さ七八間もある布片をつけて其の體内に三味線太鼓等の囃方入り、賑はしく囃しながら町



彌彦

を練り歩き、所々で棒だの鎌だのを持
つて切り合ひ、打ち合ひの狀を爲して
勇ましく舞ふ、其の舞ひ方は他方に多
く見ざるものであるといふ。（戸部麻呂
氏談）

道開様と御印祭 道開様は北國の宗者
と呼ばるゝ能登の義民で七十五ヶ村の
身代りとなつて寛文七年十二月十六日
藩主赦免の命の下る一剎那前、十字架
上の露と消えたが、其の爲めに村民の
不幸は除かれ、其の遺徳は今も慕はれ
て、此の道開が生前に再興した鹿島郡
龍尾村にある神社久比古神社に毎年
四月十三日に行はるゝ白木餅の神事を

白木餅の
神事

俗に道開様の祭禮といはれて居る。其の神事は前日即ち十二日に氏子が道開派と谷内平派とに分れて双方非常な意氣込みにて餅搗を始め、力自慢の若者が杵も折れよと搗けば、選り出された娘達が器用な手振りで白取りを爲し、搗き了つて一同神酒を戴き、往來の入を捕へても之れを強ひ、さて其の造られた一抱もある紅白の饅餅はこれを紅で染め分けられた菱形の餅で蓮の葉のやうに飾り、其夜は不寝香を爲し、翌朝掛け糺いさましく社殿へ運び、それが二尺餘りも盛り堅められた強飯を蒸籠で結びて、接骨木の箸を突立てた妙な供物と共に神前に供へらるゝので、これは道開によつて再興せられた醍醐帝朝規の遺格で、所謂オケラ餅の神事ださうである(郷土光華誌)とあるが、同地方人は社内の小祠道開社の祭事とし其の餅を搗く時には盛んに加賀侯の悪口をいふを習慣として居るとの事である。越中御印祭も亦村民の爲めに新町立を願ひ、其の爲めに奇禍を受け村民一同に代つて、之れも藩主教免の使者の來る一瞬間前、慶安二年九月十五日に磯濱に處せられた越中磯波郡佐野村の農佐助の靈を慰めんため此日(今十月十日)に村民は業を休み佐助大明神淨海居士と書いた掛行燈なぞを出して樂しく一日を暮らす、これを御印祭といふは佐助の死んだ十月十五日に御開き掛けの印が下つたからであるといふ(同上)郷土の誇りとすべき意氣ある風俗である。

佐助大明
神

那智寺

寺院雜記 佛教國たる北陸地方に名刹多く、いづれも其の雜記には神怪の談を傳へざるはなければ、今其の著名なるもの二三を紹介して一斑を示さんに、加賀江沼郡那智谷村なる眞言宗の那智寺は泰澄の開基にて觀音の靈告によりて自ら千手觀音の像を造り、冶工に請せしめて山中の岩窟に安置し、坊舎を建て、自生山嶽谷寺といひしと、芭蕉の「奥の細道」に「金澤より山中の温泉にせせ行くほど、白根ヶ嶽あとに見なしてあゆむ、左の山際に觀音堂あり、花山法皇三十三所の願禮をせせ遂げさせたまひて、大慈大悲の像を安置したまひて那智と名づけ給ふとかや、那智、谷波の二字を分ち侍りしとぞ」とある如く、花山法皇三十三所の第一番たる那智の那と、三十三番たる谷波の谷とを併せてかくは名づけたまひ、且つは護持したまひし如意輪觀世音を奉納せられたりといひ、此寺の奥菩薩といへる所に菩薩塚といふものありて法皇の遺髪を奉埋せし所といふ(三州志)越中下新川郡大岩村大巖山の中腹にある眞言宗日石寺は行基菩薩の此地を過ぎし時一大巖石の上に向身の不動明王を拜し、渴仰の念禁じ難く、其の像を巖面に刻したるを本尊とす、長さ一丈八尺、時に山神あり來つて行基を助けて堂宇を建造せしむと傳へ、加賀國河北郡小金山なる臨濟宗傳燈寺は由良法燈國師の法嗣慈良和尚此國を行脚して此地に來り、一茅屋に宿を求められしに、其の封告けて我が夫は山賊なり、客を見れば必らず殺して其の財を奪ふ、早く村中の地藏堂に隠

日石寺

傳燈寺

總持寺

れたまへと、和尙其旨の如くしたりしも山賊早くも之れを聞知して堂内を窺ひ、刀を振つて之を斬り、槍を點じて之れを見れば和尙は自若として坐し、地藏尊に刀痕あり、賊大に驚き終に和尙の弟子となる、事、後醍醐天皇の勅聞に據し、堂宇を建立せしめられたりといふ、能登國風至郡橋比村なる曹洞宗大本山總持寺は、もと行基菩薩の開きたまふ所にして諸嶽院と稱せしが、元亨元年四月、寺主定賢律師の夢に觀音大士現れたまひて、汝知らずや釋迦牟尼佛五十四世の善知識あり、當國酒井の洞谷山に出世して大に法門を開く、汝此寺を以て彼の師に與へなば、位を官寺に譲けて、永く佛法繁興の場たらんと、時に曹洞宗の太祖たる曼山紹瑾禪師、洞谷山永光寺にありて、觀音大士の寺を擧げて汝に授けんとたまひしを夢み、夢と夢と符節を合するが如きに驚きて此寺を受け、前の稱を存して諸嶽山總持寺といひ、盛に禪風を舉揚し門徒大に擴り、越前水平等寺と共に曹洞の兩大本山となりしが、近年寺を武藏國橋本郡鶴見に移し、此地に別院を置くこととなつた。越中下新川郡眼目の立山眼目山寺は能登總持寺の二祖巖山和尙の高弟大徹禪師の當國に行脚せらるゝ時、一老翁あり、忽然として現はれ、我は立山の神靈なり、師此地に湯を止めて群生を利益せよと、禪師こゝに於て立山權現を開基として此寺を創す、其の因縁によりて毎年陰曆七月十三日の夜此寺の庭の松の梢に燈火上り、一は立山の絶頂より飛び來る、これを山燈と

立山山立
川寺立川山の
權現

いひ立山權現よりの獻燈とすと。

傳説と俗信 加能越三國に及びて尤も有名なる傳説は一向一揆の史蹟と關聯する鞍ヶ嶽の傳説で此山は今石川郡宮村に屬し、昔宮村政親の一向一揆と戦ひ居城野々市を逃れて此地に據りしに、長享二年六月一向門徒に圍まれ一揆敗死し、主將政親は一揆の勇士水卷小助と共に引組んで山中の池に投ぜしを以て、今も其の目には鞍の影が池の中に見えると傳へて赴くもの少からずといふ、其他地方への傳説四五を拾はむか。

白痴と鯨

白痴を大切にす 能登國風至郡鶴川地方にては大變に白痴を大切にす一村擧つて之れを扶養してやる、これは白痴が、命數盡きて死亡する時に次ぎの世に鯨に生れ變つて此濱へ揚り、以前世話をした呉れた村人に利益を得させると信ぜられて居る。(郷土研究三ノ二)

杜鵑

杜鵑傳説 奥羽地方に於て耳にした杜鵑傳説を、昔唐人が大勢にて持つて來たと云はるゝ能登の唐島で聞くことが出来る。それは昔此島に見弟の子があつて弟は常に薯を掘つて味のよいのを見に食はせて居たのを盲目にしてひがみ強き兄は、弟はさらに味よきを食べて居るであらうと邪推して弟を殺し其の腹を割いて見たるに、意外にも弟の食べて居るのは屑薯ばかりであつたので悔恨の情やる方なく終に杜鵑となり、毎年夏の初、自然薯が芽を出す頃「弟戀しいも掘

佛御前

つてくはそ」「弟戀し振つて賣て食はそ」と鳴くのであるといふ。(後撰人國記)

佛御前 平家世盛りの頃清盛の寵を受けて榮華を極めた佛御前の後に世の無常を感じて加賀國能美郡中海なる山間原といへる所に隠れて茶店を開きしに、村内の男子の我れも〜と出掛けるに村の女房大いに怒りて終に姪娘中の佛御前を殺してしまつた。其の祟りで今も此村の婦人が産の間に産をすると俄に大風が起るとて、妻間に産をする時は屏風を立て廻して夜のやうに暗くする。(龜城の傳説)

門家の婆

門家の婆 越中には「門家の婆々にも用がある」といふ語がある。これは老人を粗末にするとか不用の人はないとかの意であらうが、「日本傳説集」には應仁の頃上杉景勝が下新川郡鹿熊の土肥肥後守とかの城を攻めた時、城内の様子に分らぬに窮し、村々を尋ねて八十餘歳の老婆を捜し出し傲慢に築城當時のことを聞いたが答へなかつたので、上座に移して叮嚀に尋ねたら答へてくれたので、これによつてさしもの堅城をも抜くことが出来たから鹿熊の婆々にも用があつたといふ傳説が出来、後にそれが門家の婆と轉訛したのであらうといふ。

鮎とれず

鮎とれず 越中下新川郡吉原村附近では他の魚は捕れるが決して鮎が捕れない、これは昔此魚が捕れた時、村中分けて食つたが、唯だ一人貧乏な老婆に與へなかつたので、大に怒んで海に投

子撫川

じたから其の怨みであるといふ。(郷土研究一ノ十二)

子撫川 越中砥波郡にあり、東國より京師にいたる僧、此のあたりの家に立寄り茶を乞ひて立ち出でし事ありしに、其の家の娘僧の妾に愛染の念を起し、其の餘瀝を吞みしに姪娘して一子を生む、かくて、三年の後復び其の僧の來りし時、娘しか〜と語りしに、其の僧念佛して其の子を撫でければ泡の如く融けて此川に流れしより、今も子撫川の名ありと。(越中實事記)

藤田明神

藤田明神 同郡にあり、昔或る女此のあたりを過ぎしに此下の池より大蛇出でて吞まんとし、さしたる様を見て恐れ逃げしより其の様を神體とし此地に祀り其蛇を出でしめざるなりと。

(同書)

人柱、竈
貸、比類

其他同國射水郡には女塚とて、昔、此塚切れて如何にするとも修理し難き時、一人の女來りて人を生埋めにせば壞るゝことなしといひければ、さればとて其の女を埋めしより切るゝことなしとて女の靈を祀る人柱傳説あり。加賀國河北郡小倉村なる傳燈寺の後の穴は昔老狐が膀胱を貸したといふ竈貸傳説があり。能登の小島の里なる明觀院の釣鐘は後國講造しても海に沈むので、其の鹿頭を虎の形にしたら止むだといひ。越中、中新川郡釜ヶ淵は岩崎神社の兩側にあつた釜の一つが常願寺川の水音を聞いて鹿心を起して深い淵に沈んだといふ沈鐘傳説等あり、「越中實事記」

神歌

には能登國第一の高山として南方越中に跨り伊須流岐比古神社といふ古祠ある石動権現と越中新川郡舟倉村なる舟倉権現との間に神戦ありて、舟倉権現を打ちたまふ故同打上野といふ所には石なしとの神戦傳説等諸國同型のもの少なくない。

飛騨子

越中に於て面白く感ぜらるゝは飛騨子傳説である。昔下新川郡愛本に一人の美人があつた。そこへ所も知らず名も知らぬ美男子が尋ねて来て是非要にと所望し無難に連れて愛本橋まで来ると二人は川へ飛び込んでしまつた。其後三年を経て娘は幽月になつて、歸つて産屋は決して親くなと堅く用親を戒めたが、用親は心配の餘り親いて見ると、大きな蛇が子蛇を抱いて居つた、用親は大に驚き語くと娘は人間の形になりてかく見られし上は此世ではお目にかゝらじ御養育の御恩に報ゆるため申し遣して置くことは此の河の水で蛇をまけて飛騨子をつくり家に包んで置れば味も美く且つ頭髪を除くから御雨親の老後の生計に苦むこともないと云うたのに其き飛騨子として今も賣つて居る。同東別所町には飛騨子とて産卵けになるといふのがある。昔此町に横く舞子松原に新鹿が居つてしばしば商人を害したのを時の城主榊田豊後守が之れを退治せんとて唯だ一人、松原の奥深く行くと俄に雷雨起り、物凄い唸り聲と共に全身毛を以て包まれたる妖魔が豊後守に踏みつき来り、しばし力を角せしが魔の力や優りけん、豊後守は終に踏み潰されて跳ね起きんとしても力盡き今や魔の爲めに殺されんとした一羽何處からともなく、一つの飛騨子が口中に飛んで来てそれを食ふと忽ち元氣恢復、跳ね起きて魔物を刺し殺した。これは全く飛騨子の力であるとして毎年其の日に飛騨子を食ひて家来と共に祝はれたのが終に土地の名物となつて今も慕つて居るのである。

結婚と離婚 明治廿九年に刊行せられたる「日本婚禮式」には加賀金澤地方には尙ほ石投げの風

飛騨子

遣れりとして「さて媒酌人、双方に輪旋して嫁らう娶らうの相談熟して、まづはいよ／＼黄道吉日を選びて典入となれば、其の夜近隣の若者ども三々五々隊を爲して其の家の周囲を取圍み、をめき叫んで投げ出す小石は矢玉の如くヒュウの音高くうなりて障子を破り甚だしきに至りては障戸さへ破るに至るといふ」とあり。今は廢れたであらうが、比較的久しく遺つて居つた。此地方は眞宗の信仰盛なるを以て花嫁も先づ佛壇に關して而して後、式に移るの家少からず、能登羽咋郡

郎匠取り

地方（越中地方にもあり）にては婚姻の翌日郎匠取りと稱して、姑が嫁を伴ひて檀那寺に詣で、寺にては鏡子を出し、さて本堂へ參詣して歸る風がある。那儀に就ては古風の維持せられて、神を兼用して列するもの多きは此地方に見受くる所であるが、能登半島の先きに擧げたる石崎村にては葬禮に泣き男なるものを雇ふの風があり（辰蔵人記）同半島の西端の海岸より三里ばかりの山間鉈打村の西北隅宿保といふ所にては人が死んだ時に其の最近親の者が自分の肌で温めると死人が蘇生するとの迷信があつて晝夜の間之れを抱いて寢て、尙ほ蘇生せぬと見てから棺に收めるを習慣として官憲が説諭しても聞き入れずに行ふものがある。（越中の傳説）

泣き男

サンサイ踊其他 越中富山の名物にサンサイ踊といふがある。これは昔佐々成政が此地より肥後へ國替になつたのを喜んだ前田氏の人心收攬策に起因するので、夏季には諸所の空地や戸を閉め

サンサイ



節取

た家の軒下で世帯行はれたものであるが、今は僅に七月十四五兩日の紙圍祭の夜に其の名残を止め、年頃の娘は三々伍々紅の裳を纏って梅澤町の圓隆寺に集り、境内各所に陣をつくり、サイサンサイ、ロンサノヨロイと節面白く踊ひつゝ、踊る、其の歌

サイサンサイ、ロンサノヨロイ、踊るまいか、見まいか
しまの徳兵衛のよめみまいか
サイサンサイ、ロンサノヨロイ

の如き調子にて

寝見りや、何じや〜目にそへがなり、器量よし

土用干せまいか〜笠に七掉、坐敷に八掉、椽の出端に
ここの掉

おらのあんまにじようせん買うて買うて、どこでなめよ
かべら〜と

方言

の類(富山県内)である。加賀金澤方言の類、

金澤名物にヤーにヤ、いつていらッせ、いつてこやに、およろしう、そうけ、そうけにござい
ます、あいがとろ〜、ヤーヤ、ついでにおぼ〜におよろしう。

うざくらし、雪のみなうで、でかいこと、雨も降るがぢや、風も吹きみす。

と「俚語集拾遺」に出て居る。此地方の方言は、およしなさい(おくますせい)ふざける(あだ
ける)ございます(ございみす)旦那さん(をわんさん)おかみさん(あんにやさん)等、風異
りのものが多い。能登に入つては、鳥追ひの唄に奥羽方面と同じきものを聞く。

能代田のおんばさ、鳥追うてくんさいせ、鳥は何鳥小鳥、ひるの中のつばくる、追うても〜
立たん、ホーヤーホヤホヤ。

第四章 若狭、越前

敦賀と氣比神宮 真日本發展の氣運新に熟して對岸なる浦羅斯德ポロニアを経て亞細亞大神を横斷して歐羅巴に至る西比利亞鐵道と連絡せる世界交通の要路となれる越前敦賀は右に越前、左に若狭を抱き狭く且つ長く灣入し、港内水深く、山脈風浪を遮る日本海屈指の良港にして、上古筒飯ノ浦又角鹿と稱せられ地、畿内に近きが故に、早く任那人、新羅人、渡來し、古く仲哀天皇の此の地に行幸したまひことあり。中古は渤海使節の來泊となり、風に般賑をいたし、徳川時代には小濱藩之れを管して那奉行を置き、北國の諸侯の倉庫を此の地に設くるもの少からず。西は中國九州北は奥羽蝦夷に來往する船舶の發留する所となつたので、其の角鹿の名あるは崇神天皇の朝、額に角あるの人、一船に乗つて此の浦に泊つたからで、之れに何れの人たるを問へば答へて意富加羅國王の子都怒我等、日本國に聖皇ありと傳へ聞き之れに歸化せんとして穴門あなかどに對するの時、其の國人伊都比古、臣に謂うて曰く、我れは則ち國王なり、吾を除て復た二王なし故に他處に往くと勿れと、然れども、臣其の人と爲りを究め見るに必らず王にあらざるを知る、即ち更に還り、道

角鹿

日韓交通

路を知らず、山浦に留連し、出雲國を経て此間に至るなり（日本書紀）とあつて、日韓交通の史蹟を求むべく仲哀天皇は行宮を此地に興して筒飯宮と稱したまひ、天皇氣繁に幸して崩じたまひて神功皇后の三韓征伐となり、事終りて、武内宿禰は太子即ち應神天皇を奉じて淡海井に若狭の國を経て此地に來り假宮を作りています時、伊弉沙和氣大神いささわき夢に現れて、明日の且濱ゆきはまに幸すべしとのたまひ、濱に行幸したまへるに鼻の毀れたる入鹿魚、一浦に依れり、此に御子、神に白して我れに御食の魚をたまへり、故に其の名を稱へて御食津大神と號し、今は氣比大神とも申すと（古事記）あつて、今、官幣大社氣比神宮は此町にあり、御食津神、伊弉沙別命を祀り、後、推古天皇の御宇仲哀天皇の神靈、角鹿の直の小兒に託して筒飯宮に鎮座して恒に皇基を護り、家を治せんとしたまひしかば大寶二年に至り、其の神託に従ひ仲哀天皇神功皇后を合祀して、之れを本殿三座とし、更に東殿には日本武尊、總社に應神天皇、西殿に武内宿禰、平殿に淡原命を祀り之れを氣比の七座といひ、北陸の總社と稱せられ、佛法渡來の後、早く藤原武智麻呂、神託によつて神宮寺を建て中古廢絶したれども、延暦四年には天台の宗祖傳教大師勅を奉じて參向し、當社第三の御子林神社の靈鏡を請うて比叡山の日吉神社に遷し、弘仁七年には眞言の宗祖弘法大師、來りて神金神社の靈鏡を高野山に遷し、下つて時宗の遊行上人も此社に祈りたまひしと見え、芭蕉

氣比と佛

の「奥の細道」に

往昔遊行二世の上人、大願發願の事ありて自ら草を刈り土石を荷ひ、泥濘をかはかせて參詣往來の煩なし、古例今に絶えず、神前に眞砂を荷ひたまふ、これを遊行の砂持と申侍る。

月滑し遊行のもとの砂の上

名月や北國日和さだめなし

とある。毎歲九月二日より十日まで例祭を執行す。教賢の名所は之れのみにあらず、其の東北磯海面を抜くこと百五十尺の山上は昔吉野朝の忠臣新田義貞兄弟が皇太子恒良親王及び、第一の皇子尊良親王を率じて敵の大軍を引き受けたまひし金崎の城址にして、兼事敵せずして遂に敗る。その多くの史蹟をのこし、今、官幣中社金崎宮あり、之れに相對して教賢淵を包める氣比の松原には既世史上を彩れる水戸の志士武田勝雲齋以下三百餘名が、裏情を朝廷に訴へんとして北陸諸藩の兵を撃破し、力盡きて加賀藩の軍門に降り、終に自盡せしめられし枯骨を祀る松原神社あり、日本海の關門たる此港は氣比神宮を重鎮として金崎宮と此松原神社は其の双翼となつて皇國を護つて居るのである。

若越二州に亘りて仲真天皇并に神功皇后の芳名を傳ふるもの少からず、教賢郡松原村には常宮

金崎宮

松原神社

若越の史蹟

神社ありて、仲真天皇并に后を祀り若狭國三方郡なる常神岬と丹生浦との間にある津田門は神功皇后が海路より穴門にいます仲真天皇に會せんと船出し給ふ時、親ら琴を弾きて海神を祀りたまひし習政と傳へ、常神岬には常神社あり、古は教賢常宮より神宮來りて祭事に興りしといひ、今も習政の渡、琴引崎の名ある如き其の一例である。

吉野朝の遺蹟としては金崎宮の外に新田義貞、藤原義助、新田義宗、義順、義興の靈を祀れる別格官幣臨時神社あり、福井市の北一里なる燈明寺岬は義貞戦死の地、坂井郡高椋村長崎の稱念寺には其の墓を止め、教賢郡松原村には金崎城を授けんとて討死せし瓜生保井に弟義隆の墓がある。

男大迹王

福井并に越前人 福井市の東北、足羽山の山頂に男大迹皇子の石像并に碑文が建つて居る。男大迹王は後の應體天皇にして、其の未だ皇位に上らせられずして此國に籠居したまひし時、大河氾濫して國民大に苦みければ、三國港をば開きて日野、足羽、九頭龍の三大河の水を導きて之れに注ぎて其の害を除きて却て清運の利を興したまひし其の功績を記念せんが爲めで、碑文の示す所によれば皇子の此國を發したまふに幽み皇女馬來姫に命じて足羽社を配祀し、長く此土を護らしむ蓋し王、初めて水土神を此に祀るか、牛腹に足羽神社あり、王御も應體天皇を祀り、相殿に

福井藩

生井神、福井神、阿須波神、比叡神を祀る。戦國の世、朝倉氏之れを倒め、一向門徒之れに據り、織田氏の世となるや、此國は人心險にして叛服常なし、且つ上杉氏に當る、頗る剛強に據し、諸將を壓服するに榮田勝家に倣るものなしとして之れに居らしめし北庄城も亦此地にして、此の城は榮田氏の一族と共に灰燼に歸し、慶長六年江戸將軍の實兄にして故太閤の養子たる結城秀康、此地に封ぜられて北庄城の北に福井城を築き、新領七十五萬石越前黃門の名大に振ふたが後、數度の減封に遇ひて維新前には三十二萬石となつて居つたが、尙ほこれ北國と近畿との咽喉を扼する雄藩たるを失はず、藩祖入國以來専ら武藝士氣を伸揚するを主とし、文學の方面に於ては見るべきもの少く、僅に四代光通の時に京儀伊藤川庵を聘して國事を談ぜられたる位にて學校の如きは未だ設けられず、武選の方は領盛にして達人名手も少からざりしも、文化文政の頃までは圖書の文義を一掃り解し得るほどのものも稀れた事狀無なりしが、文政二年に至りて前田雲洞を總督として學問所を設け、之れを正義堂と名けて藩士並に領内僧俗貴賤を論ぜず入學せしめ、安政元年慶永(松平春嶽)の代に至り、遠く熊本藩に交渉して横井小楠を招き、新に明道館と名くる文武學校を設け且つ藩醫橋本左内を免じて専ら此事を幹せしめ、更に洋法の學科を加へて盛んに文武を奮勵することとなつた。松平慶永は維新史上の大立物にして、經綸の才を有し、横井小楠は

明道館

橋本左内

高眼達識の活潑にして先見の明を抱き、橋本左内は慷慨の志士なり。其の藩風に影響せること頗る大なりしは想像し難からず。左内、後安政の獄に坐し、賴三樹、吉田松陰等と共に捕へられて江戸小塚原に斬らる、時に年二十六。

二十六年夢裡過。願。思平昔。感涙多。天祥大節苦心折。土室猶吟正氣歌。

と文久年間改葬して福井善慶寺内にあり。「漫遊人國記」の著者は、此の左内を以て越前の代表的人物とし「越前人は少くとも小さき橋本左内の特色を備ふ、殆んど極果の處なし」とし、例の「人國記」の

越前氣質

越前は日本に及び無き智慧の國なり、上下共にすぐれたる辯舌尾州にも劣るまじなり、之れに依つて高慢にして底意地悪し、輕薄にして一旦頼もしきやうにて詰る所つれなし

とあるを引き、或は越前人の弊所短所をも併せたる美なる特色を説明し得るものならん、といふ必らずしも當れりといふ能はざれど越前人の時を見るに敏なる智慧者多きは否むことが出来ない。維新後の福井は積々方面を異にし輸出商社二重の市場として著はるゝに至つた。明治四年由利公正、歐洲の絹織物を賣らして福井の人酒井功に示し、且つ彼地に於ける斯業の發達を以てしたるに初まり、同八年功等相謀りて佛蘭西式ボタン機使用法研究の徒弟を京都に派遣し、十年に至

羽二重

りて織工會社を設けて編織傘地及編手巾を製し、市内の機業家も之れに倣ひ、二十年に至りては米利加輸出向の羽二重を製織し、嚴に検査の法を行ひ、今や絹織物の産額は全國の第一を占むるに至つた。これも亦越前人は時を見るに倣なる一例として見るべきである。

男大迹王の久しく此國に籠居したまひしことは此國開發の上に至大の關係を有するので、王は應神天皇五世の孫にして其の父君たる汗斯王は此の三尾の別業に居給ひて此國なる三國の近江の坂中井より振媛を迎へて王を擧げたまふ、父王薨じたまひて媛は王子を嫡して此國に歸住し王は長ずるに及びて賢を禮し士を受し、水利を治め、農業を興まし、且つ蕨絲紡織等の道を開きたまひ、遠近其の徳に服しけるが、會々武烈天皇崩じたまひ繼嗣絶えんとす、大村金村等謀して初め仲哀天皇五世の孫にして丹波にいます倭彦王を迎へしが、王は奉迎の至るを見て色を失ひ山脊に遁れたまひしかば、更に讓して男大迹王こそ天緒を繼ぎたまふべしと之れを三國に迎へ懇懇勸進して之れを誘ひ、終に帝位を継ぎたまふたので、王の此國にいませし時八紀を宥れたまひ、一族此國にあり、殊に後媛の産みたまへる梶子皇子の後は三國の公と稱して此地に土着したまひ坂井郡なる丸岡の地名は王子の御名より轉訛したるものなりとせられ、坪江村のワンカシ山は皇梶子の古墳なりと稱するものあり、同所の國神社は此の梶子皇子を祀り奉り、

三國公

三國町なる三國神社南條郡王子保村の日野神社は天皇を祀り、先きに擧げたる福井市の足羽神社を初め國內に天皇を祀る所少なくない。

越前三大河 男大迹王の水を治めて三國港に注がしめたまひし三大河の一たる日野川は上流を

白泉女

信濃貫川といひ、川上に信濃貫彦命の神社ありと、また白泉女川といひ、昔、平泉寺の僧に懸想

九頭龍

したる女、此川に身を投げて鬼女と化して此の渡りに住みしが故に此名あり(同書)といふ傳説もあり、他の一たる九頭龍川は泰澄が白山の本地を祈禱の時、顯はれたまふ九頭の龍此の川へ下りたまふが故に此名ありといへど、此川は白山より流れ出るにあらねば、こは後人の御案なるべけれど(越前名勝志) いづれの御時にや、天子より此川端に水龍黒龍王の社を祠りたまひて之れを黒龍大明神といひ、後に福井の愛宕山に移りたまふ(同書)とあれば河を神視したるや疑ひなく、尙ほ一つの足羽川には別に神怪の傳ふるなけれど、其の福井市を買渡す此川に架したる九十九橋は長さ八十七間、半ば石造半ば木造にて奇工を極めたるを以て名高く、「東遊記」には「其の大きな三條の橋ほどありて、半まで石橋なり、石橋の大なるもの天下之に過ぐるものなし、半より木の橋なり、石と木とつぎ合せたるめづらしき橋なり、いかなる故とたづぬるに皆なし、石橋となせば大洪水の時、全體ともに崩れんには、その再興大方ならず木は落ちて水浸まさる

九十九橋

故に後の遺作心やすし」と。これら三大河の合して海に注ぐ坂井郡なる三國港は北國著名の海港にして、今の如き大汽船の来泊には稍不便なれど和船時代には頗る殷賑を極めたりと見え、「二十四家願拜圖會」には、

三國女船

坂井郡三國港は商賈の家屋千軒、櫓を列ぬ、棧を列べ、諸國商船夥しく入津し、此海岸に櫓を解く、誠に北國第一の大港なり、三國の領城町は古き名所にて、今も出村上町地蔵町など、多くの遊君花の如く粧ひ、糸竹の調べも都めきて、旅人の憂を忘るゝやすがなりけり。

といひ且つ

此里に瀧若寺といへるあり、寺内に大なる糸櫻ありて、彌生のころは花を賞し宴を爲す、いつの頃にかありけん、加賀の客人、金銀の扇あまたに、或は詩歌或は俳諧の發句などうつくしく書きて彼の糸櫻に結びつけ、遊君もこれ見よがしとしたり翻なるに、遊女の中より短冊に發句かきて新造の女郎して其の櫻につけさせたり。其の句。

風いとふ花に扇の不粋かな

と以て當年の風俗を想見することが出来る。此の遊女のことを三國の小女郎とて演劇などに仕組み諸種の傳説が付加せられ、今も同町に小女郎の墓なるものが遺つて居る。

越の事

越前と傳説 北陸は佛教國である。この北陸佛教の開創者とも稱すべき泰澄は越前の人である。

泰澄は三神氏、越の前州麻生津の人、幼より群兒と異り、年十四、夜滑かに出で越知峯の巖洞に入りて法を修し、終に山に入り自ら禪變して比丘となり藤皮を着し、松葉を食ひ修行多年にして感悟する所あり、二十一歳、山を出で、國內を巡化し、白山禪定の途を開き、四十一歳の時、召されて元正天皇の病を祈りて驗あり、天皇これ白山神靈の應護なりとし、山の絶頂に此殿を建て、麓に僧房を造營せしめたまふ。後聖武天皇の御宇に天下疫術盛んにして民死すること數を知らず、天皇、泰澄に勅して之れを攘はしめたまひ不日にして全く止む、かくて泰澄は皇室の歸依を得、身は専ら北國の山河を跋渉し、道を開き、橋を架し、各所に寺院を創し、後、丹生郡越知山大谷寺の仙窟にあり、八十六歳を以て入寂す、泰澄の遺蹟此國に多く、神怪の談を傳ふること少からず、坂井郡北高安樂寺の如きは其の一例である。養老三年泰澄白山の高峰より西北に紫雲霞びけるを見て此地に来る、時に老翁の顔に角あり、形夜叉の如きが來り我は北天守護の牛頭天王なり、衆生の病苦を救はん、願くば此地に伽藍を創せよと、語り畢つて姿を失ふ、時に泰澄一言の和歌を詠じたり

牛頭天王

かりそめの雲隠れとは思へとぞ

見るほどくらき有明の月

平泉寺

といふ。時に空中より、金色の菩薩如來出現すと、其後三百餘年を経て當山の院主此浦々に夜々光を放つものあるを見れば平泉天王、本地垂迹諸尊屬と共に浮みたまふなりければ、之れを後山に勧請したりといふ。泰澄寂して後幾百年、戦國の世となりては白山山麓なる平泉寺三千の僧坊威を北陸に振ひ、諸國行脚の沙門をして

初見平泉秀異郷、玉樓銀閣數千房、

終宵酒宴亦歌會、錦上敷花塵地香、

と誦はしめたるほどであつたが（越前名勝志）天正二年四月一向一揆の爲めに悉く焼かれ、其後願海和尚之れを再興して僅に願海寺と白山神社とに其の面影を遺すのみとなつた。

吉崎道場

此一向一揆即ち眞宗門徒の結起は實に北陸史上に逸すべからざるもので既に總説并に前章に於ても述べし如く、宗祖親鸞上人の遺後へ流さるゝ時、此國の如道といへる高僧上人の法に隨喜して其の門に入り、専ら念佛を弘め其の齋精江の誠照寺、中野の専照寺、横越の證説寺となり、法極早く宗祖の時に蔭かれ、後中興の祖たる運如上人の此國に來り加越の境に近き坂井郡吉崎に道場を建立して盛んに附近を教化するに至り、靡然たる一大勢力を成すに至つたので、此國上人の

縁成し各

一向一揆

永平寺

教化の蹟を傳ふるもの少からず、吉崎には今は東西本願寺の別院あり、其の西別院に藏する肉付の面には有名なる縁成し各の傳説あり、そは普運如上人此道場にあつて教化したまひし頃、孝順にして貞淑なる縁が法雨に浴して開法に赴くを邪性の姑が心憎く思ひ、鬼面を渡りて途中の山路に持ち受け之れを嚇さんとせしに、其の假面肉について離れず、漸く上人の法力によりて救はるゝを得たりといひ、説教法談の好材料となつて居る。眞宗の信仰は此地方に徹底して平生財を惜み身を持するに質素なるものも本願寺の勸財には數百金を惜まざる状態で加能越の天地は眞宗の天地と云うてもよいほどである。今尙ほ此の如しであるから、上人教化當時に於ける信仰は非常に熱烈なるもので、其一たび加賀の宮經政親の此宗を排斥し改宗を強るに遇ふや、所在の門徒結束して立ち、こゝに一向一揆を現出したので、此時に當り山門内に兵仗を蓄ふるを禁じ、佛法修行の道場として山深き吉田郡志比谷にあつたのが、今越前を代表するの名刹吉野山永平寺である。永平寺は此地方に於て眞宗に次ぐ多數の寺院を有する曹洞宗の大本山で、宗祖道元禪師が支那より歸りて後、波多野義重の招きに応じて此地に來り、こゝに庵室を結び閑雲夜鶴を友とし、名利に超越して一箇牛歯をも獲得して如來の正法眼藏を継えざらしめんとせられた所で、鎌倉執権の密附も之れを斥け、後醍醐天皇の紫衣を賜ひ、再三辭すれども許されざるや、詩を賦して

永平雖三谷渡、勅命重重々、却被三谷鶴笑、紫衣一老翁。

と云はれた古蹟で、伽藍は鎌倉の建立にして初め大佛寺といひ、後永平寺と改め、開堂の日天奉下り、羅漢堂側の松上に来るの奇瑞ありしとて今も羅漢松の名を遺す等、禪師に關する口碑多く存し、全國一萬四千の末寺は此の本山を中心とし、數百萬の信徒は諸國より來り詣で、此地方の人心を風化して居るのである。

遠敷明神并に若狭人 若狭は北は全く海に面して一大灣を爲し、山嶺は東北より西南に走りて北陸道と山陰道との間に介在する狭長な國であるから、古來若狭は駿嶽の義なりなどいふほどなれど、濶海漁獲の利多く、其の首邑たる遠敷郡小濱はもと酒井氏十萬三千石の城のありし所にして人口一萬に近く海陸の商賈聚會して古くは南蠻船來船の所となり、外國の文化は此所より來りしことも少からざりしほどで「南蠻寺興廢記」には「是等の乘る所の南蠻船、若州小濱に着船す、信長、兼ねて再度南蠻人渡來の時、小濱へ入津せしめらるゝは思慮あるなるべし、江州海津より大津に至り、京都に入る云々」とある。此國の一の宮を遠敷明神といふ、今、國幣神社に列し、若狭遠敷神社といひ、上下の二宮に分れ、上官は遠敷驛にありて若狭比賣神を祀り、下官は其の東南（字原野）にありて若狭比古神を祀る、「神祇志料」には此の神を産火々出見尊、豐玉姫な

遠敷の祭

明神と佛

りといふ説を擧げ「按ずるに古事記、蘇我性氏錄に大和國造大和宿禰は根根津彦の孫裔なり、又舊事本紀に産火々出見尊、海神の女玉依姫を娶つて生みます子武位起命は大和國造等の祖とあるに依て考ふるに武位起命は即ち根根津彦の父にして産火々出見尊は即ち其御祖にますを以て此國に住める大和氏其御祖を祭りしものなること著し、唯だ豐玉姫とせるは玉依姫の誤に似たりと（大日本地名考）あつて、遠敷明神は海に因縁を有したまふを以て祭日には漁人鮮魚を奉るの式ありといふ、此神も亦佛法と因縁淺からずと傳へられて養老年間比古神の祝儀なる私赤といふ者に示現したまひて我れ生を鬼神に受けて苦報甚だ多し、三寶に歸して苦難を出でんとす、汝能く我が爲めに伽藍を營み、佛像を安んぜよと仰せられたが爲めに神顯寺なるものが建てられたのである。（元亨釋書）といひ、又南都東大寺二月堂の實忠和尚行法の時、遠敷明神、恒に漁獲を喜び、精進これ稀なり、其の行法に隨喜して圓錫の水を獻ぜんと示現せられ、黑白の二鶴、忽ち磐石を穿ちて甘泉湧出し、香水充滿す、これを若狭井と名くといひ（東大寺要錄）。遠敷郡妙樂寺なる禪師堂創建の時、明神來りて弘法大師に誓約し、我れ日に七たび此所に至つて此堂を護るべしと仰せられしと傳へられて堂の正面に板を以て圍みて明神影向の間といひ、凡人をして入らしめず（若狭郡志）といふ等、後世佛者の付會せしものならんも傳説は信仰となり、信仰は風俗

若狭井

明神の影向

となつて、今も南都東大寺に若狭井の阿彌水汲みの風は存して居るのである。

若狭の人

例の「人國記」は若狭の風俗を評して「當國の風俗は、人の氣相和することなく、心／＼の強なり、昨日は強しかりつる中も、今日は弱くなりて、其の非を擧る風なり、下として上を欺き、己れが料を正されて却て人の不法のやうにいひなせり、取り返し利發なる故、さしあたりの勝負一花の氣勢はあれども、根の盛ぐる所なし、三方都は江州の風にひとしとぞ」とあり。「持ざるに當國は北に向ひ海濱を受け山を負ふといへども只一重なる國故に自ら人の心根とほりがたく風俗運手なり」と付記して居る。

八百比丘尼

人魚の傳説 若狭の傳説にて、最も著しきは八百比丘尼である。小濱町なる空印寺は八百比丘尼の住みし所といひ、一つの洞穴ありて「諸國里人談」には「土人いふ、當寺五六世以前の住僧此の穴に入りて其の奥を計るに三日を経て丹波の山中に出でたりと云へり、相傳ふ、昔、女僧ありて此所に住み給八百歳にして其の容貌十五六歳の壯美なり、よつて八百比丘尼と稱す、里語にいふ此女僧は人魚を食したる故に長壽なり、とあり、八百比丘尼のことは佐渡の條にもいひ又前章に於ても立山に詣りて傳説を擧げしが、これに就て貝原益軒の「西北紀行」には、

八百比丘尼の事、世俗の語り傳へに曰く、古へ此處に六人の福徳長者あり、時々參會して寶物を競べ、食膳も又珍奇を盡くす、或る時人魚を料理す、五人の者は人魚を知らず、怪しきものとて食はず、其の中の一人、人魚の肉五六片之れを懐にして家に歸り、妻子に見せて捨んと思

ひ隠し置けるを、一人の女子、人魚は藥なる由を聞きて齒かに取りて食しける、これより長命にて八百年生きて此所に住せしといへり。

との傳説を擧げて其の荒唐なるを駁して居る。此國には尙ほ他に人魚の傳説がある。「諸國里人談」にいふ。

御淺明神

若狭國大飯郡御淺ノ嶽は魔所にて山八分より上に登らさず、御淺明神の使者は人魚なりといひ傳へたり、寶永年中、乙見村の鹽商、漁に出けるに、岩の上に臥したる體にして居るものを見れば頭は人間にして襟に雞冠の如くひら／＼と赤きもの纏ひ、それより下は魚なり、何心なく持ちたる襪を以て打ちければ即死せり、海へ投げ入れて歸りけるに、それより大風起りて海鳴る事一七日止まず、三十日ばかり過ぎて大地震し御淺嶽の麓より海邊まで地裂けて此村一帯墮ち入りたり、これ神の祟りなりといへり

とある。事の眞偽は暫らく別としてかゝる俗信の存せしを想ひ見ることが出来る。

傳説と俗信 若狭には海に關する傳説が多い。遠敷郡青井村熊野山の西麓に船留石といふ石ありて、昔筑紫に王孫といふものゝ女、伊勢の大神宮に詣りて其の神託に従うて船に乗りて海に泛び其の到り止る所を以て居となさんとせしに、其の船此の山の麓に至りて石にかゝり、其の女は山腹

筑紫の王

鐘寄

に登りて十二子を石上に産む之れを産石といひ（若狭縣志）安産を祈ると傳へられ、大飯郡高濱村の濱邊に鐘寄せといふ所ありて、程遠からぬ沖に鐘が沈んで居る、此鐘は同村佐岐治神社の寶物にある鐘と姉妹で、此の鐘を撞くと蛇度「姉ゴーン」と鳴るといはれ（日本傳説集）三方郡と遠敷郡との境なる御所ヶ平といふ所の石は常に海中にありて潮に没りしが、一歳因作にて民苦みける時、二條院讃岐此地に流され悲しみのあまり

我が袖は潮に見へぬ沖の石の

人こそ見えぬかはく間もなし

沖の石

との歌を味ぜしかば、不思議や沖の石は海面より高く出づると共に御所ヶ平は豊作となり、若狭一圓米の穫れぬ時でも此地のみにはさる事なしと云はれ（文藝俱樂部九ノ九）。越前に入りても、坂井郡三國町を距る一里許の海岸難島村に怪石探碧の上に聳立せる屈指の奇勝、東尋坊は、昔平泉寺に東尋坊といふ懸崖ありて、居常風暴にして人を苦めしが爲めに衆徒これを憎み、相謀りて之れを此の岩上に誘ひ、酒を飲まして其の風醉せる隙を窺ひて此の海中に投じて溺死せしめたるが爲め、怨靈怒を爲し、今も四月五日の祭禮の前後には風浪烈しく起りて東尋坊の怒つた姿が其の上に現はれることがあると信ぜられて居る。彼の平泉寺の山中にある辨ヶ瀧は昔此寺に容顔

東尋坊

辨ヶ瀧

美なる心優さしき和光といふ稚兒あり、辨の君といへるに契りしが、世を果敢なみて此の瀧に投ぜしより、辨の君も亦同じく此瀧に投ぜしより其の名ありといふ白菊の瀧に似たる傳説があり。

背籠べ

大野郡大野町の東にある荒島山と南にある飯降山とは互に背籠べをして飯降山は馬の鞍の高さ半分ほど低いと定まつたが爲め一握の土でも持つて来たものには顔ひ事を叶へ下さると傳へられて五月端午の祭日に参詣するものは皆な一包の土を持つて行くといふ背籠べ傳説があり、其他永井一之助氏の「福井の宗教」といへる一文の中には大杉明神といへるものと若狭の高濱に現れたりとして。

大杉明神

大杉大明神は稻荷にして餘程の老狐なりといふ。而して此稻荷の悪きたるは六十餘と見ゆる老婆にして、人々の雷により大杉大明神の命により疾病の輕重及び其他の吉凶を告示するなり、此の老婆或夜夢に一老狐來り我は數十年來此家に入出せる大杉大明神なり、今日より汝に憑付せん其論として一の小社を建て、祭祀せよといひしに基く。

といへる如き俗信も行はれて居る。

雨乞の牛曳 この地方の祭祀奇習として見るべきものは雨乞の牛曳である。厚知福田菱洲氏曾て之れを記述したりとて寄せられたれば左に全文を掲ぐることにする。

越前今立郡神明村字水落に郷社神明神社あり、祭神は天照皇大神、豊受太神に生まして、北陸近
畿江の北一里を距る山上に鎮坐す、樹木茂りたる境内の一隅に、直徑十間許の半月形の古池あり、
碧潭底深く、中央に長さ三間許の竹の白幣立たり、土人之を牛神と稱し、古來旱魃の時其
牛神を曳けば、降雨の神功ありとて其名高し、余は郷里福井に在るとき、亡父より此事を聞き
同社に參詣して神職瓜生氏に就きて此事を聞くに、信徒三十八ヶ村より雨乞を願出たるは、安
政二三年の事にて、其時水落村の者七名を選び、無妻もの齋戒を行はしめ、先神詞を神前に奏
して、後一名宛右の池中に入り竹幣の立たるを便りに水底の牛背に二人立つ、次に二名水中に潜
り入り、綱を牛の鼻釣に打透し丸く輪に結びて出づ（綱は新鹿平の三ツ組繩なり）他の三名等は
其輪綱に更に長き綱を結びくゝりて、之を信徒一同に曳かしむるに、人数千餘に及ぶも牛の動
く事なし（牛とは農家の屋敷裏に用たる丸木の穴明たる所謂紅繩なり）午前二時午後二時、
木遣節を誦ひて曳くものにして凡三日の内に必ず大雨降る、此儀式を觀んとて參詣する群集の
爲め水落村は賑ひ、露店飲食の繁昌は不時の實入にてありけるが、其時信徒の子に惡戯を爲す
ものありて、いつの間にか池畔の杉木に綱を掛きつけて曳ければ、忽ちにして綱輪結のまゝ抜
たりければ、一同大に驚き、神職直に神前に御籤を以て伺ふに、元來池中の牛神は東向なるが

牛神

更に及方に當りて牛神あれば之に結べとありければ、再び先の人をして水中に探らせけるに、
果して別に大なる牛神坐ますを發見しければ、之に式の通り輪結びして曳しに、忽ち大雨降り
ぬ（さて前の牛神の鼻と檢するに少しく鼻仰ぎたるのみにて損じは見えずと）其後十年許を経て又旱
魃し、村民困難しければ牛曳の式あり、同郡河端村の總代某來りて云く、先年雨乞のとき我村
の若者牛神に惡戯を爲して不敬せし神罰にや、我河端の一村は雨降されば海に恐れ居たる事に
ありしなり、今回又雨乞を願ふに先だち先年の不敬を神前に謝せむと乞ければ、神職此旨を神
に託言し、且二ツの牛神いづれを曳べきやと伺ふに、先の鼻仰ぎたる方とありければ、夫れに
式の如く綱を結びて曳けるに、或は又輪形のまゝ扱もやせんと疑ひたれど、群集數千の信徒何
條此事實ありし事を知るべきや、木遣節高く誦ひくゝて曳けどもく動きもやらで、其三日四
日に大雨ふりて三十八ヶ村を始め皆田高の稻妻枯色忽ち青綠に蘇りたりと、神職奇蹟は今に崇
敬せざるものなし、さるにても其牛神の本體はいかなる由緒の物なるかは知らず、當社には古、
下河端村湯花山に在りしが、神託により今より四百十六年前明應五年この地に移したるものな
りと。

今は廢れたるべけれど若狭遠敷郡龍川村白石神社にては十一月七日綱曳の神事あり、氏子東西に分れて傾

若狭の朝

上方と下町方と大綱の兩端を取り互にこれを見き其の勝負によりて一年の吉凶を卜することありしといふ。綱現は豊く諸國に行はれた神事と思はるゝが牛曳は餘り多く他に見ざる風俗である。

歳時奇習 歳時奇習として傳ふべきは、越前坂井郡丸岡町の正月十三十四日の兩日に行はるゝ火祭にて昔は同町の中央にありし秋葉神社の境内にて行ひし由なれど其の社廢れたる後は之れを町家に移し、本町一丁目二丁目三丁目の家持にて願次一戸を其の祭場に充て、早朝より奥表の戸障子を悉く取拂ひ座敷の正面床の間に神酒燈明を掲げて之れを假の神殿とし、其の家の軒庇の上より二階大家根の間即ち二階の表の窓に向へる戸を閉ぢ、此所に諸方より持ち集めたる多くの押繪の額を懸け老幼集りて其巧拙を評し町内の者は其家に集りて飲食し、雑新前には其の前なる道路の中央に大な

丸岡の火



初詣

る左義長を造り十四日の夜町火消人足總出にて非常を警戒し、笛太鼓を鳴らし之れに火を點じて焼き盡すを例としたれど、そは頗る危険なれば今は全く廢せられ押繪の額を持ち集ること、宴樂することとは昔に變らず執り行ふ（風俗叢書六三）。敦賀郡東浦村大字江良にては十四日の夜村の若者相集り村中を「いざごいの、もどらいの黄金の橋に乗つて」と云ふ歌を謡つて歩くと、何れの家にも米一升宛出して與へる、若者は之れを米に手を掛けずして炊ぎ、初詣を三ヶ所程山奥の或る場所へ一人供へに行き、他は振袖として食ひ一夜を明す風がある（風俗叢書三一六）。盆風俗に最も面白きは福井在一の瀬村に行はるゝカニコ踊にて場所の中央に篝を焚き太鼓に紙をつけて肩にかけたる男子、打ちならしつゝ、謡ひ歩けば、後より男女拍子につれ篝火をめくり扇をかざして踊り、風致稍他の盆踊と異なる（風俗叢書三一）。「俚謡集拾遺」より當地方盆踊の歌二三を紹介すれば、

カニコ踊

盆唄

春日山から出て来る鳥、せにも持たずに買はう／＼と。
やーやで、やーやで、やのーやで、やーやで、やーやで、やのーやで、こちや知らぬ。

又若狭地方には

若い娘達踊られふられ腹にや子は無し、身は輕し。

うちのお父さん、酒にようてこけて、赤い手拭土まみれ。

むかし竹馬老^{たけうま}ては末の、杖となりたるおやぢさま。

走る船をば招けば磯へ、寄るは心のまことより。

等がある。

出産と結婚 出産風俗として古風の残存するは先きに挙げた越前敦賀郡常宮神社のある常宮と稱する部落で、此村の婦人が出産する時は決して之れを自宅でなさず、必らず村共同で建てたる濱小屋に行き、又月経にも自宅に居ることを許さずして矢張り此小屋に入らしむることである。かく

産小屋

結婚と佛式

一面には太古の風の存して汚穢を嫌ふの俗あれど、此の地方一帯は先きにもいふ如く佛教隆盛の地なれば、結婚の日も花嫁は水晶の數珠を掛け別間で休む間に油を燈明に注ぎ、其の家の佛壇を拜してから三々九度の式に移り、持參する土産の中にも香と蠟燭とがあるといひ、關東附近では縁起悪しとせらるゝことが行はれて居る、又尤も面白しと感ぜらるゝは越前丸岡町附近にては花嫁が舅の家に入らんとする利那に、實家より持ち來りし茶碗を投げつけて割る習慣がある。これは復び此茶碗では飯を食はぬといふ意味から出たのであらう（大森輝成氏談）。

茶碗割

越前を語りてこゝに付記し置くべきは、幸若のことである。此の管曲の祖は一巻總藏に於てもいへる如く

幸若舞

吉野新時代に武將たりし桃井直常の孫宮内少輔桃井直詮にして重名を幸若丸といふ、天源の美濃絶妙の習流は後小松天皇の天徳に達したれど之れを専業とするを武門の耻辱とせしを天皇末代まで藝人とは爲さざるを以て廢すべからずと仰せられ、後花園天皇より采地數十町並に幸若右大夫安眞の流業に管曲幸若の名を賜はり、これより幸若の曲は大に擴がり、徳川氏の世となりて先祖直常が名將たりし故を以て殊遇を受け越前丹生郡四田中に領地一千石を賜り、直常御本丸實本岡格若年寄支配となり爲めに其の曲は民間に普及せずして徳川氏の召に應じてのみ奏することとなり、幕末には演藝もなさずして唯だ年始御禮として出府するのみとなり、王政維新と共に全く廢絶するに至つた。（丹生郡誌）

近畿地方

第一章 總 說

近畿の地と人 古來帝都の所在地として政令之れより行はれ、文化之れより開け、風俗も亦た之れより擴がりしは我が畿内の地である。大化二年東は名懸の横河（伊賀國名張郡）南は紀伊の見山（紀伊國伊都郡）西は赤石の栢瀬（播磨國明石郡）北は狭々波の合坂山（近江國滋賀郡）を限りて畿内と定められ、持統天皇の時、大和、河内、難波、山背を四畿内の名あり（日本書紀）、後、和泉を置きて五畿内と云はれ、帝都、山背に遷されて後、從來の大和を第一としたる順序を改めて山城を首位とし大和河内和泉播磨と次第するやうになつたので、其の呼んで畿内と稱するは京師に近接するの義にして又呼んで京畿といふ。これに伊賀伊勢、近江並に紀伊播磨等を加へて近

畿といひ、今日の地理學者は其の所轄により伊賀、伊勢、志摩を管する三重縣、近江を管する滋賀縣、山城并に山陰道なる丹波丹後を管する京都府、大和を管する奈良縣、河内、和泉、播磨を管する大阪府、播磨并に丹波の一部及び播磨、但馬、淡路を管する兵庫縣を總稱して近畿地方といふも、本書は説述の便宜により東海道に屬する伊賀、伊勢、志摩の三國（三重縣）并に東山道に屬する近江（滋賀縣）は既に中部地方の部に於て之れを叙したれば、殘れる二府三縣を此篇に於て叙述せんとすので、これら地方は皆な京畿に近接して風俗習慣似通へるもの頗る多く、共に古來汎稱して關西と呼ばれたる地方にして嚴密なる意味からいへば關西と稱すべきは不敏（美濃）鈴鹿（伊勢）二關の西にして伊勢、伊賀、近江をも含むべけれど、今は暫く逢坂の關以西音通に京阪地方と呼ぶる、淀川流域地方并に大和より出で、河内を貫き同じく瀬戸内海に注ぐ大和川流域地方を中心として南は山脈蜿蜒として河川、太平洋に注げる紀伊、北は中國山脈の日本海に近づき來り丹波を分水嶺として川多く日本海に注げる山陰地方と、之れと表裏して瀬戸内海に臨める播磨并に僅に海を隔て、呼應し得べき淡路とを含ましめたので、紀伊の外は皆な所管行政廳の所在地を畿内に有し關西の色彩最も濃厚なるからである。試みに東海道を西下して此地方に入らんか山も川も皆な多少の史蹟を有せざるはなく、一草一木も音を語るが如く家の構造、人の服裝、

關東と關西の氣

言語動作も自から關東と異りて粗豪の風少くして温順の氣の漂ふを覺ゆ。一は老舗の如く着實に、他は新店の如く俊にして鋭、一は着實なれども時代遅れの持ち古し物あり、他は俊にして鋭なれども物足らぬ感を免れず。一の儉素を旨とするに反し、他は豪奢を誇り、一は地味を喜び、他は派手を受し、一は依然として都人の風あるに對し、他は今尚ほ東夷の體に類はざる感は其の言語に於て關東のべい／＼語の發味を帯びるに對し、おます、さかいの發味を持つて居るのも明かである、關東の「ナンダ馬鹿にしてやがる」は關西の「あほらしいやおまへんか」彼に激刺の生氣あり、此れに優婉の情味がある。大原兩學、曾て兩地の人情を叙して、

關東は人が右といへば忽ちに心に左りと浮び、左といへば右を思ふ癖がある。疑心はすくないけれども背くことが多い。上方は人が右といへば、先づ一旦は右と思ひ、左といへば先づ左と思ひ背くこと少ひけれども疑は深い。關東は其場の奢をするが、上方は後の奢をする。上方のものは己れにまさつて衣服の美麗なものあれば而前で賞美するが内心では猜み、陰で悪口する。しかし一旦決定したことは歳月の立つについて益々之れを厚くする勇氣がある。關東のものは己にまさる美麗のものには下寄る氣味があつて猜むことは少い。講定誓約などは一旦は命を惜まない勇ひを示すが、歳月を経るに従つて忘れてしまふ。

と、關東は一時的にして耐久性に乏しく、關西は因循なるに似たれど耐久性を持つて居る。尙ほこれらのことは後に京都大阪を叙するの條下に再説するが此關東と異れる色彩は先きにも示せし如く名古屋以西殊に著しく此地方に入つて最も濃厚なるを示すのである。

大和民族の發展 近畿の歴史は遠くして且つ古く、神代の昔、伊弉諾、伊弉冊の二神、たまよへる國を修理せんとて天瓊矛を以て淡路を探り、先づ生みたまへるは淡路洲にして次で大倭豊秋津洲を生み、更に伊豫、二名洲、筑紫、隱岐、佐渡、越、吉備等を生みたまへりといへば、此地方は我が國最初に治定せられたるものにて、たまよへる國とは擾亂せる國々の義にして二神は實に此の淡路によりて大八洲を征定せしめられたのである。其の伊弉冊の赴かせたまひ、後に素戔嗚尊の下りたまひし出雲系は大國主命に至りて山陰方面より進んで北陸に及ぶ日本海沿岸の地を經理したまひ、餘威は山陽方面に及んだので本島に叙せんとする丹波、丹後、但馬并に播磨の地に多くの遺蹟を存し、畿内に入りては大和に大國主命の後裔たる三輪の一族あり、南海道たる紀伊方面も亦素戔嗚尊の御子五十猛命は其の味神と共に此國に入り木種を分布したまひし蹟を傳へ此系統の民族の早く此地方に來りしをいひ、伊弉諾尊の嫡流たる天照大神の勅によりて日向の高千穂峰に天降り給ひし瓊々杵尊は三世彼の地方にいませしが、神武天皇の東征を金てたまふや、

神武の東征

瀬戸内海地方より横津の難波に至り淡路を過つて白川の津（今河内北河内郡牧方地方）に上陸して大和に入らんとしたまひしが、皇軍利あらず、轉じて紀伊に入り、背後より大和に出でて終に中原を平定して都を畝丈山の麓に築めて即位の大典を挙げたまひ、建國の基礎こゝに成つたので、此地方は實に我が大和民族發展の根源地である。勿論、史にも明記する如く當時此地方には蝦夷以前の住民たりしコロボツタルならんかと推定せらるゝ土蜘蛛族又國柄と稱せらるゝ異民族蟠居したので、彼等は穴居して石器を使用して居つたので今尙其遺蹟の發見せらるゝもの少なくないが、早く大和民族の發展したるが故に其の數非常に少く、僅に全國總數の六十三分の一なるに對し我が民族の遺蹟と見るべき古墳は頗る多く、實に全國總數の三分の一弱を有して居るのである。

（大日本地誌）以て我が大和民族が如何に此地方に深く因縁を有するかを類推すべきである。

古代の遷都

關東の中心 神武天皇皇居を大和の橿原に築けたまひ、爾來、天皇崩御毎に皇居の地は變ぜられて嵯峨天皇は高丘の宮、安寧天皇は浮穴の宮、懿德天皇は曲城の宮、孝昭天皇は菟上宮といふ如く殆んど御一代毎に遷都せられて四十三代元正天皇の奈良の地に幸し、平城宮を造營して國家の首都とせらるゝまで皇居はしばしば遷されたが多くは大和の地を出でず、僅に仲哀天皇の越前角鹿の宮、仁德天皇の難波の高津宮、反正天皇の河内の丹比榮麻の宮、繼體天皇の山城筒城井

に畿國の宮、孝德天皇の橿津の豐碕の宮、天智天皇并に弘文天皇の近江大津の宮等を算するに過ぎない。かく御一代毎に遷都せられしは我が古來の宗教たる神道にては清淨を旨とし觸穢を忌むこと甚しく、崩御ありたる皇居は穢れたりとて之れを用ひず、直に焼棄棄て、他所に新たに造營して新らしき御代を開くとの信仰から出たので、其の御造營も簡素なものであつたであらうが、國威大に揚り、且つ海外との交通頻繁に赴くに從ひ、帝都のしばん轉移するは不便であり、また一國元首の住居としては相應の威嚴を備へねばならず、それには建築術の進歩も伴ひ、外國の事例も參照せられて終に元正天皇の奈良遷都となつたので、和銅元年、天皇此地に幸して地形を相したまひ、翌月幣帛を伊勢大神宮に奉りて之れを奉告し、造宮司を置きて造營の事を司らしめ左右の京坊を置き同三年都を此地に遷したまひ、爾來七代七十五年、青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く盛りなりける奈良朝の文化を煥發したが、地は形勝に據るも、水陸の便に乏しきを以て桓武天皇は都を山城の長岡の地に遷さんとせられしが、此地も亦其の可ならざるを見たまひて、終に同國葛野郡宇太村を卜し、こゝに大規模なる帝都を築められたのが、今の京都で、爾來明治天皇の東京遷都に至るまで一千有餘年、一國の首都として天下に號令し、中興政體武門に移りて、權力の中心は關東に移りしも、尙ほ名譽の中心として長く其の資格を失はなかつたのであ

奈良と平

る。されば一國の歴史は此處を中心として活躍し、一國の文化は此處を中心として開發したのであるから風俗習慣も亦此處を源泉として送り出でて今日各地に汎濫して居るので、此地方の歴史は即ち一國の歴史此地方の風俗習慣は即ち一國の風俗習慣となつて來たのである。

公卿と武

京師と近畿 昔の京は美しきものであつた。支那印度の爛熟したる文明は此處に輸入せられ文制の弊は此間に醸したりとは云へ、柳櫻をこきませし都大路を往き通ふ大官人の優美は關東武士等の想像も能はざる所であつたが、中央の繁盛は地方の疲弊となり、政令香く行はれず、實力は漸次に下移して、さしも榮華に誇りし月野雲客は地方武士の爲めに其の勢力を奪はれ、世は武士階級たる平氏の世となりしも、平氏も亦此都會文明の風俗に感染して、過ぎし藤原氏の榮華を學びしが故に、終に源氏の爲めに追はれ、帝都は一時粗豪なる田舎武士の占領する所となり、平氏亡びて源頼朝の政權を握るや、土肥實平、梶原景時等を近畿數國の追捕使とし、且つ京都に守護を置き、鎌倉より大番兵を派して之れを守らしめしが、政權更に下移して北條氏の執權となるや、守護を廢して六波羅探題を置きて京都を監視せしめ、王朝の風俗は大第に變化し、後醍醐天皇建武の中興によりて六波羅は亡びて政權一たび恢復せられしが、次で、足利尊氏の謀反となり、丹波、丹後、但馬並に播磨の兵は多く之れに與みし、之れに對する楠正成は播津、河内、和泉並に

紀伊の兵を率ひ、近畿の地は大體に於て南北に分れたので、中には丹波の江田、萩野、播磨の金谷氏の如き勤王家もあつたが、楠正成の播津津川に戦死してより勤王家は勢力を失ひ、足利義満、征夷大將軍として京都の室町に花の御所を造營し爾來足利將軍此處に居りて王朝時代と雖も具にする室町風俗の源泉を爲し茗菫を事として豪奢を極め、近畿の地は主として高山細川の二氏之れを所領とせしが應仁元年に起りたる山名、細川兩氏の戦ひは中部、近畿、四國、中國の兵を兩氏に分屬せしめ互に干戈を交ふること十一年、悉く兵費に罹り花の御所は今も全く荒れ京師は野原となり、皇室は式微し、幕政は衰へ、近畿の地も亦諸豪族の蟻起する所となり、高山氏の守護たりし大和には阿井順朝起りて自ら守護と稱し、次で松永久秀、信貴城によりて之れに披し、細川氏の守護たりし和泉は其守護代たりし三好長慶之れを略取して更に播津を取り高山氏の守護代を置ける河内を略し、丹波には波多野氏、丹波には一色氏、但馬には山名氏、播磨には赤松氏あり、終に織田信長の統一に至る、信長、近畿を略定して先づ皇居を修理し、離散の公卿を復して京都を舊都に復せしめ、更に大に爲すあらんとせしが、不幸、先きに波多野氏を亡ぼして丹波龜山に封ぜられたる明智光秀の爲めに京都本能寺に就せられ、其の又光秀は秀吉の爲めに敗られて世は豊臣氏の天下となり、秀吉は信長の遺志をつぎて仙洞を造營し、京都の市區を整頓し、且つ夙に

關西時代

關西時代

大阪の海陸交通の便に當るを看破して大阪城を築き、今日關西商業の中心たる大阪の基礎を成す、關西は實に此の秀吉によつて繁榮を極むるに至つたので、今も尙ほ關西人の秀吉の餘徳を口にするもの決して偶然ではない。秀吉薨じて徳川家康を擁護し、關ヶ原の一戦は關西の勢力を殺ぎて豊臣氏をして僅に播磨泉七高石を領せしめ、家康征夷大將軍となつて實力を關東に收め、元和元年大阪城陥りて豊臣氏は全く亡び、京阪を初め近畿の地も亦徳川氏の手中に歸することとなつた。かくて關西の風俗は漸次に關東に移り、こゝに新なる江戸風俗を造り出して遂に京都、大阪に對したので、當時京都は皇居の所在地として名譽の源泉たり、大阪は交通の要路に居りて商業の中心と云はれ、江戸は公方様の御膝元として政治の中心を以て居つたので三ヶの津は實に各々其の特色を以て全國代表的都市と云はれたのであるが、維新の改革と共に帝都京に遷りて江戸は名を東京と改めて名實共に日本の首府となつたが、千年の舊都たる京都の古き歴史は消ゆべくもあらず、三百年間實力を養ひ來れる大阪の商業は漸次に其の發達の度を高め、近畿地方は今も尙ほ依然として日本風俗の一中心地たるの資格を有して居るのである。

三ヶの津

豊臣氏

今關西の例によりて徳川時代の管治を見んか、幕政に對しては家康始め一萬石を獻じ、秀吉の女室關門院の入内に應じて御化粧料として、一萬石を獻じ、(門院の御側と共に之れを止む)家將將軍職を廢ぐに

幕領

及び一萬石を獻じたが、寶永三年の詔にては幕府領二萬九千餘石、仙洞院、宮御料一萬五千餘石、親王公卿四萬四千餘石、門跡家一萬九千餘石、女中方三千三百餘石、尼御所四千二百石、諸役人二千三百石、其他幕府の合力米、公卿の御米等を合せて十二萬餘石を畿内並に丹波近江に有してござつたので幕末には別に年々三十萬俵を獻じ、終に慶應三年には山城全國の徳川氏直轄並に武家の知行を獻じて廿萬石餘に達したといふことであるが久しく十二萬石を以て幕府一切の費に充てられて居つたのであるから高位高官の月謝儀客も其知行は五つて少く最も多き五萬石に就て見ても九萬石(三千四十三石)近衛家(二千八百六十石)一條家(二千四百四十石)二條家(千七百八十石)藤原家(千五百石)位であつた、京都に對しては幕府は京都所司代を置き、大阪には城代城番を置き、共に譜代大名をして之れに當らしめ、其の他京都には幕府御用を兼ねた世襲代官小堀氏を置き近畿諸國に於て九萬六千餘石の地を支配せしめ同じく世襲代官たる嵯峨(山城)並に京都の兩角倉氏をして専ら河川のことを司らしめ、同じく京都の木村氏をして大和河内に三萬石、山城宇治の上林氏をして山城河内に二萬餘石を支配せしめ大和五條に大和代官あり(支配高六萬餘石)大阪には香町(攝津河内攝津に於て七萬九千石)岡本町(攝津河内三國に於て七萬二千石)の兩所に代官あり、(無治要略其他)而して諸侯の配置は多く譜代小藩を以てし、山城河内の頼重氏(十萬二千石)大和郡山の松平氏(十五萬石)和泉岸和田の岡部氏(三萬三千石)攝津尼ヶ崎の松平氏(四萬石)山陽方面は丹波龜山の松平氏(五萬石)岡藤山の青山氏(六萬石)丹波宮津の松平氏(七萬石)山陽方面は播磨姫路に譜代の酒井氏(十五萬石)明石の松平氏(十五萬石)あり、これら譜代の間に更に小さき外様の小藩を以て存在せしめ大和には備前(水井氏一萬石)高取(植村氏二萬五千石)芝村(藤田氏一萬石)柳本(藤田氏一萬石)小泉(片桐氏一萬餘石)柳生(柳生氏一萬石)河内には丹南(高木氏一萬石)共山(北條氏一萬石)和泉伯太(渡邊氏一萬三千石)攝津高槻(水

譜代領

井氏三萬六千石)三田(九鬼氏三萬六千石)鹿田(青木氏一萬石)丹波福知山(杉木氏三萬二千石)國部(小田氏二萬六千石)綾部(九鬼氏一萬五千石)柏原(藤田氏二萬石)山家(谷氏一萬餘石)丹波篠山(京極氏一萬千餘石)田邊(牧野氏三萬五千石)但馬豐岡(京極氏一萬五千石)出石(柳石氏三萬石)播磨龍野(藤原氏五萬餘石)赤穂(森氏二萬石)三ヶ月(森氏一萬五千石)安志(小笠原氏)山崎(本多氏)林田(建部氏)三草(丹羽氏)小野(一柳氏)等は皆各一萬石で、これらの中其の一二を除いては他は悉く外様大名である。

社寺と宗教 近畿の地に於て殊に目立つものは由緒ある社寺の多いことである。彼の神代の昔、

伊弉諾、伊弉册の二尊、淡路に降臨したまひしの傳説は淡路に官幣大社伊弉諾神社を存し、建國の初め神武天皇は紀伊を経て都を大和に築きたまひ爾來歴代の帝都、畿内を出でず、偶々近江に都したまひしことあるも、そはしばらくにして復た畿内の地に復し、帝陵は一二の例外を除いて

官幣神社

は悉く此地方に存するを以て國家祭祀の對象たる神社も亦多く、此地方にあつて國幣社以上の神社五十、全國總數の三分の一弱を占め、九州の二十四、中部の二十三、關東の二十一、中國の十九、奥羽の十四、北陸の十一、四國の六に比して優ること多し、府縣社以下五千三百十九、境外無格社は比較的少く關東并に中國の各々千以上を有するに比して僅に其の半數五百二十七を有するに過ぎず、境外無格社の少きは偶々以て此地方の神社の由緒正しきを示す所以で、古來每歲

神祇官に勅して幣帛を奉り年穀を祈り、饑災を除かしたまひし二十二社は伊勢の神宮と近江の日吉とを除きては皆な畿内の地にありて石清水、賀茂、松尾、平野、朝荷、大原野、梅宮、吉田、祇園、北野、貴船の十一社は山城に、春日、大神、石上、大和、廣瀬、龍田、丹生の七社は大和に、住吉、廣田の二社は播磨にあり、皆な官幣大社として祀られて居るのである。寺院總數は一萬二千五百六十七、中にも他の地方に於て見る能はざる華嚴宗の、本山を大和奈良市の東大寺に有し、同縣下に三十二の寺院を有するあり、法相宗の、同縣生駒郡法隆寺に法隆寺同郡郡跡村に、藥師寺、同奈良市に興福寺等の大本山を有し、同縣下に三十二、京都府に十一の寺院を有するあり、これらは皆な千年前の昔に時めきし我が國最古の宗旨にして之れに次で我が國金佛宗門の先驅ともいふべき融通金佛宗の播磨東成郡平野に大本山ありて奈良縣に二百、大阪府に百五十二、京都府に六（其他滋賀縣に一、三重縣に一を有す）を存するありて共に古文明の面影を残留し、其の他の宗派も亦多く此地方に本山を有し、天台は山門、寺門共に大本山を近江に置くと雖も、京都を去る遠からず、眞言は古義高野山金剛峰寺の紀伊伊都郡にありて遠く畿内と離れず、仁和寺、大覺寺、勸修寺、神護寺、三寶院、隨心院並に泉涌寺の山城にあるあり、新義は紀伊那賀郡根來の大傳法院、大和磯城郡初瀬の長谷寺、山城京都の智積院あり、別に眞言律宗

各宗の本
山

門跡寺院

の本山四六寺は大和生駒郡伏見村にあり、淨土は京都東山なる知恩院を總本山とし、別に新羅谷金戒光明寺あり、四山派は光明、禪林、圓圓、誓願の四ヶ寺を本山とし共に山城にあり、眞宗は東西兩本願寺を初め佛光寺、眞正寺等の本山も亦京都にあり、禪（臨濟）は所謂五山の山城にあるあり、南禪寺を五山の上とし、天龍、相國、建仁、東福、大徳あり（外に五山の一に算せられし高壽寺ありしも今は廢滅す）而して別に臨濟宗中尤も多數の末寺を有する妙心寺あり、同じく禪に屬する黃蘗も亦大本山圓福寺を同國に有す、關東に於て唱道せられたる日蓮宗も本願寺の如き眞刹を同地に有するの外、本妙法華宗の本山たる本隆寺ありて一派を統率す。今試みに徳川時代に於て門跡と稱せられたるものを檢せんか、關東にありし輪王寺門跡（一萬三千石）を除きては多くは此地方にして、妙法院（千六百餘石）聖護院（千四百餘石）昭光院（千石）青蓮院（千三百餘石）曼殊院（七百餘石）毘沙門堂（千餘石）實相院（六百餘石）以上天台、仁和寺（千五百餘石）勸修寺（千餘石）圓融院（千石）大覺寺（千餘石）三寶院（三千九百餘石）隨心院（六百餘石）藥華光院（三百石）以上眞言、外に淨土の知恩院（千餘石）あり、眞宗は東西本願寺並に佛光寺眞正寺の門跡皆山城にあり、大和には一乘院（千四百餘石）大乘院（九百餘石）の法相宗に屬するあり、其他門跡と稱せらるゝは近江に天台の圓滿院（六百餘石）聖光院（五百餘石）

基督教

眞宗の陽光院(二十石)伊勢に高田御門跡といはる、専修寺(三百五十石)あるのみで殆ど大部分は近畿殊に京都にあるので、これ亦他地方に見られざる現象である。更に近年異常の發展を遂げたる神道天理教を見んか、こも亦其の根據地を大和の丹波市に有して全國數百萬の信徒を擁し、これら神佛二教の外、基督教も亦此地方に深き因縁を有し、足利氏の末、切支丹の渡來するや、我國最初の傳道者たるデヴェルも此地に來り、次で我國に入りしウイレラは京都にあつて専ら近畿地方を教化し、終に織田信長の信仰を得て永祿年間京都の四條坊門に南蠻寺なる一大殿堂を設けられ盛んに傳道を試みたので、其の後豊臣秀吉の切支丹禁制と共に此南蠻寺は毀たれ、次で徳川の代となりて禁制を勵行せられて其の跡を絶ちしも、維新後其の禁の弛むと共に開港場たる神戸、大阪並に京都の地に來りて漸次布教を試みしが、明治七年に至り新島襄米國より歸りて京都の有志と相計り、翌八年同志社を京都に組織し米國宣教師デビス等の後援を得て同志英學校を設立し、大に基督教主義を鼓吹し、日本基督教界の一大勢力となつて居るのも聞却することは出来ない。されど此地方の精神界を支配せるは兩本願寺を中心とする眞宗で寺院數實に三千六百十三之れに次ぐは同じく他力宗なる淨土宗二千五百五十三(外に時宗三百九十九あり)平安朝の二大宗教たりし天台は四百三十二、眞言は二千三百七十二、鎌倉より室町時代にかけて勢ひを逞

寺院數

うせし禪は臨濟一千百六十八、曹洞一千百五十六(外に黃蘗百四十九)關東に於て興起したる日蓮も亦七百〇八を有し、基督教は百九十八、中に就き同志社に屬する組合教會の四十三を最多とし、之れに次ぐ聖公會三十九、日本基督教會三十七、ソクダスト教會十七、浸禮教會十六、天主教は十四、ヘリストス正教は七、救世軍團、其他十九を算せられて居るのである。

一宮と國分寺

例によりて此地方に於ける一ノ宮を擧んか、山城は加茂上社(愛宕郡上鴨村)同下社(同下鴨村)大和は三輪(磯城郡三輪村)河内は枚岡(中河内郡枚岡村)和泉は大鳥(泉北郡風村)攝津は住吉(住吉郡住吉村)紀伊は日前宮(海草郡宮村)淡路は伊弉諾神社(彦名郡彦名村)曾な官幣大社に列し、播磨は伊弉諾社(美作郡神戶村)丹波は出雲神社(南桑田郡千歲村)丹波は國守神社(與謝郡府中村)但馬は出石神社(出石郡神美村)皆な國幣社に列して居る。

國分寺は山城、相樂郡瓦原村、大和は奈良市の東大寺、河内は南河内郡國分村、和泉は泉北郡南池田村、攝津は西成郡豐崎村、紀伊は那賀郡上野田村、淡路は三原郡市村、丹波は南桑田郡千歲村、丹波は與謝郡府中、但馬は城崎郡日高村、播磨は飾磨郡御園野村にあつた、此の中丹波但馬の二は確然たるのではなく、推定に屬するのであるといふ。

近畿の發達 近畿の關東に誇り得べきものは曾に其の歴史の古きのみならず、又實に天然の風光の皆れに優るものがある。山紫水明を以て稱せらるる京都、七堂伽藍八重櫻を以て稱せらるる、奈良の一大公園たるは云はずもがな、古蹟と名勝に富む山城大和を別にするも瀬戸内海の風景は頗

風景の概

摩（播磨）明石（播磨）の白砂青松となり、松に名高き尾上高砂、海を隔て、通ふ千島の淡路島南しては播津の佳吉、更に南しては紀伊の和歌浦、海岸を傳うて北すれば山嶺近く海に迫る熊野の奇勝、北の方日本海に出づれば日本三景の一たる丹後の天の橋立あり、南するも、北するも、西するも、東するも、旅客の吟情を催さしむるもの多き、よし壯大の觀を欠くとも、到底茫々たる平原に闊する關東の及ぶべき所でない。關西人の優雅の氣質は此天然の風景も幾分の影響を持つて居るのである。併し天然が關西人に與ふる恩恵は嘗だ此の風光の明媚のみでなく、西に四國中國并に九州を有し、瀬戸内海の航路は此處を起點として諸方に開かるゝを以て、船舶の來往は東京灣の僅に房總若くは伊豆七島に向ふ航路を有するの比にあらず。従つて商業頗る發達にして關東平原の東京横濱の二大市を有するの外、他の都市の人口非常に懸隔するに反し、これには東京に次ぐの大都市たる大阪（人口三十萬を初め并に神戸の人口十萬を超過するあり、次で和歌山市（人口七萬七千）堺市（同六萬七千）奈良市（同四萬）姫路市（同四萬）あり、未だ市を稱せざるも山城の伏見（同三萬）播津の尼ヶ崎（同二萬五千）西ノ宮（同二萬）岸和田（同二萬二千）播磨の明石（同二萬七千）等あり其の他沿道小郡邑多く、其の間を聯接する汽車は東海道線の山城播津播磨を貫通し、關西線の大和より播津に入れるもの、外京都より木津を経て奈良に通ずる

交通の利

奈良線、木津片町間の片町線、奈良高田間の櫻井線、王寺和歌山市間の和歌山線、京都より丹波を經る山陰線、大阪より丹波、舞鶴に向ふ坂鶴線、播磨より但馬に入る播磨線、之れに加ふるに京都大阪間、大阪神戸間、大阪和歌山間、大阪奈良間等を主要なるものとして名所といふ名所、賈蹟といふ舊蹟、郡邑といふ郡邑へは電車縱横に走りて交通の便大に開け、旅客の往來、物貨の集散を助け、商業に機敏なるは實に關東人をして後へに瞭若たらしむるものがあるのである。併しこは主として瀬戸内海に沿へる地方をいふたので、山を以て圍まれたる國々并に太平洋に向へる紀伊、日本海に瀕せる山陰地方は産業に於て人情に於て、又別殊の趣きがある。そは其の國々の條下で一瞥することとしやう。

關西の富

關西由來富多し、貴族院議員多額納税者として互選權を有するものは七十五名にして關東の百〇四名九州の百〇五名、奥羽の九十名、四國の六十名、東海の五十九名に及ばず、中國と同數にして東山の四十五名なるに傳るのみなるも、其の直税納税額は七十萬千餘圓にして一人平均九千四百五十四圓、實に全國の第一位を占め、之れに次ぐは北陸の一人平均六千九百四十一圓、關東の一人平均五千五百〇六圓にして他は殆んど關西の半額にして、即ち奥羽同四千五百六十二圓、東山同三千二百四十三圓、東海同四千五百五十五圓、中國同四千六百八十二圓、四國同四千三百三十三圓、九州同三千五百一圓である。此近畿の内納税額の最も多きは大阪府の（三十二萬圓）にして之れに次ぐは兵庫縣（二十二萬七千圓）京都府は頗る下りて（六萬四千圓）奈良縣は其の次位（五萬一千圓）和歌山縣は更に其の次位（四萬五千圓）

を示されて居る。(第三十四統計年鑑)以て關西富力の中心點を見ることが出来る。多額納税者此の如く多しとて直に關西の富みは關東に優れりといふことが出来ない。之れを衆議院議員選舉有権者の數に見るに關東は人口千に付き二十九人、一六の割にして關西は二十九人〇二の割なれば關東稍々多く、東山は三七、東海は三四、北陸は三二(同書)で共に關西に優つて居るから關西に富豪多しといひ得べきも、富力必ずしも優れりとはいへない。

第二章 山城

山背

京都の令昔 京都は千年の奇都、其の在る所の山城は初め山背又山代といひ、大倭葛木山の峰にましませし賀茂健甕身命の山代國岡田の賀茂に遷りたまひて、山代川と葛野川との會する所に至り、迤かに加茂川を見て狭少なりと雖も、石河清川あり、名けて瀬見の小河と號し彼の河上、久我の國の北山の基に在す(山城風土記)とあり、山代川は今の木津川、葛野川は今の桂川にして、久我の國は今の愛宕郡西賀茂の邊にして其の山代又山背と呼ばれし地方は木津一帯の流域なりしならんかといふ。初めて此國に皇居を築められしは磯彥天皇の簡城の宮(今綴喜郡)にして其後弟國(今乙訓郡)に遷りたまひ、桓武天皇の遷都を全てたまふや、初めは地を長岡(乙訓郡)に相したまひ、更に延暦十二年を以て勅して今の京都なる葛野郡宇多村の地を卜したまひしを見れば此國も大和に近き南方より漸次開け來りしを見るべく、畿都の議決して遷宮職を定め、且つ軍駕しばし行幸ありて親しく工事を督したまひ、翌十三年十月廿二日鹵簿を備へて長岡より此新都に遷幸したまひ、一月八日勅して「此國は山河襟帯、自然に城を成す、斯の形勝によりて新

平安京

を制すべし、宜しく山背國を山城國となすべし、又、子來の民謡歌の輩、異口同辭に號して平安京といふ、今宜しく之れに従ふべし」と。かくて其後も工事を進め十年を経過した延暦二十四年に至つて完全に竣功したのであるから其の規模の大なりしを想像することが出来る。即ち平安京は桂川と鴨川との中間に位し、南北を經とし、中央に朱雀大路を通じて東を左京とし、西を右京といひ、朱雀大路の南に盡くる所に羅生門を置き、これを京の正門とし、これを通じて皇居に入らんとする所に朱雀門あり、御路の經たるもの三十二、緯を爲すもの三十八、八戸を行とし、四行を町とし、四町を保とし、四保を坊と爲し、四坊を條とし、一條より九條に至り、左右兩京を合せて七十二坊三百保、一千二百十六町、區劃井然として素れず、南北一里十六町、東西一里十二町、内に大内裏あり、面積約五十萬坪を有して居つたので實に堂々たるものであつた。後醍醐天皇百六十六年を経て村上天皇の天徳四年禁裏炎上し、翌應和元年に再築せられたが最早昔日の規模を見ることは出来ず、其頃より右京は漸次寂寥となり、平安朝の末、盜賊横行し、南都北嶺の僧徒もしばしば侵入し、次で保元平治の亂となり、京師は腥風吹き荒みて、禁門も馬蹄の泥に穢され、累年廢墟絶えず、加ふるに平清盛、都を攝津の福原（今の神戸市）に遷して宮殿を撤し屋舎を毀ちなどせしを以て家は荒れ地は高となりて、

京の盛衰

古き都を來て見れば、

淺茅が原とぞなりにける

月の光は限なくて、

秋風のみぞ身にはしむ（後醍醐天皇實定）

と嘆はしむるに至つた。幸に關原の都は半壊ならずして京師に復したれど、續いて源平二氏の戦ひとなり、京師の地復た大に荒らされ、政權頼朝に歸し、次で北條氏兩六波羅にあつて京師を警備し、秩序漸く復せんとせしが、兵火起り此地はまたもや擾亂の巻となり、遂に足利氏北條氏に代り専横その極に達し、空町に邸を構へ、驕奢を事として市民の艱難を顧みず、續いて應仁の亂となつて花の都は灰燼に歸し、

古にも治亂興亡のたらひありといへども、應仁の一變は佛法、王法ともに破滅し、諸宗皆な悉く絶えはてること感慨に堪へず、飯尾彦六左衛門、一首の歌を咏じける

汝やしる都は野邊の夕雲雀

あがるを見ても落つる涙を（應仁記）

と。皇室の式微此時より甚しきはなく、京都頼朝も亦此時より甚しきはない、正親町天皇、密に輪旨を織田信長に賜ひて興復の事を託したまひ、信長、不孝、中途にして棄するや、豊臣秀吉、遺志を繼ぎて之れを修理し、徳川氏の世となるに及びて、家康新に二條城を築き且つ三十七藩の

諸侯に譯して新に皇居造營の工を起し、角倉了以をして高瀬川を開鑿して鴨川の水を引きて船を伏見に置せしめ、京都は漸次版圖に赴き、所謂三ヶの津の隣一にして禁裏所在の地たるの面目を發揮するに至りしが、不幸、天明八年の大火に殆ど全市を烏有に歸せしめ焼失民家十八萬三千を算せしむるに至りしも、幾ばくもなくして恢復し、其の後幕末に多少の禍亂を受けしも、復た昔日の如き頓廢に陥らず、明治元年車駕東遷し、帝都は東京に定められしも、永く千年の帝都たりし舊儀を重んじ、皇宮典範によりて即位の大禮并に大嘗祭は此地に行はるゝことに定められ、且つ關西の學府たる京都帝國大學は此地に置かれて學藝の一中心たると共に千年の長き歴史によつて醜聞せられたる美術の遺叢として範を全國に垂れ、市勢日に振ひ、先きに東山一帯の地を市に編入し、近く北山一帯の地并に古の右京に屬せし方面をも編入して危然たる一大都市となつたのである。

京都市

東郡人 千有餘年の舊都は自ら時代を代表せる文化を遺し、畿都の骨に創設せられたる井然たる街衢は他の及ばざる所、其東北には皇城の東門を鎮護する比叡山の屹立するあり、それに續きて東山三十六峰、其麓を點綴する祇園清水等は都の南に高く五重の塔を現はす東寺と共に王朝文明の名残を承し、五山の禪刹は室町將軍の夢業を點想せしめ、耳塚并に大佛は豐太閤の骨を偲ばし

名譽の中

め、市中に聳ゆる東西兩本願寺の近代建築の粹を集めて全國信徒渴仰の府となれる等、一草一木の末まで歴史を語り、加ふるに久しく文化の中心となり、徳川氏の世には實力を東に奪へる代りに名譽を此地に遺し、諸藝は多く家元を此地に有し、明經道は、船橋。紀傳道は高辻、東坊城、唐橋。鄂曲は宇多源氏。筆道は松木、持明院。園香は三條西、立花は園。蹴鞠は難波、飛鳥井。書は六角。和歌は冷泉、鳥丸。庖刀は四條。衣紋は山科、高倉。陰陽道は土御門。相撲は五條。卜家は吉田と諸家いづれも師範家を標榜し(近世世相)其の他の諸藝も皆本源地を有し、商家も亦元祖又は本舖を標榜して世々相傳へしを以て何事も古風を賞び系統を重んじ、社寺も其縁起を誇り、町家も其の家柄を賞び、久しく保守的氣分に満ちて居つたのである。此氣分は市民の氣風に影響して老成素實の風はあるが、勇往邁進の氣に乏しく小心翼翼として貯蓄を之れ念とする傾きがある。志賀重昂氏いふ「年少の書生が事物に屑々せず、金錢を塵芥の如くに一擲するは、内に邁往邁取の氣が物々と旺んたる故である、邁往邁取の氣象が疑ければ儲蓄の念生じ、人益々老ゆれば益々此念を増進し、事物に屑々して小心翼翼となるものである。個人此の如しとせば、個人の集會せる大都會なるものも、一生物機關にして生命あるものなれば、亦た此の如くならざるべからず、江戸(東京)は開闢たる關東平原の上に武人の開きたる都會にして其の生命未だ三百

其氣風

公卿の位
例れ

二十年に過ぎず、其間武人貴生の異質となり、他の京都の千百年を給せる老都とは大に異なるべき筈なり」(世界山本國説)と云はれた通り、關東人の感罵して齊高漢（さいこうまんと）となすもの亦故なきではない。併し、之れには尙ほ一つの理由がある、幕府は唯だ名譽を興へて實力を興へざりしを以て朝には堂々衣冠を整へて儀容厳しく禁庭に入るの月輪雲客も其の食味は至つて少く、所謂「公卿の位例れ」で五攝家の尊を以てしても旗本の大なるに及ばざる程であるから下級の公卿方は其の日の衣食にも窮するほどにて、夕には歌留多を貼り、楊子を削りて之れを補うたほどであるから一般市民も亦質素を旨とするに至つたので、新たに發展したる關東の「青越しの鏡を持たぬ」を誇つたのとは稍事情境遇を異にするのである。されば其の家の構へも關東流の盛んに日光を受くる快潤なるとは趣を異にし、絨緞色に塗りたる細き格子造り、日光を受くること少く、間口よりも奥行を深くし、表口より土間長く奥に通じて其の庭厨の如きは主として其の土間に立つて働くやうになつて居る。外に關東には多く見ざる表口僅に半間ばかりにて踏次長く十間餘も細く入りて中に立派な住宅を有するものありて殆んど露道の如き感を懐かしむ。黒頭巾氏いふ「此の薄暗く奥深き露道式の家屋は住民をして自ら冷靜に且つ保守的ならしむるにあらすや。住所の高明なるものは自ら人をして氣分高朗に、活潑に、而して冒險的に、而して贅澤豪華ならしむ。京都人は約やかに、

家の構へ

着例れ

・靜かに、小心に保守的なり、彼等家の高明を嫌ふか、將た薄暗き家則ち京都人を造るか(新人國記)と。購するものはいふ、京都の間口より奥行を長くし、且つ密なる格子を以て外より内を窺ひ難からしむるに至りしは、古來幾度か戦亂の巷となりて民家しばしば、掠奪の厄に遇ひしを以て深く藏して外に現はれざるやうに築いた遺風であると、其の説の當否は遽かに判じ難きも、實際此の家屋の構造が幾分京都人の氣風を示すものなることは否むことが出来ない。家居の此の如きに似ず、京都人の衣服に於て外觀を拘ふことは、豫想外で、所謂「京の着例れ」特に婦人の服裝、華奢を極め、花見時などに友樂縮緬の裾纏してしやなり／＼と行く有様は、眞に畫のやうで關東の如き殺風景なものではないが、表に綺羅を飾る割りに細袴調着の類を疎末にし、江戸ツ子の表よりも裏を立派にして私かに通を誇るの類とは其の趣を異にし、且つ其の衣服を大切にすることも亦關東人の思ひ及ばぬ所で、にも京都人の氣風は現はれて居る。若し其れ其の食物に就ては海に遠きを以て魚類に乏しく多く乾物干物を用ひ鮮魚としては淡水に住む鮎と鰻とを以て無上の珍味とするほどなれど山には松茸あり、高には水菜あり、調理の法も古くより發達したれど、質素の風は花見遊山の行厨にも巻箱の重箱に握り飯を容るゝほどにて、日常の風物も想像し得べく特に毎朝粥を吸るの習慣は殆んど各階級を通じて行はれて、江戸ツ子をして

江戸ア子
と京都人

近畿地方

一四六

木高水清食物種。人々飾外内證。牛糞路達大津。

茶粥皆向叡山飛。(太平曲)

と罵らしめ、又

常叩石橋如涙。畢竟皆爲錢難無。勝手吝吝總眼目。

上達追從難許。帶占鶴絨買不切。鉢盂南京出煎枯。

最情歴々御見物。各抱擬飯出花都。(同書)

と嘲らしむるに至る關東者は斯く京都を罵るといへども如何にするも嘲り難きは京の風光である。

京の四季

春は花、いさ見にごんせ東山、色香争ふ夜櫻や、うかれうかれて粹も不粹も物がたい、二本さしても柔らかう、紙圍豆腐の二間茶屋、みそぎぞ夏はうちつれて、河原につたふ夕涼み、よい／＼よいやす。

眞葛ヶ原にそよ／＼と秋は色ます華頂山、時雨をいとふからかさの濡れて紅葉の長樂寺、おもひぞつもる丸山に、今朝も来て見る雪見酒そしてやぐらのさし向ひ、よい／＼よいやす。

(京の四季)

京の雨

と、此の風景と此の情調とは京都の獨り擅にする所である。若し其れ四時の遊樂の地を擧げんか右に擧げたる東山一帯の地の外、北には金閣、銀閣さては若王寺、永觀堂、加茂の川上には札の森の納涼地あり、南には大佛、三十三間堂、さては紅葉に名高き通天橋(東福寺)西には春は花秋は紅葉、夏の納涼、冬の雪、四時の勝、他に冠たる嵐峽あり。續いて平野、御室(仁和寺)も亦櫻を以て知られ、高尾、栢尾、梅尾は三尾の紅葉として其名現はれ、東西南北悉く名勝を以て包圍せられ加ふるに南方稍、開けたれど、殆ど四面山にて圍まれたるを以て暴風少く、降る雨さへもしめやかに、東京に於て見る如く横に降りそゞごとなく、且つ地質堅牢にして泥濘少く、落花静かに傘にかゝりて低き足駄も路行く人の足を汚さず。關東人をして「京にては雨天も合羽を着ず、合羽を着れば人必ず遠行するとおもへりこれ雨の横に降らず、まつ直ぐに降る故なり」(關旅漫録)と記せしめたるほどである。風景此の如くにして自然の物勝かなる此の如きも亦京都人をして優雅の氣風を養はしめしに多大の關係を有するのである。「關旅漫録」の著者瀧澤馬琴は其の景と人とを叙して、

馬琴の京
都風

三條の橋上より頭をめぐらして四方をのぞみ見れば綠山高く聳えて尖らず加茂川長く流れて水きよらかなり。人物亦柔和にして路をゆくもの争論せず、家にあるもの人を罵らず、上國の風

俗事々物々自然に備る。予江戸に生れて三十六年、今年はじめて京師に遊で暫時俗賜を洗ひぬと、京都は實に一代の文豪をして此の讃辭を呈せしむるの資格を有して居るのである。「阿書」又いふ、

京によきもの三ツ、女子、加茂川の水、寺社。あしきもの三ツ、人氣の吝嗇、料理、舟便。たしなきもの五ツ、魚類、物もらひ、よきせんじ茶、よきたばこ、實ある妓女。

と、二鐘亭牛山の「見た京物語」にいふ、
多きものは寺、女、雪踏直し、少きものは侍、酒屋、けんどん、願人、生酔、鳶、鳥、駈出し、と、これらは皆昔の京に就いていへるもの、今や美術工藝、非常に發達して昔日の夢を破り、流水の便開けて琵琶湖の水は京の水に混じ、交通頻繁にして、市内も亦電車縱横に走るを以て京都人の氣風も次第に變化せられつゝあるが、尙昔の氣分の此保守的なる京都の地に漂うて居るのを否むことは出来ない。例の「人國記」の山城を評して「當國の風俗は、男女ともに其の詞自ら清濁分り善くて、たとへば流水の濁むことなくして、いさぎよきが如し、風俗は其所の水土にしたがふものなり。此國の水の潔きこと他國にならぶことなし。故に人の膚、滑かにて婦人の容色殊に尋常なり、然れども武士の風儀は柔か過ぎて宜しからず。されども婦人脱兎の勇といへば強

山城人

ちに落しむべからず、古來王城のゆたかなる國故に、おのづから心ゆるまりて知らず識らずに奢美にすぎ實義少き國なり、これに依て人と交るに背ふこと多く、又約を變ずること多し、輕薄の意なる故とぞ」といへる長所短所ともに尙幾分の面影を遺して關東の男性的なるに對して稍女性的なる傾きあるを免れない。「東男（とうなん）に京女（きょうにょ）」の語は移して以て關東の自然と京都の自然、さては兩地の人情風俗をも對比したものと見ることが出来る。

東男に京女

東の名物 關東を以て武を代表せしむれば京都は文である。武は野趣を免れずして文には優美がある。美なる京都は又實に美術の國として天下に卓絶して居るので其の染物並に陶磁器の名は精巧と鮮麗とを以て海外にまで知れ渡つて居るのである。王朝の昔、早く織部司なるものが置かれて左京北邊第三坊にあり、其外部に織部町があつて絹、綾其の他の類を織つて朝廷の用に供したので中古戦亂相繼ぎ斯業も次第に衰へ、殊に應仁の大亂に遇うて織工も四方に離散し、僅に京北白雲村に其の面影を遺して居つたのを豊臣秀吉之れを新在家の地に移して保護奨励を與へしかば斯業頓に再興し、且つ當時海外の交通開け其の機織の法も亦我が國に傳はり、弘治中、井關宗麟なるもの始めて紋織の法を行ひ、之れを蓮池宗和に傳へ、葡萄牙、和蘭陀等の製絨渡來と共に斯業は次第に革新せられ、徳川氏の初めには紋綾唐織、浮織、羽二重紋紗、大和錦、蜀紅錦、金襴、

西陣織

友禪染

綾子、琥珀織、御召縮緬等を初め毛宇留、天鷲羅織、紗の如き西陣織物をも産出するに至り、機織區域は漸次西北に移りて、應仁の亂に山名宗全の陣地たりし西陣の故地を占め、太平三百年幕府又た之れに特別保護を興へ斯業爲めに發達して、終に西陣織物の名を擅にし、(京都府誌)其の後多少の變遷ありしも、今や一年産額二千二百二十五萬餘圓(大正元年)を計上せらるゝに至つたのである。西陣の織物と並稱せらるゝは一名鴨川染と云はるゝ友禪染にて花鳥山水其他の模様を染め出すものにて古く妙心寺の僧向禪の創意に出づると傳へられ、もとは楊子糊を以て輪廓を隈取り筆刷毛を用ひて之れに適合せる彩色を施す一種の繪畫の如きものなりしも明治十三年の頃より色糊の法發明せられて人目を眩する麗麗なるものを産出し、其の美を喧傳せられて居る。若し其れ陶磁器に至つては聖武天皇の朝、僧行基の勅を奉りて山城國愛宕郡清閑寺村に窯を築きて土器を製せしに初り、今の茶碗坂は其の遺蹟なりと傳ふるも其の後久しく廢絶したるを後桃開天皇の寶徳年間小松谷清閑寺村の工人音羽九郎右衛門なるもの此の遺蹟を發見し、窯を深草の地に移して陶器を製せしも未だ堅牢なるものを造るに至らず、下つて永正年間評谷の工人元吉なるもの深草の古法に改良を加へ粘薬の法を發明し其の窯を清水に移す。これを清水焼と稱すべきか、此の時に當りて朝鮮人阿末夜なるもの歸化して京都に住し、佐々木某に養はれて名を宗慶と稱し

陶磁器

七寶

人形扇等

一種の陶器を造りしが、其後妻某、尼となりて夫の法を傳習して製陶に従事し、其の男、長祐、千利休の資匠によりて茶器を造り、天正十六年、豐臣秀吉、之れに樂字の金印を興へたるより長祐自ら製する所の陶器に此金印を押して樂焼と名く(京都府誌)。寛永年間に至りて尾張瀬戸の陶工三文屋九右衛門なるもの京都に來りて三條通り栗田の里に住し専ら茶器を造り、栗田焼の風を爲し、其の子庄左衛門、助右衛門、並に徒弟徳右衛門共に此の業に従事し栗田青蓮院宮及び徳川幕府の用品を製し來りしが、後、師家は廢絶して徳右衛門の子孫たる健屋茂兵衛其業を繼ぎ、其の製造陶器の畫様の錦色輝き尤るの意を以て錦光山と號し、今も尙ほ輝いて居る。これらを外にして京都の特産たるものに七寶あり、慶長年間金工平田道仁の徳川家康の命を受け朝鮮人より其の製法を習得せしに初り金色燦然美術品として受賞せらるゝあり、其の他古々平安焚都の時に鍛冶司を置きて冶金の事を司らしめたまひしに淵源すと傳へらるゝ鑄冶は龍文堂の鐵瓶、みすや針となつて世に推獎せられ、昔、殿上人の用に供するがために進歩したる京紅、京白粉、鬢付等の化粧品は、鎌平の節句と共に發達したる京人形と共に今も都の名物として、喜ばれ、建文年間御影堂の祐寛阿闍梨の守扇と稱して官廷に奉り壽久扇の名を得しに初るといふ御影堂の扇は寛文年間深草の元政上人の創意に基づくといはるゝ深草團扇と共に今も世に珍藏されて居る。京都の名

産は悉く美術的にして又それ／＼由緒あり歴史ある所に舊都の面影を傳へて居る。

くさ／＼の食物

京の名物はこれのみではない。くさ／＼の食料品にも亦多く由緒あり、因縁ありて、清和天皇の御靈會を神樂西に修したまひし時に始るといふ御靈神社の唐板煎餅、後醍醐天皇の御用命を蒙りて精製したりと傳へらるゝ求麻呂布、歷代懸鐘の御用命を受けしといふ味増松風、道喜の粽、大佛妙法院の宮の御用命を受けたる大佛餅、粟田吉野院の宮の食でたまひしと云はるゝ於多羅豆、大原三千院の御靈團大佛の御製せられたりといふ大原の栗漬、嵯峨天龍寺の御夢遠國餅の頃より製せりと云はるゝ天龍寺納豆、大徳寺僧徒の食用に供せしと云はるゝ大徳寺納豆、北野眞盛寺の尼の權越に配りしに初ると云はるゝ眞盛豆、祇園會の御酒餘の所在地より賣り出して終に菓子の名となれる洲濱、元祿の昔赤穂浪士原重右衛門が時の名醫山脇道三に製法を承じて賣り出せる香煎、其他聖徳院の八ッ橋、虎屋の饅頭、祇園のお伏（外に紀伊郡伏見の鞍河屋の平栗、等古より宣傳せられ、近世に玉りて京都名物に算せらるゝ菓の千枚漬、昔は賀茂の社家にて用ひしと云はるゝ煎茶茶漬、鴨川の瀬に住む「つこり」といへる小魚を佃煮にせし「當知らず」等（京都府誌）皆な此の産物を訪るゝものゝ土産となるものである。

花街鞠巻 花柳のことは士君子の筆にするを恥る所であるが、京都を語つては之れを逸すること出来ぬ。想ふに平安の昔、官人が櫻かざして今日も暮らしつる頃より和歌を以て思ひを寄せられし殿上の戀愛は古き物語にも示さるゝ通りで、従つて諸國の美女も此都に集り、粉黛を凝らして歌樂の興を助け鳥羽天皇の頃からは歌舞を以て立つ白拍子なるものも出で、平家全盛の頃に

京の女

は平清盛の寵を蒙つた祇王、祇女の如きあつて「平家物語」に「あなめでたの祇王御前の幸や、同じ遊女とならば」なぞあり、次で加賀國より上りて二女の寵を奪ひしと云はるゝ佛御前、神泉苑に雨を乞ひし時、百人の白拍子と共に今様を舞ひ、後に源義經に愛せられた靜御前（白拍子磯の禪司の娘）承久の亂の禍根を造りしと云はるゝ龜菊などがあり、これらは色を霽く娼婦ではなかつたであらうが、鎌倉の初め源頼朝は遊君別當なる官職を置いて諸國の遊君の争ひを聴かしたほどであつたから此種類のものゝ都邑に蔓延して居つたことは想像せらるゝ、其後京都は數度の戦亂に歌舞のことも廢り、都人の淪落して其の婦女の人買ひの手に褫りしこともあり、諸國の人に入り込みて旅情を慰むる婦女を求めたこともあつて娼婦の數は自然に生じ、遊女屋らしいものも出来、又「甘露寺職人書」に

宵の間はえりあまざるゝ立君の

五條わたりの月ひとり見る

鳥居の山

と云はれたる立君、辻君の類も生じたであらうが、豊臣秀吉の京都の市制を恢復するや、市内各所に散在する遊女屋を萬里小路柳の馬場の邊に集め一區劃を立てゝ遊女町とし、其の名を柳町といたが、秀吉薨じて後、之れを空町六條に移して三筋町といひ、更に寛永十八年、京都所司代

板倉重宗、其の洛中にあるを風紀に害ありとし、都の片隅なる朱雀野に移された、それが今の鳥原遊廓である、幕府は之れを公認の遊廓とし、寶暦十二年を以て洛中茶屋總年寄役を鳥原に置き各所に散在せる私娼を禁じしば、令を下して私娼を捕へて鳥原に送りて廓清を計りしが、古くより祇園神社參詣の人々の休憩の爲めに設けられたる茶店の後には酒肴をも供し茶立女、茶汲女とて客に侍するものを置き、享保十七年、附近なる大和橋架替工事の時、其の費用を負担のため茶屋株三十株を作りて之れに充て、未だ遊所町としてこそ許されなかつたれ殆んど公許の遊戯場となつたが寛政二年に至り、鳥原のみにては京洛の繁榮に伴はずとし、右祇園の外、二條、七條、北野の四ヶ所を公許し、一ヶ所遊樓二十戸、遊女三百人を限りとし且つ一整に暖簾と軒燈を掲げ、祇園は榮、二條は東、七條は家、北野は壽の字を附して正業者と區別せしめ、尙一定の口錢を徴して鳥原に與へ其の特權を維持せしめしが、天保十二年關老水野越前守は所司代牧野備前守をして此の四ヶ所の營業を禁じて一時鳥原に合併せしめしも、嘉永四年京都潤澤の名の下に之れを復し、其の頃より國事多端を加へ四方の志士此地に入り込み、各藩よりの往來も頻繁となつて遊廓は非常の隆盛を極め、京都の花街柳巷は維新情史の主要部分を占むるに至つたが、明治の初め車駕東幸の後、京都の地領に寂寥を極めしを以て之れが挽回策として官民相計り明治五年、

遊廓

都踊

御苑内に大博覽會を開くや、各遊廓に驚恐して歌舞を以て客を惹かしめんとし祇園の都踊、先斗町の鴨川筋の如きも、此時より初り、京美人の粹を集め、歌曲の妙を盡くし、今も花の都の一名物として宣傳せらるゝのである。其の最初の唱歌は

都踊 十二調 榎村正直作

神風の、聞く地球の隅々迄も、わけて都は明らけく、治まる年のいつ、めは、いよむつましく七重八重、けふ九重に咲花の、彌生を開く初めにて、十重はたへとも群談ふ、名にし八坂のまが玉揃へ、花観はしき朝霞み、あつき情に薄化粧、何のかあらん瓦はいやよ、たまのお出の異邦人に、光り輝やく初日の出、見せて雲霞のちんがりしやんと、末の末迄とけきに舞り、中に優しきおほこは呑み、含む雲霞に愛もつ枝を、かざし並へて東方紅雲霞、大日の本といふべから、紙の園ふに遊ぶ夜を、花にあしたを忘れてや、設ども遊さぬめでたき御世の、あらたに進む酒樓、よいや洋洲あし元さへも、よろ／＼めきし歌羅巴、さらものとかや天地の、亞米利加因る日和ぐせ、轟らぬ御世の花盛り、すこしは濡れて亞弗利加も、香に匂ふなる花吹雪、人の山見る博覽會、おちな／＼撰太利霞、孰れもお揃ひおめでたい、深く智識の魅に、その支那かたちゆる／＼と、豊かに並ぶひと踊り、はやし揃つて十二律、あはす調子はみくに振ひかる一越上無てふ、神仙舞津舞頭でふ黄金舞臺と續きては、双調下無舞調、拍子揃へてヒイト、り、がんは平調金調、花を見るなら祇園町、情は八坂新地振、お國みや京土讃、めつたにひははとりが鳴く、東明にまだ負けぬ、花の都の京女郎、一夜に千代の敷重ね、物敷いはぬ其の花山吹の花の敷、やなぎ櫻の實としつ、まこと鼓べを花鼓べ、色より香より信實を洗ひあげたる水上は、清き流れをくめば尙、

水も渡らざぬ花見風、かぜもとはさぬたまの節の、君のながめに雪月花。

太夫の道中

今も花吹雪匂ふ陽春の候、毎年新らしき歌曲、新らしき衣裳に工夫を凝らして行はれて居るし。前掲鳥原遊廓には太夫の道中なるものがある。六尺男が妓の定紋打った豪付きの箱提灯を持つて先きに立ち、太夫は丈け高の駒下駄を穿いて是を八文字に踏みながら綾歩き、番頭新造、振袖新造并に赤などいふもの之れに従ひ、若者の一人長柄の傘をさし掛けて歩くのもとは江戸吉原に始つたといふが、鳥原では今も行はれて居る。前掲鳥原祇園等の外、先斗町、宮川町、七條新地等を生じた貸座敷總數一千六百五十四、藝妓數一千三百七十八、娼妓數二千五百三十、大正二年中に於ける遊客數九十一萬六千二十三、其の費消金額二百六十七萬三千六百八十四(京都市誌)と算せらるゝの盛況を呈して居るので其の間接直接に風俗に影響し來る所決して尠少ではない。

藝妓の道中

京の芝居

演劇も亦一帯總說に於て述べし如く此地に初り豊原公の時四條河原に歌舞伎興行を爲し、其後四條に六ヶ所の芝居立ちしが、今は兩河原のみ無に名残を止め、其の興行も元祿の頃には浮世唄作者として劇作家を兼ねたる近松門左衛門と三ヶ津の喜多川と時を隔りして此地に起り劇界の覇地たりしも其後演劇の中心は大坂と江戸とに移りて、京は主として大坂俳優の活動地となつて居る。

牛頭天王

藝園會 美しき京都の情調を味はしむるものは祇園會の神事である。社殿は京都繁華の中心たる四條通りの東端京都花街の最も賑はしき祇園新地を下瞰し、後へに東山の翠微を負ふ所にある。

今官幣大社に列して中央に素戔鳴尊、西殿に稻田姫、東殿に八王子を祀つて居るが、古來は神佛混淆にて兼ねては陰陽道の精神をも混じたる牛頭天王を祀れるにて、牛頭とは「摩羅經」に摩羅耶山、摩羅香を出す、名けて牛頭といふとあり、此摩羅は能く熱病を治し風腫を去るより此山の神徳を表して之を牛頭天王とし、「佛說我密心點如意陀羅尼經」には凡そ天王に十種の反身ありとて其の中に牛頭天王、疫病神王等の名を挙げ、又「天羽星秘密儀軌」に「牛頭天王、病魔を縛撃し、疫癘を掃除す」とのことあるによりて疫病の神とし(牛頭天王傳)。古傳眞備の傳へしといはる、「置良内傳」には「天竺吉祥天の王舍城の王を而貴帝と號す、帝釋天に事へて諸星に探題たり、娑婆世界に下りて牛頭天王と號す」といひて之れを天道神とし、之れを素戔鳴尊とし、稻田姫を藏徳神、八王子を八將軍に配し(一巻六六并に一二五頁参照)。聖武天皇の天平五年吉備公の唐より歸るの日、播磨國廣峰に祀りしを、貞觀十一年、僧圓如、神託を受けて之れを山城國八坂郷なる感神院に移し、同十八年、藤原基經、感驗に感じて齋宇を築ちて精舎を造營し(古神根元抄)。其の天竺の須達長者が耶宅を精舎にしたる祇園精舎の故事に因み、又此神、祇園精舎を守護したまふといふに基き之れを祇園と名けたので、其の年、疫病流行せしかば之れを疫神の祟りとし卜部日良賈なるもの京中の男女を率ゐて六月七日と十四日とに疫神を神泉苑に送る御靈會を修し、

鉦と山車

翌年も之れを行ひしより此祭事は始り、其の後幾多の盛衰を経て徳川時代に至りては終に天下祭りとして其の華麗を誇るに至つたので今は七月十七日と廿四日に行ひ、鉦と山とを出す。鉦といへるは頗る宏壯なるものにて高さ十丈餘下に車輪二双を左右に大繩を結び數十人にて之れを曳き上に稚兒とて眉目麗はしき少年の濃き化粧を施したるが寶冠を戴き、模様美しき紅の袖を纏して羯鼓を打ち左右に小童侍立して之れを踏ぐ（中には人形を以て稚兒に代へたるもあり）其の後に笛鉦、太鼓等所謂祇園囃子の人々乗り込み、音頭取の聲につれて悠々と曳き出すにて中にも十七日に出す長刀鉦の如きは頂上高く輝く長刀は三條小殿治宗近の作と傳へられ（こは寶物とし保存し今は和泉守金造、法師榮仙合作のものを以て之れに代ふ）上水引とて桐の四方を纏らせる裝飾は花色地に四神の模様を織出し、破風の彫刻は片岡友輔の刀、屋裏裏の雲は景元の筆にて各鉦とも技術の粋を集め、舞鉦の背後に垂れたる織物は佛國に有名なるコブラン織、放下鉦の雲は蕪村、月鉦の雲は應舉、其の破風は左甚五郎の作、雨谷鉦の見送りには弘法大師の筆（今は之れを保存し代品を用ふ）と一々に詮議すればいづれも美術の結晶ならぬはなく、山は鉦の如く大ならず且つ囃子方も乗らねど、其の上の人形は皆な名工の作と傳へられ、占出山、太子山、白樂天山、伯牙山、琴割山、木賊山、蕪刈山、山伏山、孟宗山、岩戸山等皆な他に於て多く見得べからざるもの

十七日は三條より南松原にまで至る市街、廿四日は三條より北二條までの祭りにて同じ祭禮なれど廿四日は山鉦の數も少けれど、此夕三基の神輿四條橋を渡りて還御あるにて之れには俗に「つるべそ」といふ鍛武者の多く従ひ行く奇觀がある。祇園祭の奉麗なるは之れのみならず、十七日の祭の前より鉦は組立てられて殊に其前夜は宵山とて夜更くるまで囃子賑はしく家々の軒には一の神燈を掲げ、美しき敷物を敷詰め、競うて秘藏の金屏風、銀屏風を立て、其の畫の名工の手に成るを誇り、都大路の兩側は燦然として輝くの觀あらしむるの類は、到底他國の模し能はざる所で、しかも其處に京都趣味の著しく現はれたるを見るのである。

今宮神社

やすらひ祭と壬生狂言 これも疫神に關係して都の古雅を偲ばしむるものは洛北紫野の今宮神社にて毎年四月十日に行はるゝやすらひ祭である。桓武天皇の頃より疫神なりとて崇拝するものも少からざる森中の一小祠なりしが、後一條天皇の長保年間天下大に疫病ありければ、當社に祈念し踊躍を爲して神靈を慰め、同三年疫神を紫野に崇め、これを今宮と號せしかば疫病漸く鎮りしと傳へ「百鍊抄」には「久壽二年四月、京中の兒女、風流を備へ、鼓笛を調べて紫野に參る世に之れを夜須禮といふ」とあり、夜須禮又安樂日に作り、此日午後一時、近村人、頭に赤旗を被り身に赤き襦袢を着し、異體の粧を爲して鉦太鼓を持つもの四人、同じ形粧にて羯鼓を持ち鳥帽子

を着するもの二人、皆な足半といふ草履やうのものを履き、大なる絹傘の上に種々の花を飾り、烏帽子裏襦を着けたるもの之れに従ひ口々に、

やすらい花よ

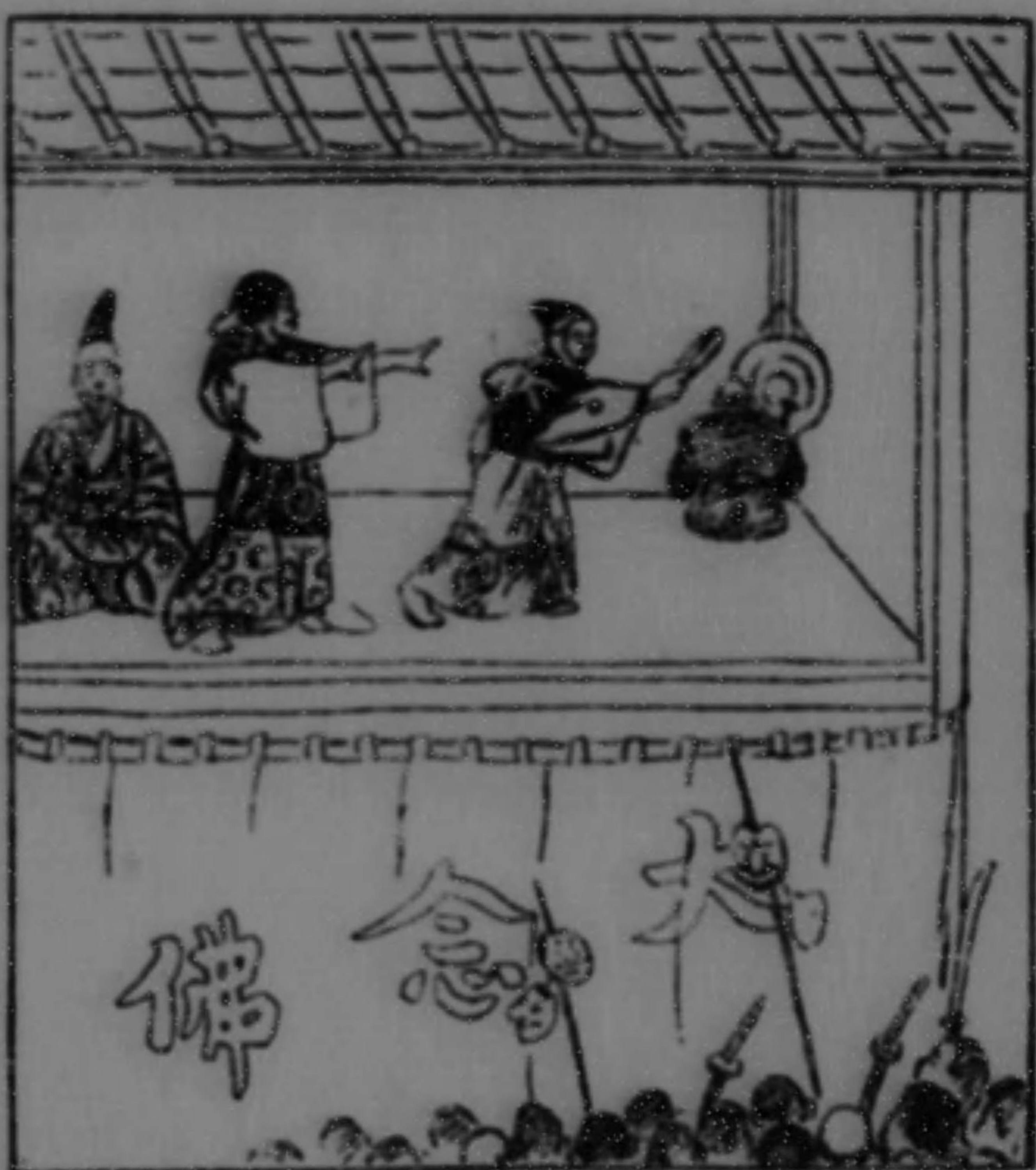
やすらい花よ、やすらいにさいた、あすない花よ、かしたる小袖を、とげ／＼かひな、やすらい花は

と唱へつゝ太鼓鉦鼓に合して今宮に詣で神前にて踊躍するので昔から「見るも阿房、見ぬも阿房」といふ一種奇態な祭祀風俗で、陽春四月菜の花の咲き初むる頃、長閑に踊り舞はるのである。

これと共に同じく「見るも阿房見ぬも阿房」と唱せらるゝは、洛西壬生村にある三味地蔵院俗に壬生寺といふ。此に於て行はるゝ壬生狂言である。當寺は一徳天皇の正暦二年快堅僧都の草創にして其後親悦上人此寺に大念佛會を修行せられしより例となりて毎年四月廿一日より五月の初旬にかけて演ぜらるゝにて狂言は假面を被り美麗なる衣裳を着しガンデン／＼と長閑けき囃子につれ、一切無言唯だ手眞似身振にて羅生門、桶取、炮烙割、蜘蛛切、愛宕参、熊東相撲、花盛人、大江山等の技を演じ、滑稽百出頗る兒童の嗜好に適し、都鄙遠近の兒童群れ集り、其の蜘蛛切に用ふる糸の如く紙を細く切りて蜘蛛の巣に擬したるものは疫病除けに功ありと珍重せられ、炮烙割に用ふる炮烙は箇分の夜男女各其の年と大念佛の三字とを書して奉納したるも

大念佛

大念佛



壬生狂言

のにて此狂言にて舞臺より落ちて襪塵に碎くにて其の破片を得て井水に投ずれば除虫の驗ありと信ぜられて居る。妻籠茶園の中に長閑に此のガンデン／＼の囃子を聞くは如何にも都の春らしき心地がする。

此壬生の北三十町許なる元月山引換寺、俗に團圓堂といふ所にて五月下旬より大念佛會を修し狂言

豊也

を行ふ。こは壬生の如く無言にあらずして言語を發すれど頗る古雅なるものにて文永年間、和輪上人の初る所と傳へられて居る。

又壬生の東に當りて瑞也堂にては胎念佛とて有髮の僧、毎又は盛華を叩き亂經に合せて踊る、關基瑞也上人が歡喜踊踏して念佛せられしに基因すといふ、又同上人が天曆五年、京都に疾病流行せし時、十一面觀音の大像を軍に載せ、茶を佛前に供し、自ら市中を引き廻り、念佛して人々に茶を與へられしかば病勢次第に衰へしに因みて同堂より茶を賣りを出す。

慶隆

大妻の牛祭 葛野郡太妻の廣隆寺に於て毎年十月十二日の夜子の刻(即ち十二時)より行はる、牛祭は又攘夷の意を寓したる本邦無比の奇祭である。抑も此寺は推古天皇の十一年、聖德太子が秦河勝に命じ、草創せしめたまひし古刹にて本尊藥師如來は向日明神の御作と傳へられ太子堂には聖德太子御自作の影像を安置し、(其御衣は天子御一代に一度づゝ賜るの習慣があり)其他珍品奇物少からず、考古の資となるもの多きが、今を距る九百餘年前、慈心僧都の此寺に來りて七日間通夜したまひし時、滿夜、一人の兒童あり、牛に乗り、赤青の鬼四匹各手に鉾を携へ陰隠として現はる、其の兒童を摩多羅神とし、其の鬼を四天王とし、之を五大尊と崇め、爾來毎歲此夜五大尊に乗り、摩多羅神に掛するものは白き厚紙にて造り、鼻は尖りて其三角の孔より覗くを得るばかり大いなる假面を被り、頭上には白紙にて作りたる異形の冠を戴き、杓子の如き斧二本を

摩多羅神



太妻の牛

挿し、身には白裝束を着けて牛に乗り赤鬼、青鬼に掛するものは手に銀紙にて貼りたる大なる牙を携へて之れに従ひ「五穀豐饒」「國家安全」「摩多羅神」等と大書したる大行燈をさげたるもの之れに前後し、摩多羅神は牛を乗り廻はして藥師堂に向ひて奇妙なる祭文を読む、祭文の段落二十八、一段を終る毎に「モー一ツ」といひ、末文に至り「此の如きやつばらに於ては長く遠く根の國まではらひのくべきものなり、敬白謹上再拜」と讀み終るや百雷の一時に落るが如き音して前面の堂内に駆け込む。さて此祭文は古來秘文として傳へらるゝのであるが「郡名所圖會」には左の如く掲げて

ある。

祭文

夫れ以みるに、性を乾坤の氣にうけ、體を陰陽の間に在ち、信を專にして佛につかへ、權をいたして神を敬ふ大尊地尊の體をしり、是非得失の品を辨ふる最偏に神明の慶忌なり、因茲車轍の幣帛をさしげ、敬んで應鳴神に奉上下神の恩を感ざるべけんや、是によつて四百の大家等一心懇切を抽て十神の儀式をまなび、萬人の逸興を備すを以ておのづから神明の法要に備へ、諸家の感歌をなすを以て暗に神の胎受をしらさんとたり、然間、さいつち頭に木冠を戴き、くわひ羅尾に角鼻高をからげつけからめ、牛に鞍を置、大團をすりむいてかなしむもあり、やさ馬に鞍をつけておどるもあり、はねるもあり、偏に百鬼夜行に異ならず、始是等の振舞を以て應鳴神を敬然し奉る事ひとへに天下安穩等家安泰のためなり、因之水く遠く推ひ退くべきものなり、先は三面の僧坊の中しにのび入て物取る饒益人め奇怪すはいふはいや、小車とも木々のなりもの取らんとて、あかり障子打破り甘なき法師頭もあやうくぞ覺ゆる、蓮はあさ置、額病、すはぶき、痘瘡、ようさう、間風、ことには、風瘡、虫かさ、虱瘡、あふみ瘡、冬に向へる大あかざり、并に、ひやいかひ、肉鼻たりおこり心地、及つちさはり、傳屍病、しかのみならず諸講法堂室のかわづなみ、禪習神人いさかひ合の中間、言費苦男の八たけり、無能女の隣ありき、又は空塔の楡皮喰ひぬく大鳥小鳥め、東教やぶる大鼠小鼠め、田の囀うがつうころもち、如此の取原において水く遠く根の國、そこの國まで、はらひのりぞくへきものなり。敬白蓬上再拜。

遷葬と時代行判

京都を淨化する加茂川の高野川と相合してまさに京都市に流れ入らんとする川の森に鎮座まします愛宕郡下鴨村の下鴨神社と同じく御手洗川の傍に鎮座まします同上鴨神社と

上下鴨神社

は古來鴨上下社と稱して歷代皇室の尊崇漢からず、幾度か行幸の榮に浴せる大社にして今官幣大社に列す。其の祭神は先きに引きたる「山城風土記」にいふ如く加茂建角見命并に其の女にまします玉依姫命を下鴨に祀る、此の玉依姫、一日瀬見の小川に遊びます時、丹塗の矢、河上より流れ來りしを床の邊に置きたまひしに、忽ち麗夫となりて遂に孕みて子を生みたまふ、これを加茂別雷命と號し、上鴨に祀る（山城風土記）故に一を鴨御祖神社といひ、他を鴨別雷神社といふ。此の加茂建角見命に就ては神武天皇の東征したまひし時、鳥と化して先導したまひし八咫鳥、（氏姓傳）にして又加茂縣主の遠祖（古語拾遺）として古く此國にましまし桓武天皇遷都以後は土地神として厚く祀られ、延暦十三年には從一位勳一等を授けられ、平城天皇の大同二年には正一位に進められ、嵯峨天皇の弘仁元年には有智子内親王を加茂の齋院とし伊勢神宮に准じて其の祝齋を重んぜられたので其後三百有餘年を経て齋院の事は廢せられたれど尊崇おさ／＼減せさせられず、其の祭祀は、昔、別雷命、天に向ひて父を祭りたまひし時、八尋屋の齋を分け穿ち吾は神の子なりと宣ひて天に昇りたまひ、家族戀ひ慕ひ哀み思ほす夜の夢に、別雷命、示現して天羽衣を造り火を燒き跡をさしげて走り馬を飾り、奥山の賢木を取り、又榮かつらの莖を嚴に飾りて待てば吾來ぬべしと仰せられしに基き（神祇志料）たるものにて欽明天皇の時、四月吉日を撰み人は猪頭を

蘇紀山來

被り、馬を馳け走せて此の神を祭りしより葵祭といひ、昔は四月酉の日に勅使たちていと厳かなる祭式あり、今は五月十五日と定められ勅使の外、内蔵使、山城使、檢非違使等皆な舊公卿の中に之れに當り、當日皇居に參集して平安の昔を偲ぶ、それ／＼の衣冠束帯の上、宜秋門より出でて下鴨社に至りこゝに祭事あり終りて、渡橋を渡り加茂堤を経て上鴨社に着しこゝにも祭事あるにて軋る音さへゆかしき御所車の粧飾置はしきを飾りつけたる牛の曳き行き、牛飼の童、白丁、雜式、騎馬束帯の勅使に鞍置きたる馬の其の後に續き、舍人、隨身等すべて昔ながらの行装は拜觀者をして千年の昔に返へりしかの感あらしめ、まことに都ならでは見られぬ床しき祭事である。

加茂の鼓馬

此祭の外に毎年六月五日には鼓馬の神事がある。こは昔大内裏武徳殿に於て執行せられし騎射の古例によりて起りたるものにて馬數十二、一年の月數に當り、神官等黒赤二種の裝束をつけ、これに隨して勝敗を争ふ、其の扮装の優美なることも亦中古の風を想はしむるものである。

平安神宮

鴨は千年の古祠にしてまこと山城の祖神とも崇むべきも、此の京都を開きたまひしは桓武天皇にて明治廿八年遷都千百年を記念して新に此天皇を祀りたる官幣大社平安神宮は上京區岡崎町に創建せられ、碧瓦丹雘、大内裏の昔なる大極殿を模し、南に應天門あり蒼龍白虎の二樓を東西に

時代祭

相對し、步廊兩腋にあり、神殿は白木造りにて大極殿の後にありて例祭は四月十五日、尙ほ十月二十二日に神樂式ありて此日時代行列なるもの行はれ、先頭は維新時代にて筒袖の引袈羽織に鍔袴短く穿ち、後鉢巻にて長刀を横へたる又は赤白の毛を被りてミニヘル銃を肩にしたるなど英式銃陣の太鼓につれて進み、次ぎは徳川時代にて金紋先箱の大名行列、其の次ぎは織田の入洛に擬したる騎馬武者、續いては鎌倉時代の流鏑馬に擬して弓矢携へし狩裝束、其次ぎが藤原時代の公卿小舎人など文官行列、さて其次ぎは延暦時代の武官の扮装、それに續いて同時代の文官裝束次で古樂器の伶人、これより御弓御太刀御禰など前後にありて風聲行き、最後に市長其他の燕尾服、シルクハットにて供奉するにて一千年の歴史を一系列の中に縮寫したる趣味深き祭式である。

稻荷大明神 京都の俗間信仰を支配する最も大なるものは普通に伏見の稻荷と稱せられ、紀伊郡深草村にある稻荷神社である。「山城風土記」には「秦中家忌寸等の遠祖伊呂俱公、稻梁を積んで富裕なり、乃ち餅を以て的とせるに化して白鳥となり、飛翔して山峰に居る」とあり、初めは秦氏の遠祖を祀りしものたらんも、今は此白鳥と化して山に登り稻の實を含みて來現したまひしを當社の神、田中の社とし、主神としては倉稻魂命を祀り、別に素戔鳴尊并に大市姫命及び此田中社と四大神を客神とし合せて五座の神を祀る。其の稻荷といふは弘法大師の東寺を臨ふや此神

稻荷の名

を以て鎮守とし、曾て老翁の衫を荷へるに遇ひ、後、又稻を荷へるに遇ふと云はれしに基く(廿二社在式) 天安元年正四位下を授けられ、貞觀十二年從三位に叙せられ、天慶三年に至りて正一位に進められ、之れより正一位稻荷大明神の名天下に喧傳し、例祭は五月七日、京都市松原通り以南を氏子とし、神輿五基行裝甚だ美を盡し、伏見河原より出で、東寺の御族所に至り、各町の氏子旗を立て、之に列し頗る盛觀を極め、昔は東寺寺務僧正を初め一山の衆僧東西に列する等の式があつたが今は廢せられた。さて此の稻荷と狐との關係に就ては既に第一篇第三章第二節にもいへる如くにて其の由來明かならねど「和漢三才圖會」にも「相傳ふ狐は倉稻魂の神使なり、天下の狐、悉く洛の稻荷に參仕す、人、稻荷社を建て、狐を祭り、其の祭る所のは位、他の狐に異る」とあり、萩原貞宅の「郡記行」に我が家の稻荷に正一位を受けたる狀を記して、

十四日、古郷の屋敷を守る三光稻荷の社はまだ正一位の官もなきまゝ、これ土産の第一と稻荷の神職松本筑後守といへるに頼み置きしに、今日友達と雨降るをも厭はで、立出で、竹田通りを行く、錢取橋を渡り、大和大路に出で、稻荷の社司松本氏へ参りて清服に代り、社殿に於て神事終りて立ち戻り位を納めたる箱を受ける

と、諸國の稻荷も亦此の如くして正一位を受けしか、社後に三個の峰ありて幾多の攝社、末社峰

標筋谷の間にありて順次之れを崇拜するを御山廻りといひ、狐の棲むと見るべき穴あれば白米、豆又は油揚げを供するの風がある。

此神は元明天皇和銅四年二月十一日、午の日、此山に出現したまへりとして今も二月初午の日を歳日とし、賓客殊に多く、社前の入形店にて饅をくはへたる土裝の狐を賣り、之れを「御稻荷さん」と名け、持ち歸りて神棚に祭る。

此祭神に就ては吉田東伍氏は「大日本地名辭書」に於て「秦氏の祖とし、同村の南方伏見町に近き所にある藤森神社に就て秦氏の祖にして軍陣に功烈ある人を記るものか」といひ、且つ「藤森の東に渡邊あり即ち秦氏の墓にや、稻荷社五座の一たる四大神は必定藤森大原の訛にて秦氏の祖富原の人を祭れるものなるべし、要するに稻荷、藤森は同類一氏の祖神たるべきや明白なり」とある。併し併聞にては藤森社を全く別のものとして前者を福徳の神とするに對し、後者を軍神として神功皇后、異國降伏の時の御冥を埋められしといひ、又舍人親王或は早良親王を祀る所とも傳へて居る。

由緒ある神社 近畿の地由緒ある神社多きが中にも、帝都たりしこの國に殊に多く、一々に詳述し難ければ、今たゞ、大要を挙げんに京都市上京區馬喰町には北野神社がある。既にいへる如く、菅原道眞の靈を天満大自在天神として崇めたので、火雷の神として、また文學の祖神として祀られて居る。この社には他に例なき芋蕘祭とて芋蕘にて、神輿屋敷を葺き、紅白の千日紅を以て鈴の緒を造り、蕃椒、酸漿等を以て通路とする筈、すべて山海田野に生ずる植物のみにて、

北野の芋蕘祭

立派なる神輿を造り之れを昇ぎ廻るにて毎年十月四日を例祭とす、昔、豊作を喜びて其の年を祝するたれに行ひしに始る由にて今も辨作十分ならざる時は行はずといふ。此の北野神社の西北二町に官幣大社平野神社がある。祭神四座、今木神、久度神、古開の神、相殿比賣神、今木の神は

平野神社

桓武天皇の御母高野皇太后の遠祖を祀るにて今木は今木の義、相殿比賣神は天皇の外祖母贈一位大枝朝臣眞妹の祖と考證せられ（本朝月令其他）「公事根源」には第一は源氏、第二は平氏、第三は高階氏、第四は大江氏、別に祀るものは中原、清原、菅原、秋篠四姓神なりとあるが、伴信友は之れを考證して「平野社司などの説に皇太后に御ゆかりの和、大江、秋篠、菅原の四氏に、桓武天皇の御後の平、長岡、良峰、久賀の四氏併せて八氏の祖神におはせりといへるを後に其の氏々の稱を忘れ行きてたゞ八姓の祖神とのみいへることのみ傳はりけむを、又後にさかしらの人のよくもたづね考へずして、とりくんに誣妄せるにぞあるべからむ」というて居る。同じく葛野郡松尾村に洛西第一の大社と云はる、官幣大社松尾神社がある。大山咋神を祀る、尙ほ一座は神祕にて一説には加茂の玉依姫、丹塗の矢化して神となるとあるこれ松尾の神なりともある（山城名所寺社物語）尙ほ加茂別雷神をも配祀し、山上を別雷の峰といひ、神靈の初めて降臨せしといふ大巨岩あり、當社の神は太古大堰川を開き丹波の國を開き、又稻と水とを守護したまふ

松尾神社

徳の宮

て造酒家等信仰盛んにて山上大杉谷より清水を汲み來りて醸酒に混すれば腐敗することなしといひ傳へて居る（きやうと）松尾の東、海津村に官幣中社梅宮神社あり、酒解神、大若子神、小若子神、酒解子神を祀り、昔、嵯峨天皇の後、檀林皇后、皇子なきを憂ひ此酒解神に祀りて妊娠したまひ、當社の清砂を御座の下に敷きて太子を降誕したまひして今も産月に臨む婦人當社の土砂を取りて安産を祈る風がある。其の他、古來國家第二の宗廟と云はれたる官幣大社男山八幡が

石清水

真部八幡町にある、同社は清和天皇の御宇に武内宿禰の後裔にして常に宇佐八幡宮を崇信したる南都大安寺の僧行教、宇佐に詣で、參籠すること一千日、都近く移り住みて國家を鎮護せんとの神託を受け、更に夢告によつて此地に勧請したるにて、應神天皇、神功皇后、玉依姫の三柱を祀り、（宇佐八幡の條參照）行教、神體を見奉らんと祈りし時、三尊の彌陀現れたまへり（元亨釋書）と傳へ、古來神佛混淆で社殿頗る莊嚴である貞觀十一年十二月、使を遣はし、幣帛及び宣命を捧げて新羅の寇賊を斬り「皇太神は我朝廷の太祖にましまして全國の天下を護りたまふ大神に坐せば、國內諸神等を誘ひ彼の寇を追却けて神國の故實を失ひ給ふこと莫れ」（三代實錄）と仰せられしを初め歷代の尊信淺からず、終に第二の宗廟として崇められ、其の武勇の神にましますを以て、源賴信は平忠常を討つて此神に報賽し、其子賴義も之れを崇信し其孫義家は八幡太郎と稱せられ、

武家と八幡

頼朝兵權を握るに及び殊に此神を崇め、爾來源氏の氏神として尊信せらる、これに就て吉田東伍氏は「清和天皇より出でたる源氏は清和天皇の時に創建せられし此男山を以て氏神と定めしと想はる」(大日本地名辭書)というて居られる。乙訓郡大原野村には官幣中社大原野神社、京都市吉田町に同じく吉田神社がある。共に奈良の春日神社と同體にて大原野は桓武天皇、長岡遷都の後、こゝに祀られ、吉田神社は平安建都の後、貞觀年中藤原山蔭の創始する所で、一條天皇即位の年、大原野に準じて祭祀せしめられたので「御堂關白御書」には「奈良京の時は春日社、長岡京の時は大原野、平安城の今の吉田社、京都の咫尺を占む神祠の鎮護あり」と。

大原野と
吉田

以上の外に近く明治に入りて崇徳天皇の靈を西成の白峰より移せし官幣中社白峰神社、和氣清盛を祀る勝王神社、三條實實を祀る櫻木神社、嵯峨信長を祀る建勳神社、豐原秀吉を祀る豐國神社の共に別格官幣社に列せられたるがある。

魔王

鞍馬と愛宕 京都を距る北三千里許なる愛宕郡鞍馬山は比叡山の峰に續ける峻嶺にして其の西北貴船との間に老杉鬱として夏尙ほ寒く、巖々たる怪岩路を遮り、中に大き六圓、天に冲するの老杉あり、注連を以て之を繞らし、天狗の棲家といひ、之れより下、谷深き所に魔王大僧正を祀り、これを僧正谷と名け、昔、源義經の此處に於て異人に劍法を授かりし所といひ、祠前の累々たる

寅の日

岩石面に刀痕の如きものを遺す。寺傳にては此魔王を以て當山中興、峰延和尚延喜年中此處にて感得せられた所といひ、日本全國天狗の巨魁と稱せられ(本朝神社考)、寺に魔王の神名帳なるものあつて天狗の總支配所なりと傳へらる。寺は延暦年中藤原伊勢人の貴船明神の靈告により鞍馬ける白馬を放ちて此寺を相し山中に得たる毘沙門天を本尊として創建せる所にて、毎年正月初寅の日は洛中の老若男女山路を賑はずして群參する。毘沙門天には十種の福を興へたまふの誓願ありて、商賣、虎の千星を走る勢ひの如く繁昌せんとの縁をとりて此日に詣づるのである(各名所圖會)此山には竹伐並に火祭といふ奇祭がある。竹伐に就ては「郡名所圖會」に

鞍馬の竹
伐

六月廿日の竹伐といふは、當所の俗人本堂と西の觀音堂に集りて一丈ばかりなる青竹を双方に立てをき本堂は近江方、觀音堂は丹波方となづけ、一山の院家法義を備ふし互に合圖の縁を合せ、かの竹を三段にきりて堂を下り、一の曲切石のもとへ足に任せて走りゆく、早きを勝ちとする也、此由來は往昔南都相違寺の僧正此山に分入りしに此神の大蛇あつてちまたに騒る、僧正しばらく持念ありければ、一の蛇息に滅しけり、今一に向ひてけふよりして人を惱す事なく、又當山の用水水く絶つ事なかれとて放ちやられけり、それより本堂の北にある開道水戸々として湧出、今にたゆる事なし、しかれば竹はかの蛇になぞらへ、是をきり、魔を掃ふなり。

とあり、今も當日毘沙門堂の前、東方縁側の柱に切口一尺許りの青竹の根を伐り拂ひたると、楠

細き根こそぎの儘のとを透に横に各々二本を結び四方縁側の柱にも此の如くし、根のなきを男竹と稱して峯越上人に呪殺せられたる雄蛇に擬し、根あるは護法善神とあがめられたる雌蛇に擬し、法窟の後、總達四人、近江方、丹波方に分れ素絹の袖を函賣の紐にて絞り上げ大刀を振つて之れを伐り、直に山の中腹まで馳け下るにて四人の中最も迅く伐りたるを勝とする奇祭の祭事にて之れを天狗の竹伐といふ「郡名所圖會」には「扱又夜に入つて里の俗を一人本堂の中に坐せしめ院衆、法力を以て祈り殺し又祈り活す事あり、彼の俗人にはかねて毘沙門天、此事を告げ給へり殺を止むべき時にも告げたまふ奇妙不思議のことども」とあれど、そは今行はるべきことではない。火祭は毎年十月二十日に行はるゝは、甲斐の吉田に於ける如く道路の中央に松の根、杉の根等を積み松の木を以て之れが外側として、三角塔の如く爲したる篝火を五間又は十間を隔て、置き、夜に入りて、之れに火をつけて焰々と燃えしめ、夜半近くに至れば友禪の着物に同じ前垂をかけ向鉢巻勇ましき十五六歳より四五歳までの男兒が小は三四尺大は五尺ばかりにて中に小柴を束ね外を板にて圍み、藁藁にて縛りたる炬火を持ち「サイレヤ、サイリヨウ、サイレヤ、サイリヨウ」と誦ひながら山路を或は上より或は下より馳せ違ひ、祭事初ると共に一齊に登山し、山内の鎮護たる山姥神社に詣で、神輿は急勾配の石階を下るなれば、先棒を昇ぎ居る二人の若者の

火祭

芝神樂

前には數人集りて殆んど兩脚天に朝する如くに擔ぎ、神輿の後には長き葺網二條を繋ぎ村内の婦人之れを引き隨ふ、かくて石階を下りて神幸ある等他に多く其の比を見ざる祭禮である（京都と奈良）其他）此鞍馬の西北更に山深き所にある貴船神社は昔、伊弉諾尊が斬つて三段としたまひし迦具土神の一段高懸の神を祀り本社奥六町ばかりに老杉森々たる奥宮の社殿の床下には神代よりの龍穴ありと傳へられ、古來雨を掌りたまふの神として崇信せられ、創建の年代は詳ならねど文武天皇の白鳳六年に社殿を造り替させたまへりといへば古きこと明かにして今は官幣中社に列して居る。此神社には古來願主ある毎に行はるゝ芝神樂の神事なるものありて、これは又火祭とは反對に昔は里中の家々燈火を消し、高談、外出又は戸壁の隙より窺ひ見る等堅く禁じ、神樂參役の神官並に八乙女は三日前より潔齋し、八乙女は白衣、下げ髪、垂帶綱、懸懸、槍扇を手にし、左の肩に斑笠、面竹の杖を持ち神殿に神樂を行ひ、それより奥宮へ、人家近き所にては神歌を伴むるなど神樂の式あり、其の行事に唱へらるゝ神歌は「比波天留土毛多惠須太有多理、丹會數陀不堂利」と密書せられたものであるといふ。（郡土光聖説）

丑の時参り

古來此神社に附随したる迷信に失戀の女の丑の時参りして祈願を奏すべき所となつて居るので、彼の謡曲「國輪」の女の此社に祈願を奏めて一念の願遂鬼となつて夫と仇し女とを元ひ殺さんとせし物語な

どに原因し、且つ此社の末社にある熊山神社は天孫瓊々杵尊に擬はれたまひし磐長姫命を祭り、該社の神、熊踏びの神として奉らるるよりかく此神社に關連し来りしが其の丑に縁あるは上加夜神社より丑の方角に譲座せられたまふに由るのであらう(同書)

山城の西北隅丹波に跨りて屹立する愛宕山は古來天狗の棲家と稱せられ、林羅山の「本朝神社考」には

太郎坊

昔、文武の大寶中に、役小角此の山に上らんと欲す。雲海上人と云ふ者あり、嵯峨の奥に住座す。小角同じく行いて清瀨に到る。瀨の上に雲起り、屋下に雷鳴る。雨降ると車輪の如くにして進む可らず。二人既而密言を以て祈禱す。日俄にして天晴る。少憩して地蔵、彌陀、富徳、毘沙門、光を其の上に放つ。或は愛染を加へて五佛と曰ふ。大杉あり、天に纏り地に纏る。天竺の大夫日長、清土の大夫善昇日本の太郎坊(太郎坊、一の名は榮橘太郎)各々其の眷屬を將みて大杉の上に用ず。九億四萬餘の天狗あり。神頭鬼面、披毛戴角、二人に告げて曰く、我等前二千年、靈山會上に佛の附屬を受けて大魔王と成つて以て此の山を領し群生を利益すと、言ひ訖つて見えす。二人因つて杉の樹を號して清瀨四所明神と爲す。瀨の上に千手大士を安ず。五岳を置いて以て其の地を鎮む。朝日の峯と曰ひ、大鷲の峯と曰ひ高嶺山と曰ひ、龍上山と曰ひ、加賀山と曰ふ。小角其さに狀して以て閉す。朝廷嘗有つて神廟を朝日の峯に立つ。香燈今に絶えず。靈湯更めて摩訶と名く、開山第一祖と爲す。光仁帝位に即いて慶俊僧都に敎して此の山を中興せしむ。和氣清盛が建つる所なり。白雲寺を朝日に、月輪寺を鷲の峯に、神願寺を高嶺に、日輪寺を龍上に、傳法寺を寶篋山に、五寺の外五千坊を造る。桓武の時に當つて岩字を

改めて漢字と成す。愛宕山大體與と號し、此の山を以て盤龍家(龍場)と爲す。とあり、「清瀨雜記」には

愛宕山の太郎坊を何ものぞとおもふに、洛陽從六位紀朝臣良國が子、高雄の眞濟なり、神本の僧正と號す。天安の帝、不豫の時、眞濟、病に侍りて加持せしに驗なくして崩じたまひしより常の不快あり、又俗に傳ふ、眞濟、樂殿の后にあひ、其の色にまどひて天狗となる、これ太郎坊なり

と。今愛宕神社あり、伊弉册尊、火産靈命を祀り、火災除けの神として崇信せられ、別に太郎坊社、天狗社等あり。郡人士が愛宕詣の遊戯として樂むものに土器投げあり、途中の茶店に於て賣れる土器を購ひ、山上より谷間を目がけて投げ其の風に隨つて輕揚し漸次落ち行くさまを眺むるにて或は溪間に輪の如きものを設け、それを滑らすを以て願ひ事かなふとするなどの俗信も付加して今も行はれて居る。

清水と三十三間堂 東山葦微の間、社寺點綴せられて皆多少の山緒を有し、郡人士の信仰地なり靈聖地たる中にも神にあつて祇園、佛にあつて清水は四時賽客斷えず、京都の風俗に影響する所少なくない。此清水寺は光仁天皇の寶龜九年、僧延鎮木津川の水源に瀦りて異人行寂居士に遇ひ

清水寺と
俗名

觀世音を刻むべき靈木を得、其の草庵に住して之れを刻みしに、延暦二年坂上田村麩出で、繼して延鎮に會し、湯仰の念禁じ難く、其の十一面四十臂の千手觀世音を本尊として初めて堂宇を創し、後、桓武天皇、都を此地に遷したまふ時、殿舎を賜ひて觀音堂を造營せしめたまひ、山を音羽と呼び寺を清水寺と號し、平城天皇は紫宸殿を賜うて之れを伽藍とせしめたまひ、懸崖に棧を架して俗に所謂舞臺としたるにて滿都一畔の中に落ち、下に音羽の瀧あり、細き三筋の水を落す所顯あるもの此瀧に下りて本堂と奥の院とに詣づること三十三度なれば成就すと、奥の院は延鎮草庵の跡なりといひ、本堂の後には地主權現とて大己貴命を祀り此の附近の産土神とせられ、門前にある子安塔は桓武天皇の女御余子、出産の月に病憫ありしが觀世音に祈りて皇子誕生ましまし、かば御感ありて建てたまひし(きやうと)と傳へ、平産を祈るの婦人之れに詣づ。門前の坂より八坂の方に行く所の坂にて轉べば三年目に死すとて之れを三年坂といふ(或は上に子安塔あるより産寧坂の誤りともいふ)等諸種の俗信は付加せられて居る。

天狗塚

宇治郡山科にある中尾山法興寺は俗に清水の奥の院と稱せられ、延鎮、行願居士の跡を考ねて此地に來れば屢の地上に委しありければ、こゝより登天したるを知りしと傳へ、本尊は千手觀音にて、堂の左方の庭間に天狗塚あり、此塚の高き所の木皮所々剥脱して削るに似たるを天狗の時々來り住むに由るといふ。

清水より南して本願寺溪の靈廟(大谷溪の靈廟は祇園の南にあり)を過ぎて大佛に出ることが出来る。

大佛

大佛殿方廣寺は天正十四年豐原秀吉の領地にして堂の高さ二十丈、佛の高さ十六丈、と稱せられたが繼度か火災に罹りて今は大佛の半像を遺りて僅に昔の面影を遺す、此寺に其撰文に國家安運の四字ありしを以て徳川家康を怒らしめ高さ一丈四尺徑り九尺二寸、厚さ九寸の大輪あり、其の門前に秀吉の朝服を從せしめし時、諸將敵兵の耳を切りて之を秀吉に展覽せしめしものを埋めたりと云はる、耳塚がある。

三十三間
堂の由来

大佛の南に俗に三十三間堂と云はる、靈藏王院あり、長承元年、鳥羽上皇此地に三十三間堂を建て得長壽院と名け、一千一福の觀音を安置したまひ、後白河上皇亦更に三十三間堂を建て一千一福の觀音を安置して靈藏王院と號せられたので、其の縁起は法王頭痛の御惱みあり熊野に行幸ありて祈らせたまひしに洛陽因幡堂に天竺より渡りし妙醫ありとの神託を受け、歸りて此堂(京都府市松原東洞院西にあり因幡藥師といふ)に參詣したまひしに滿願の夜、一人の僧現れて、音類野にあつて靈藏坊といひ、海内を行脚して佛道を修せし功により今、生に出でたまへど、前生の福未だ朽ちずして岩田川の水底にあり其の頭より佛の木貫き生じ、風の吹く毎に動揺し、ために御惱みあり、其の頭を取り上げなば苦惱を免るべしといふかと思へば夢覺めたまへば河底より其の福を得、之れを觀音の頭中に收め、且つ其の佛の木を以て堂の梁となさしめたまひしに由